

小さき兄弟会

臨時総集会

ラ・ベルナ - アシジ 2006年

明晰さと大胆さをもって

再創立の時に

総長の報告書

兄弟ホセ・ロドリゲス・カルバッリヨ OFM

ローマ

目次

挨拶	6
恐れとおののきをもって.....	6
序文 内なる確信.....	9
福音は今でも変わらずに福音である	9
危機にある私たち	10
現代は大胆さと勇気を必要とする時代.....	12
現代は私たちに信仰の力を求めている	13
聖フランシスコと彼の生活様式は今でも通用する	14
前書き.....	16
第一部 過去を感謝の気持ちをもって思い起こす.....	17
記憶の守護者.....	17
過去を成長の糧として生きる.....	19
第二部 情熱をもって現在を生きる	20
第二部 情熱をもって現在を生きる	21
I 祈りと献身の精神.....	23
活力のしるし	24
祈りと典礼の生活の意味の再発見.....	24
御聖体を祝い、崇敬することの大切さの再発見	24
神の御言葉の重要性の再発見.....	25
回心への招き	25
兄弟共同体の中で祈りに捧げる時間.....	26
典礼の質	27
隠遁所と隠遁生活.....	28
良い状態をさらに良くするために	28
祈りを単に守ることから創造的な忠実さに変えること.....	30
祈りを私たちの活動の中心にする.....	30
生活の中で、ミサと御言葉の祈りに満ちた傾聴とゆるしの秘跡を優先すること	31
II 兄弟的な共同生活	34
活力のしるし	35
兄弟共同体についての新しい特徴（プロフィール）	35
兄弟性を築く方法.....	36
修道院長の職務	36
コミュニケーション	36
協力.....	37
回心するように招かれて.....	37
幻滅と懐疑主義.....	37
分裂.....	38
コミュニケーション（意思の疎通）の不足	39

マス・メディアの侵略.....	40
個人主義.....	40
良い状態からさらに良い状態に移行するプロセスの中で.....	41
共同生活から交わりの生活へ.....	41
中心を活動から存在と活動の調和へと移行させること.....	43
効率の虜 ^{とりに} から「無償の愛」(agape)の喜びへ.....	44
単なる友情から、あるいは単に利益を共有する関係からキリストのうちに一致する家族へ.....	46
ファリサイ人の態度から収税吏の態度へ.....	47
III 小 さ さ、貧 し さ、そ し て 連 帯.....	48
活力のしるし.....	49
周辺地域への移動.....	49
質素で本質的な生活の選択.....	50
正義の推進者として、また、平和の道具として.....	50
協力態勢.....	50
連帯への呼びかけに対する応答.....	50
回心への招き.....	51
私たちの占める社会的な立場.....	51
連帯.....	51
私たちの財産、それはいと高き清貧.....	52
良い状態からさらに良い状態に移行するプロセスの中で.....	52
清貧の誓願に対する理解を深めよう.....	53
労働を恵みと考えよう.....	54
個人主義的な経済から兄弟的で、透明性のある連帯の経済に移行しよう.....	55
正義と平和と和解のあかし人となり、推進者となりましょう.....	56
IV 福 音 化 - ミ ッ シ ョ ン.....	58
活力のしるし.....	59
新しい形の福音化を求めて.....	59
福音宣教の第一の方法としての生活による証しの再発見.....	60
「諸国の民への」ミッションを目指して.....	61
伝統的な福音宣教方法の活性化.....	62
回心への招き.....	62
フランスカン的な精神に欠けた福音宣教.....	62
質の高い福音宣教をするにはもっと十分な準備が必要.....	63
良い状態からさらに良い状態に移行する.....	63
守りの姿勢の福音宣教から「新しい福音宣教」へ.....	63
福音宣教活動プロジェクトからフランスカン的な福音宣教プロジェクトへ.....	65
「内向きの(ad intra)」宣教(ミッション)だけをする兄弟共同体から、外向きの(ad extra)」 宣教(ミッション)もする兄弟共同体へ.....	66
V 養 成 と 学 問.....	68

活力のしるし	68
養成と学問に関する深い考察	68
養成としての生活	69
生涯養成の大切さ	69
養成の基本原則	69
フランスカン独特の養成と共通の養成	69
養成の方法	70
回心への招き	70
生涯養成	70
実践的な養成	71
召命の司牧的配慮	72
養成担当者の育成と養成担当者になろうとする兄弟の識別	72
知的養成	73
ブラザー（修道士）を志す兄弟と司祭を志す兄弟のための共通の養成	74
良い状態からさらに良い状態に移行するプロセスの中で	74
守りの養成から忠実さの養成へと移行すること	74
自分に与えられた賜物を大切に作る養成	75
責任と自由についての養成	77
キリストへの情熱と人類への情熱を持って生きるように養成すること	78
VI 人数の減少と召命の脆弱さ	79
人数	80
減少の理由（原因）	80
召命が脆弱な理由	81
忠実さを支え、堅忍するように助ける方法	82
第三部 信頼をもって未来に向き合う	85
識別の時	86
愛とあかしの時	87
質問と提案の時	88
自由とおおらかさの時	88
交わりと兄弟愛の時	89
協力の時	90
再編の時	90
統合と融合の時	91
結合の時	91
結論 沖に漕ぎ出しなさい (Duc in altum!)	93

挨拶

「主があなた方に平和を与えてくださいますように！」

挨拶と感謝

1．親愛なる兄弟の皆様。ようこそお集まりくださいました。深い喜びをもって皆様を抱きしめたいと思います。いと高いお方が兄弟フランシスコに示された言葉「主があなたに平和を与えてくださいますように」(遺言 23)をもって挨拶の言葉といたします。

2．偉大なる「施し主」である主の賜物の惜しみなさとしが、世界各地から駆けつけてくださった兄弟たちのこの集まりに反映されています。大いなる慈しみによって私に多くの兄弟たちを与えてくださった、すべての善の与え主である主に対して、感謝を捧げます。

主よ、あなたの善意に感謝いたします。主よ、あなたの忠実さに感謝いたします。あなたの霊を注いでくださり、国も人種も言語も文化も異なる多くの兄弟たちを呼び寄せて、キリストのうちの一つの家族としてくださることによって、聖霊降臨の恵みを新たにしてくださったからです。主よ、感謝いたします。「教会として造られた処女」(「幸いな処女マリアへの挨拶」1)、「慈しみの聖母」、「すべての恵みの仲介者」であるナザレのマリアによって、私たちに母を、美しい愛の母を与えてくださり、私たちが彼女の息子として彼女の家の一つに結んでくださっているからです。あなたの僕であり、私たちの兄弟であり師父であるフランシスコを、800年経ってもなお、私たちの「*forma minorum, virtutis speculum, recti via, regula morum*」としてくださっていることに感謝いたします。

恐れとおののきをもって

3．代議員の皆様、そして皆様を通して会のすべての兄弟に、恐れとおののきをもって申し上げます。なぜなら、私には現在の真実を語る適切な言葉がなく、未来の扉を開く鍵もないからです。私はただ、主が愛に満ちたみこで、会の奉仕者の務めを私に任せてくださり、さらに、兄弟たちのために「朝の歩哨」(イザヤ 21:1-12 参照)となり、純然たる恵みによって、私の弱さにもかかわらず与えてくださった希望の証しとなる責任をお与えくださったのだと信じております。

私はあなた方に恐れとおののきをもって申し上げます。なぜなら、兄弟たちの具体的な生活について、また、恵みと救いの歴史について話さなければならいからです。それらはすべて、私たちの個人的な生活、また、兄弟共同体としての生活の中で主が書いておられるもの、称賛と尊敬に値するものだからです。

私はあなた方に恐れとおののきをもって申し上げます。なぜなら、兄弟たちの生活について話すに当たっては、彼らの捧げる実際の生活が話よりもずっと豊かだからです。私自身について言えば、私は「見えることだけ」を語るができるのであり、それでいて、生活、特に、私たちの最も深いところにある態度、感情、情愛、信仰、希望、愛徳は「目に見えないこと」であり、それらを通して神は兄弟たちの生活を豊かにしてくださるのだということを私たちは知っています。

私はあなた方に恐れとおののきをもって申し上げます。なぜなら、私の行う評価は、どんなに慎重に行っても、主観的な評価にすぎないからです。私がこれから提案しようとしている会の生活の姿は、必然的に、不完全なものにならざるを得ませんが、明らかに改善可能です。ある兄弟たちは、私が述べることに反映される個人的な体験を理解できないかもしれませんし、またある兄弟は十分に理解されていないと感じるかもしれません。また、ある兄弟は傷つけられたと感じることもあり得ます。ですから、最初からあなた方をお願いしたいのです、私をゆるしてほしいと。私の胸の内を申し上げますと、私はこの報告書を書きながら、自分の言葉が神の御言葉だけを響かせることを、そして、私の声を通して、あなた方が死の国に命を与えることがおできになる主なるキリストの声を聞くことを、切に望んでおります。

私の言葉がナザレのイエスの御言葉のように、あなた方の心に聖霊の息吹をもたらすようにと天の御父に祈っております。そして、天からの恵みが私たちの心に触れ、私たちを恐れと悲しみと郷愁の思いから解き放ち、灰の下に眠っている火を再び燃え上がらせてくださるようにと祈っております。

私は自分が能力以上のことをしようとする危険を冒しているのを知っております。主よ、どうか正しい信仰をお与えください。未来のための提案をすることによって過ちを犯す危険があることを知っております。主よ、どうか確かな希望をお与えください。私たちの可能性をこの世の基準で測るといふ危険を冒していることを知っております。主よ、どうか完全な愛徳をお与えください。主がお与えくださる信仰と希望と愛徳に基づいて、私は皆様に申し上げます。私は、私たちがここに集まっているのは、会の生活に影響を及ぼすような決定を行うためであること、そして、今のこの集まりは、恵みの時であり、それを私たちは活用しなければならないことを確信しております。主は近くにおられるからです。主がしもべである私に委ねられた兄弟たちへの愛ゆえに生まれた私の言葉が、主の恵みによって役立つものとなり、会全体が現代の要求にふさわしい方法で、召命の道を決然と歩むことができますことを、そして兄弟たちが、800年前に始まった私たちの歴史の新しいページを、できればもっと明るく書くことができますことを確信しております。私は皆様と共に歩みたい、皆様と共に、私たちの主イエス・キリストの聖福音を生きたい、兄弟姉妹の皆様と共に、すべての人々に仕えたいと願っております。

そして、無知と忘れやすさのゆえに私一人ではできないことが、あなた方の手によって改善されますように。そして、「会の真の総長である」聖霊の力が私たちを未来へと導き、かつて「貧しく謙遜な」フランシスコと共に働かれ、800年にわたる恵みの時を多くの兄弟姉妹と共に働か

れたように、これからもいつも私たちの中でその不思議な業を行われますように¹（ ）。

2006年5月8日、恵みの仲介者であられる私たちの聖母の祝日に、ローマにて

¹ 奉献生活 110 参照。

序文 内なる確信

4．私はこれらのことを行動の規範と考えるべきか、識別基準と考えるべきか、それとも、夜道を照らしてくれる光と考えるべきかよくわかりません。多分、そのいずれも正しいのでしょう。私はこれらをここで「内なる確信」、神の恵みを通して私の心に刻まれた確信と呼ぶことにいたします。

私の個人的生活において、また、すべての兄弟をよりよい方向に励まし促すという職務²において、私を突き動かすある種の確信があり、私はそれをあなた方と分かち合いたいと思います。そうすることによって、あなた方は私がこれから述べることをよりよく理解できるでしょう。私は、これらの内なる確信について私の生き方が示す矛盾に気づいておりますが、だからと言ってそれらの確信が私の良心の規範であることをやめたり、判断基準になることをやめたり、正しい方向に導くために主が私の生活に灯してくださった光でなくなったりすることはありません。

福音は今でも変わらずに福音である

5．このことは私の確信の第一項目です。福音は美しい恵みと激しい愛を伝えてくれる知らせです。「天地の主である父よ、あなたをほめたたえます。これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、幼子のような者にお示しになりました」(マタイ 11:25)とあるように、それを幼子のような心で受け入れる人を変える力を持っています。福音は、「お言葉どおり、この身に成りますように」(ルカ 1:38)と言われたナザレのマリアのように、貧しく従順な心で受け入れるすべての人にとり、祝福の源でありつづけます。福音は、「これこそ、私が望み、探し求め、心からしてみたいと熱望していたものです」³と言ったフランシスコのように、即座に受け入れるすべての人にとり、自由への道でありつづけます。福音は、私たちの至らなさにもかかわらず、それを生き抜こうとする時、福音でありつづけます。

800年を経た今、私たち小さき兄弟は福音を前にして、幼子のようなように招かれています。なぜなら、「神の国はこのような者たちのものである」(マルコ 10:15)からです。また、貧しい者であるように招かれています。なぜなら、貧しい者は祝福されているからです(ルカ 6:20)。また、「無くしたドラクメ銀貨」を見つけた者の喜び(ルカ 15:8ff参照)と、初めてそれを発見した者の新鮮な驚きをもって福音に接するように求められています。なぜなら、このようにしてこそ、私たちは福音を、その徹底的な要求を薄めて解釈することなく⁴、私たちの「生活と会則」(裁可会則 1:1)に変えることができるからです。

フランシスコの体験から800年を経た今、私たち小さき兄弟は、福音を通じて自由で無防備

² SSVG3:1、会憲 213 参照。

³ 1 チェラノ 22。

⁴ 2003 年総集会総括文書 2 参照。

であるように求められています。そして、福音によって照らされ、福音によって問いただされるように求められています。それは、私たちの生活が創立当初の味わいと若さを取り戻すためであり、フランシスコと最初の仲間たちの生活が福音によって揺り動かされ、問いただされたように、私たちの生活も福音によって揺り動かされ、問いただされるためです。

フランシスコの福音への回心から800年を経た今、私たち小さき兄弟は、福音を一つのイデオロギーに貶めることなく、「いのちの書」、「座右の書」として考えるように、すなわち、私たちの生涯の選択を照らし、正当化することのできる、養成の基本的教科書と捉えるように求められています。

親愛なる兄弟の皆さん、福音に立ち返りましょう。なぜなら、福音に立ち返るということは、私たちの生き方を義としてくださる唯一のお方キリストに立ち返ることだからです。福音に立ち返りましょう。なぜなら、福音に立ち返るということは、私たちの「創立の恵み」を再生させることだからです。福音に立ち返りましょう。そうすれば、私たちの生活は「詩」を、創立の美しさと魅力を取り戻すにちがいありません。福音に立ち返りましょう。そうすれば、私たちは隷属状態や恐れや悲しみから解放されるだけでなく、兄弟である人々を悲惨さと隷属状態、恐れと悲しみから解放することができるにちがいありません。福音に立ち返りましょう。そうすれば、私たちはきれいな空気を吸うことができ、私たちの提案は新しいものとなり、疲れきった多くの兄弟たちの知性と勇気と寛大さと忠実さは、豊かな実りを結ぶことができるにちがいありません。

会を再建するためのあらゆる努力も、あらゆる改革も、組織を新しい状況に適用させようとの努力も、日常生活の中で会の優先課題を实践すべく行っているあらゆる努力も、福音に立ち返ることがないならば、すべては意味のない、不毛なものになってしまうでしょう。

この恵みの時に、「創立の恵み」をいただくために、福音を「信じる者すべてに救いをもたらす神の力」(ローマ1:16、1コリント1:18参照)として受け止めましょう。福音が、信じない者にとってそうであったように「躓きの石、愚かなもの」(1コリント1:18、21、23参照)となりませんように。そして、福音が「この世の神」(2コリント4:4)によって隠されたり、見えないものにされたりしませんように。福音を「信仰による従順」(ローマ1:5)のうちに受け入れましょう。「恵みの福音」(使徒言行録20:14参照)を受け入れましょう。

そうです。兄弟の皆さん、福音はいつも福音でありつづけます。しかし、福音を会則とし、生活とすることを誓った私たちにとって、それはどの程度まで福音なのでしょう。福音を私たち小さき兄弟にとって福音としようではありませんか。福音を解放しましょう。そうすれば福音も私たちが解放してくれるでしょう。

危機にある私たち

6. 私たちは危機の時代に、いやむしろ、危機の只中に暮らしています。危機といっても、現実

世界に直面する教会と会の危機でもなければ、教会と私たちが解決策を持っている社会の危機でもありません。

私たちが体験している危機とは、困難と方向感覚喪失と苦難に特徴付けられた変化の時であり、そこから、予期せぬ疑問や必要や緊急性が生まれ、それによって、新しい選択と、最終的には新しいアイデンティティーが生まれます。この意味で、この危機を、選択を迫られた岐路にたとえることができます。従って、今は試練の時であり、探求の時であり、識別の時であり、苦難の時ですが、同時に成長と新生の時でもあります。「危機」は、砂漠を歩く人と同じ態度を必要とします。つまり、自分の旅程をしっかりと把握し、耳を傾けるために沈黙し、道案内に従い、援助を受けるために内的な自由と貧しさを持っている人の態度です。「危機」とは、識別であり、判断であり、自己を越えるために急を要することなのです。

向こう岸に行くこと（マタイ 8：18、9：1、14：22 参照）。私たちには、敢えて向こう岸に行く勇氣と大胆さがあるでしょうか。新しい皮袋に新しいぶどう酒を入れる勇氣と大胆さがあるでしょうか（マタイ 2：22 参照）。私たちは「フランススコとクララがその当時したように、解放の福音を示すことによって人生の意味を求めているバラバラになった不公平な世界を内側から力づけ育むために、私たちの信仰体験とフランスカン靈性の本質に立ち返る」⁵勇氣と大胆さをもっているでしょうか。「現代世界に現れる時のしるしにこたえて、フランススコの積極性と創造性と聖性を、勇氣をもって新たに作る」⁶勇氣と大胆さをもっているでしょうか。「聖霊を受け」、「新たに生まれるために」（ヨハネ 3：3）「生ける水の源」（エレミヤ 2：13）に立ち返る勇氣と大胆さをもっているでしょうか。聖霊の力に身を任せて、忘れ去られた修道院（世界）に向かう勇氣と大胆さをもっているでしょうか⁷。住まいの幕を広げる（イザヤ 54：2 参照）勇氣と大胆さをもっているでしょうか。夢を見る勇氣と大胆さをもっているでしょうか。このプロセスが提案する「再建」に参加する勇氣と大胆さをもっているでしょうか。

以上述べた質問に肯定的な答えを出す人だけが、十字架の聖ヨハネの言う苦難と痛みを伴う清めを経て、この危機を恵みの時に変え、砂漠を通り抜けた旅に変えることができます。つまり、アブラハムのように、見知った土地を出て、見知らぬ土地に、何が起こるか分からぬ土地に向かうことができます（創世記 12：1 以降参照）。

しかし、これらの質問に肯定的な答えを出すためには、恐れを克服することが必要です。特に自分に対する恐れ、私たちが試みようとしているプロセスの弱点やそれに付きまとう大きな脆さに対する恐れを克服することが必要です。私たちは安心感がほしいのです。恐れは私たちを守ってくれるように見えますが、実際は、私たちを大なり小なり心地良くしてくれるものに縛り付けるのです。

⁵ 2003 年総集会総括文書 2 参照。

⁶ 奉獻生活 37。

⁷ 2003 年総集会総括文書 37

私たちは時々、あるいは度々、善意があれば十分だ、自分を超越する清い単純な意思があれば十分だと考えがちです。しかし、善意だけでは不十分です。勇気が必要なのです。死の沈黙からいのちの場を生み出すためには、私たちの貧弱な言葉を犠牲にするだけの勇気が必要です。信仰こそそれを成し遂げるために必要なのです。つまり、できないことは何一つない方への「信仰」(ルカ 1:37 参照)、万物を新しくなさる方(黙示録 21:5)への信仰、「輝く明けの明星である」方(黙示録 22:16)への信仰、私たちの中であって進んでくださる方(出エジプト記 34:9 参照)への信仰が必要なのです。信仰がなければ、信頼がなければ、主に身を委ねることがなければ、私たちは未来のない分析の犠牲者、窒息するような現実主義の犠牲者、貧しさの犠牲者、救いの希望のない犠牲者となってしまおうでしょう。

一方、向こう岸に渡りたいと思うならば、真っ先にやらねばならぬことは、実践の伴わない真理を語るのをやめることです。実践の伴わない真理を語ることほど大きな嘘はありません。一方的にイデオロギーに偏る時、私たちは真理を語ってはいないのです。他者を兄弟として受け入れ、その人の特異性を主の賜物の豊かさの現れとして受け入れるような兄弟的共同生活を送らないで、兄弟性について語る時もそうなのです。小ささについて語り、貧しい人の優先について語り、正義と平和とエコロジーについて語る時も、苦しむ人の側に立たないならば、小さき人のそばにいて満足を感じないならば、兄弟共同体の内外で正義と平和とエコロジーのような大切なことを実践しないならば、真理を語ったことにはならないのです。「風の子、聖霊の子」であるフランシスコのことを語り、自分のことを「旅人」であると語っても、自分の「殻に閉じ」こもり、「これまでいつもそうやってきた」と規定通りのやり方に固執し、組織に囚われているならば、真理を語ることにはならないのです。

兄弟の皆さん、現代は危機の時代です。私たちはそのことに気づいているでしょうか？今こそ眠りから覚め、身を慎んでいる時です(1テサロニケ 5:6 参照)。その用意ができていますでしょうか？

現代は大胆さと勇気を必要とする時代

7. 私たちは新しい時代に生きており、新しい選択を迫られています。ですから、「新しいぶどう酒を新しい皮袋に入れる」(マルコ 2:22) 必要があります。

1976年に天使の聖母聖堂で臨時総集会を開いて以来、さまざまなレベルで(地域ごとに、管区ごとに、全体で)たくさんの分析がなされました。これらの分析は必要なものでしたし、私の知る限り、いずれもすばらしいものでした。総集会や管区会議が発行した文書からも、そのことが伺えます。

私たちは自分の生き方について自問し、自分の生活状況や周囲の社会情勢を分析しつづければなりません。私の友人の一人が言っているように、「回答が出た時、問題はすでに変っている」からです。その場合、原点に立ち返って、再び始めなければなりません。現代では特に、忠実さ

がなおざりにされており、従って、忠実さには常に創造性が伴わなければなりません⁸。しかし、今は、分析を続けたり、自問したりするだけでは不十分です。なぜなら、忠実さは創造的でなければならないからです。今は、「正統性」から「正統性の実践⁹」に移行することが必要な時、具体的な行動を取ることが必要な時¹⁰、向こう岸に渡ることが必要な時、現在を「過去の記憶としてだけでなく、未来の預言としても¹¹」生きることが必要な時なのです。そのためには福音的な大胆さと勇気がなくてはなりません。大胆さと勇気は恐れに対抗手段なのです。「恐れるな」と主は今日も繰り返し語りかけておられます。この言葉を主は、何世紀も前に、週の初めの日に婦人たちが墓に行った時に言われました(マルコ 16:6 参照)。大胆さと勇気は私たちに窒息させるような現実主義の対抗手段でもあります。私たちはパウロのように、「私を強めてくださる方のお陰で、私にはすべてが可能です」(フィリピ 4:13)とすることができねばなりません。大胆さと勇気は、主がいつも私たちと共におられるという確信から生まれます。「なぜ、うろたえているのか」(ルカ 24:38)。「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」(マタイ 28:20)。そうです、私たちには、できないことは何一つない方(ルカ 1:37 参照)への信仰から生まれる大胆さと勇気が必要なのです。

忠実さと創造性を身に付ける心構えがありますか？

現代は私たちに信仰の力を求めている

8. 福音を良い知らせとして受け入れること、向こう岸に渡ること、福音的な大胆さと勇気をもって現在を生きること、そして、物事を始めること、これらはいずれも信仰を前提とします。信仰なくしては、何事も不可能です。信仰がなければ、発展性のない繰り返しの生活をして夢を無駄にし、少しずつ信仰から来る喜びを失っていく危険性が大きくなります¹²。

信じる者たち、たとえば、信仰の父祖アブラハム¹³、信仰の女性マリア、私たちに信仰に導き、その信仰を完成に導いてくださるイエス(ヘブライ 12:2 参照)、貧しく十字架に付けられたイエスの謙遜な僕であるフランシスコ、三位一体によって一つに結ばれ、キリストの体として、また、聖霊の住まう神殿¹⁴として世に現れた教会、彼らはみな召された者であり、彼らのうちに私たちもまた召されているのです、「生まれ故郷、家族、父の家を離れて、主が示す地に行くように」(創世記 12:1 参照)と。

彼らのように、私たちも神の御言葉を信じて出発するのです。神の約束に対する信仰を持って、行く先も知らずに出発するのです。信仰によって、外国人のように約束の地に移住するのです。

⁸ 奉献生活 37。

⁹ ジャコモ・ピニ「フランシスコ会の今」p5、ローマ 2000年。

¹⁰ 使徒的書簡 新千年期の初めに 3 参照。

¹¹ 使徒的書簡 新千年期の初めに 3。

¹² 2003年総集会総括文書 6 参照。

¹³ ミサ第一奉献文 参照。

¹⁴ 年間第 8 主日序唱 参照。

信仰によって、私たちは路上の人となり、テントの中に住んで、神が設計者であり建設者である堅固な土台を持つ都を待望するのです（ヘブライ 11：8 - 10 参照）。

神の御言葉への信仰に突き動かされて、信仰の目で現実を見、その現実の中を、信仰の光に導かれて動くのです。そして、いつか、待ち望んでいたことが実現した時に、現在は私たちの光であり、目である信仰は姿を消します。「私たちは目に見えないものを望んでいる」（ローマ 8：25）。また、聖書の別のところでは、信仰とは「望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです」（ヘブライ 11：1 参照）と書かれています。

私たちを出発させてくれるのは、目に見える、言葉で説明できるはかない美しさではなくて、私たちが希望する言葉に言い表せない永遠の美しさなのです。ですから、私たちはたとえ「主の園」（創世記 13：10 - 12 参照）のように見えたとしても、「潤った低地の町々」にテントを張らず、貧しく十字架に付けられたキリストの弟子となって、キリストのうちに私たちの生活に対する神の豊かな祝福を見いだすことを希望するのです。

今こそ、信仰をもって実践する時、信仰に基づいて動く時、信仰の上に生きる時です。信仰だけが、すべては恵みであること、そして神の私たちへの無限の愛がすべてのものに現れていることを悟らせてくれるのです。山を動かすのはこの信仰であり、教会の子らを動かすのはこの希望であり、未来への道を開くのはこの愛です。私たち皆の心を平和で満たしてくれるのはこの生き方なのです。

聖フランシスコと彼の生活様式は今でも通用する

9．聖フランシスコは必ずしも最も慕われている聖人ではないかもしれませんが、最も普遍的で今でも通用する聖人です。多くの弟子たちが世界中に散らばっており、カトリック教会内だけでなく、姉妹教会の中でも、フランシスコの普遍性をあかししています。聖フランシスコは、フランシスカンやカトリックだけの守護聖人ではありません。彼は実際、すべての善意の人々の聖人なのです。教皇ヨハネ・パウロ 2 世は、2003 年の聖霊降臨の総集會に宛てたメッセージの中で、聖フランシスコの現実性について「聖フランシスコの人を惹きつける力は偉大である」¹⁵と述べておられます。聖フランシスコは新しい千年紀の人に選ばれたのです。

このような事実直面して、私たちも「どうしてあなたが？」と聖フランシスコに尋ねることは当を得ています。私自身も何度も不思議に思ったものですが、到達する答えはいつも同じなのです。つまり、800 年経てもフランシスコが人々を魅了するその秘密は、彼の「非現実性」（non-actuality）にあるということです。フランシスコは他のすべての預言者と同じように、「非現実的」（non-actual）で、現実の先を見越し、未来を見通して、現在に捕われることがないのです。

¹⁵ ヨハネ・パウロ 2 世 2003 年の総集會に宛てたメッセージ、5。

それは「見張りの者」(イザヤ 21:11-12 参照)や自分のことを真の「この世の旅人であり、仮住まいの身である」(1ペトロ 2:11、裁可会則 6:2 参照)と感じている者の宿命です。それは旅人(homo viator)の、絶えず探求している信者の、そして、イエスの弟子であり、フランシスコのように福音を会則と生活にしている人(裁可会則 1:1 参照)の条件です。それは、「他人の屋根の下に宿をとり、故郷にあこがれながら、平和に旅をつづけるために」¹⁶この規範を自分のものとするすべての旅人の宿命なのです。

現在は過ぎ去るものですが、生活様式としての福音は過ぎ去りません。「イエス・キリスト(御父から人類への福音)は、きのうも今日も、また永遠に変わることはない方です」(ヘブライ 13:8)。それは、「小さき貧者」のように福音を自分の会則と生活とする人が流行遅れにならないのと同じようなものです。

フランシスコはその現実性、いやむしろその「非現実性」のゆえに、イエスのメッセージをラディカルに生き抜くように、「心の耳を傾けて、神の御子の声に従いなさい」(全兄弟会にあてた手紙 6)と、そして、神の国のために全身全霊を尽くしなさいと私たちに呼びかけています。フランシスコはその「非現実性」のゆえに、キリストの御手に触れていただくように、主の声に導かれ、主の恵みに支えられるようにと私たちに招いています¹⁷。

私たちはこれらの「呼びかけ」(provocations)を受け入れますか？私たちはキリストに触れていただき、福音を本当に私たちの会則と生活にする勇氣を持っていますか？私たちの現実性、あるいはむしろ「非現実性」、つまり、自分自身を意味のある存在に変えることができるかどうか、「呼びかける」(provoke)ことができるかどうかは、これらの質問に対する答えにかかっています。

10. これまでに述べたいくつかの確信を、現代における私たちの生活とミッション(宣教・使命)の診断を行い、未来のための提案をする出発点にしたいと思います。兄弟の皆さんも、これらの確信から出発してください。

この難しい試練の時期に¹⁸会の状況をできるだけ客観的に分析するために光をお与えくださいと主をお願いしています。そして同時に、兄弟たちが私たちの生活様式の預言的な炎を赤々と灯しつづけることができるような提案をするだけの福音的な大胆さと勇氣をお願いしています。私たちの生活様式を保ちつづけることこそ「創立の恵み」であり、それは、「フランシスコとクララがその当時したように、解放の福音を示すことによって人生の意味を求めているバラバラになった不公平な世界を内側から力づけ育むため」¹⁹に、私たち自身が生きた福音でありつづけるためなのです。

¹⁶ 聖ボナヴェントゥラの大伝記 7:2

¹⁷ 奉獻生活 40 参照。

¹⁸ 奉獻生活 13 参照。

¹⁹ 2003 年総集会総括文書 2。

前書き

私たちの生活とミッション（宣教・使命・派遣）の過去、現在、未来

11. 過去、現在、そして未来は、相互に意味と説明を与えるものです。過去がテキストであり、現在がその解釈であるならば、未来は現在を動かし、過去に十全の意味を与えるものです。過去は現在の根となるものであり、少なくともある程度は、現在を条件付けるものです。そして、現在は、過去を照らし、過去はその本当の意味を最初から取り戻すのです。他方、未来は、ある意味で現在であると言えます。過去も現在も未来への展望なくしては存在しません。過去と現在と未来は不可分のものなのです。

小さき兄弟としての私たちの過去、現在、未来は、出かけて行って出会い、建設し、あかしする能力から来る力強いダイナミズムによって密接に結ばれています。出かけて行き、出会い、建設し、あかしするという四つの表現は、普通互いに関連し合い、私たちの過去を定義づけるものですが、それらはまた、私たちの現在と未来をも定義づけるはずなのです。

出かけて行くということは、ある種の物理的・霊的な旅を意味しており、何ものも自分のものとせず生きることを約束した人を特徴付けるものであるべきです。出会うということは、出かけて行くことの結果であり、小さき兄弟的な生活態度と生活計画を指しており、それは、どんなに難しくとも、お互いを知るために、また、意見交換をし、体験を分かち合うために「他者」と対話したいとの願いによってダイナミックなものになります。建設するということは、出かけて行って、未来に出会うことを可能にすると同時に、その行動に一貫性を与える創造的な態度です。あかしするということは、すでに述べた三つの動きの目標です。それは、この三つの動きを正しいものにし、力づけ、私たちの生活とミッションを未来に向かって開くものです。

教皇ヨハネ・パウロ2世は、2000年の聖年を締めくくるに当たり、その使徒的書簡「新千年紀の始めに」において、「過去を感謝の気持ちをもって思い起こし、現在を熱意を持って生き、未来を信頼をもって待ち望むように」²⁰と呼びかけておられます。これこそ、私がすべての兄弟と歩いて行きたいと願っている道であり、成し遂げたいと願っている計画です。

²⁰ 使徒的書簡 新千年紀の始めに 1。

第一部 過去を感謝の気持ちをもって思い起こす

12. 真実に忠実に過去に目を向けると、犯した過ちに気づかせられますが、それと同時に、私たちの歴史が先達の書いた、しばしば血みどろの、しかし常にあかしによる英雄的なページに満ち満ちていることにも気づかせられます。犯した過ちについては潔く赦しを乞いながらも、私たちの兄弟会の過去800年の歴史において主が成し遂げてくださったすべての善に感謝し、感謝の賛歌によって、「あらゆる善の所有者である至高の主・神にすべてをお返ししたい」(訓戒の言葉4)と思います。

この気持ちに動かされて、黙示録の次の言葉が兄弟たちの心と唇に自然に浮かんできます:「全能者である神、主よ、感謝いたします」(黙示録11:17)。この会の創立記念祭を「三位一体、すなわち『全能、至聖、至高、至上の神』(裁可会則23:1)に捧げるユニークで絶えることのない賛美の歌」²¹として祝うことが必要であると思います。ですから、心を開いて賛美し、詩篇の作者と共に「主の慈しみをとこしえにわたしは歌います」(詩篇89:2)を繰り返しましょう。

私たちの兄弟会の歴史における主の御働きに対する真正な答えのすべては、この賛美と感謝の次元にあるものです。私たちの歴史は恵みの歴史であり、兄弟たちの惜しみない献身を可能にし、私たちの弱さの中に神の恵みの栄光を現されつつ、兄弟たちの中で、兄弟たちを通して、不思議な業を絶えず行われる神の驚くべき啓示なのです。

記憶の守護者

13. これは、私たちの兄弟会の800年に及ぶ歴史の統合体を提示するための枠組みではありません。私たちには語り継ぐべき偉大で美しい歴史があります。わたしはここで、私たちのものとして誇れるその歴史の栄光あるページを書いてくれたすべての先達に対し、賛美と感謝を捧げたいと思います。

フランシスコと共に、自分の故郷を離れ、他の人々に出会うために出かけていったすべての兄弟のことを、感謝の念をもって思い起こします。1217年以来、兄弟たちはイタリアを発ってドイツ、スペイン、フランス、ハンガリー、ポルトガルに向かいました。それから、さらにアフリカ北部に向かい、そこで、ベラルドとその仲間がキリストをあかししました。その後さらに極東に向かい、1246年に始めて中国にPian de Carpineのヨハネが到着し、1305年にモンテ・コルヴィノのヨハネが到着しました。兄弟たちがアメリカ大陸への道を開いた時、彼らが持っていた財産と言えば、主イエス・キリストについての知識だけでした。

²¹ 勅書Incarnationis mysterium, 3 参照。

ここでさらに思い起こしたいのは、アルメニア、ペルシャ、インド、インドネシア、中国、タタール、チベットで福音を説いたポルデノンネのロデリック (Roderick of Pordenone)、ペルシャとアルメニアで福音を説いたトレンティノのトマス、ダルマチア、クロアチア、アルバニア、ボスニア、オーストリア、ボヘミア、サクソニー、プロシャ、ポーランド、デンマーク、ノルウェー、スイス、ロシアで福音を説いたマルケスのヤコブ (James of the Marches)、ルテニアとアルメニアで福音を説いたデュクラのヨハネ、ロシアとリトアニアで福音を説いたギルニオウのラディスラヴ (Ladislav of Gilniow) です。彼らは自分の故郷を出発して、そこからはるか遠くに離れた土地に福音を告げ知らせに行った傑出した人々のごく一部にすぎません。

14. 他者との出会いをその宣教活動の最初の主要な様式にしたすべての兄弟たちに心から感謝したいと思います。すでに述べた兄弟たちと、福音的な愛をもってスルタンと会見しようとし、それによって私たちの「諸国民への」宣教の礎を築いてくれたフランシスコのほかに、特に次の兄弟たちを思い起こしたいと思います。それは、新約聖書と詩篇をタタール語に翻訳したモンテ・コルヴィノのヨハネ、フィレンツェ公会議中にコプト人と働いたフィレンツェのトマスとサルチアノのアルベルト、アスンシオン (パラグアイ) での司教協議会 (シノドス) 中にグアラニ語をグアラニ人と交流するための言語として採用したロヨラのマーチン・イグナチオ、カナリア諸島のカテキスタだったアルカラの聖ディエゴ、フロリダの宣教師で、ティムクア族とその言語を最初に私たちに紹介し、さまざまな文書をティムクア語に翻訳したシルヴァのヨハネ (John de Silva)、ナワトル語で聖フランシスコへの賛歌を作曲した音楽家のガンツのペトロ、メキシコ教会の創業者であるスマラガのヨハネ、アメリカインディアンについての文化人類学および言語学の研究で知られるベネヴェントのトリビオとモトリアのトリビオ、メンディアテのジェローム、現地語の文法と辞書を編纂したアルヴァロのペトロとイエスのペトロ、「原住民の保護区」 ("reduction") の設置を考え出したルイス・ボラノ (Luis Bolano)、カリフォルニア宣教地の創設者ジュニパー・セラ、現地貴族階級の人々を教育した古代メキシコ文化の偉大な専門家サハグンのベルナルディン、メキシコで福音を説いたジェローム・メンディエタ、トルケマダのヨハネ、オルモスのアンドレア、初めて中国語で公教要理を出版したピヌエラのペトロ、そして、最近では、聖書を中国語に翻訳した兄弟ガブリエル・マリア・アレグラなどです。

15. 人々の間での生活を定着させるために、建設に携わった兄弟たちのことも感謝の念をもって思い起こしたいと思います。フランシスコ会の最初の宣教師たちは組織を構築する上でも一定の創造性が必要であることをすばやく理解しました。彼らは、適切な組織なくしては、効果的な文化交流を実践することが不可能であることを知っていました。先年に兄弟たちの手によって建てられた「建造物」のすべてをここに網羅することはできませんが、なかでも特に重要と思われるもののいくつかをご紹介します。フランシスカンに関する知識を編纂した人の一人で、フランシスカンの歴史書やヨハネ・ドンス・スコトゥスの書き物の出版のためにローマに大学を設立したルーク・ワッディング。極東および中東に派遣される宣教師の養成のためにローマに造られた聖バルトロメオ宣教学大学やモンタリオの聖ペトロ大学。モロッコに派遣される宣教師の養成のためにスペインに造られたクエンカのプリエゴやサンチャゴ・デ・コンポステラやチピオナ。ラテン・アメリカのヘルボンやクエレタロ、グアテマラ、サカテカス、メキシコ、パチュカなど

に派遣される宣教師のための宣教大学の設立。さまざまな研究所の設立。中でも特筆すべきは、スペインに設立されたアルカラ・デ・エナレス大学、これは、人文主義者で改革論者であった兄弟フランシスコ・シメネスの尽力によるもので、かれの支援の下にアルカラの多言語聖書 (Polyglot Bible of Alcalá) が実現したのです。ローマの聖アントニオ神学大学とカラチ大学の設立。現代では、総長ポルトガルアロの兄弟ベルナルディンの手によるグロッタフェラータの聖ボナヴェントゥラ大学。これは、後にマグリアノの兄弟パンフィリオの手による米国の聖ボナヴェントゥラ大学の原型となるものです。そして、兄弟チャールス・バリックによるスコトゥス委員会およびインターナショナル・ポンティフィカル・マリアン・アカデミーの設立。

これに関連して、メキシコ先住民の子供たちのために最初に学校を創設したガンツの兄弟ペトロのことを忘れてはなりません。高利貸しと闘い、財貨との関係を人間的なものにするためにフランシスカンが 19 世紀に考案したヒルズ・オブ・パイエティ (モンズ・ピエタティス: 共助組合) の設立も特筆に値するものだと思います。この施設の設立に貢献した人々の中には、経済倫理の観念を生み出したジョン・オリヴィのペトロや、ヒルズ・オブ・パイエティの偉大な推進者であるシエナの聖ベルナルディノがいることも忘れてはなりません。

16. 最後に、さまざまな生活環境の中で、300 人以上の殉教者と 128 人の福者と 69 人の聖人に彩られた私たちの聖なる歴史を生み出しながら、貧しく十字架に付けられた「主に従うことのすばらしさ」²²をあかしてくれられた博学な人や無学な人々、司牧者や隠遁者、教育を受けた人や靴製造業者、数学者や大工、哲学者やドアマン、神学者や乞食などに感謝したいと思います。教会は、多くの人々の聖性を認めています、一般の信者はそれより多くの人々を「列聖」していません。あらゆる大陸で兄弟たちは、ちょうどフランシスコが生き、そして願ったように、キリストに従うことのすばらしさを最もよく表現するのは聖性であるということを示しています。

17. 歴史のこの部分、つまり私たちの会、私たちの家族の歴史は、必ずしも私たちが知っているものでもなければ、しばしば継承に成功したものでもありません。この歴史の中には、現在もそうですが、赦しを請わねばならない時や態度がたくさんあります。そうです。この 800 年の忠実さの歴史の中で、兄弟たちが暗い影を落としたことはたくさんあり、それを伝えなければなりません。私たちの歴史の中で主が示された不思議な業を祝うように招かれた私たちは、「私たちの記憶を浄化したい」とも願っています。それは、「未来への旅路に踏み出す私たちの歩みを」強めるためであり、「福音をより謙遜に、しかも慎重に受け入れる」²³ためなのです。

過去を成長の糧として生きる

18. 私たちの歴史が「聖霊の体験」²⁴であり、その中に独特の体験が創造的な忠実さのうちに再現され、守られ、800 年もの間兄弟たちによって深められ、発展させられて来たことを考えれ

²² 奉献生活 66 参照。

²³ 使徒的書簡 新千年期の初めに 6。

²⁴ MR 11 参照。

ば、私たちの歴史への忠実さは、過去を継続することにはなく、過去を越えて、現在を生き、未来に向き合うことにあるということを忘れてはなりません。

伝統への真の忠実さとは継続あるいは持続であって、単なる模倣や繰り返しではありません。真の忠実さとは、歴史の如何なる瞬間をも、たとえそれがすばらしい瞬間であろうとも、それを繰り返すことではなく、生きることであり、継承することであり、成長することなのです。忠実さにふさわしいこと、それはいつも若々しくあることです。それこそは、あらゆる瞬間に新鮮さを与えるものです。忠実さとは創造的であることであり²⁵、フランシスコと昔の兄弟たちが当時したことを現代の私たちのものにすることであり、私たち自身が「『新しい天と地』(イザヤ 65 : 17) に渴いている世界に対して読み取り可能な生活のしるしとなる」²⁶ことなのです。

歴史に対する最高の貢献とは、過去の中から最善のものを集め、それを物理的に繰り返すことなく、実践することです。この800年の歴史の中で、フランシスコとその弟子たちに対してなし得る最高の貢献とは、彼らが現在生きていたらきつとすることであろうことを行うことです。私たちの歴史に対する最高の貢献とは、フランシスコと私たちの先輩である多くの兄弟たちの「積極性と創造性と聖性」²⁷を再現することです。それは、過去との決別でもなければ、単なる繰り返しでもなく、創造的な忠実さなのです。つまり、キリストに無条件に従い、心を開いて聖霊に身を委ねようとする誠実な態度であり、それこそは、教会に積極的に従い、最も貧しい人々を優先しながら人類に惜しみなく奉仕してきたフランシスコと多くの兄弟たちの態度でした。

私たちは過去との関係において自分を、個人としてまた組織として、どのように位置付けますか？どのような観点から過去を読み取ろうとしていますか？それをどのように伝えていきますか？歴史との関係において、私たちに求められている創造的忠実さとは何ですか？会に対する帰属意識が弱いと感じられることがしばしばあります。兄弟会全体に対する帰属意識の希薄さは、過去についての無知に由来しているとは言えないでしょうか？

²⁵ 奉献生活 37 参照。

²⁶ 2003 年総集会総括文書 7。

²⁷ 奉献生活 37 参照。

第二部 情熱をもって現在を生きる

19. 情熱とは、無条件の愛で愛されていると感じつつ、イエス・キリストの足跡に最後まで忠実に従おうと歩み始めた人間の応答です。殉教者や聖人たちの証し、宣教師たちの派遣と活動、私たちの歴史に輝きを与えてくれる多くの兄弟たち（聖職者も修道士も含めて、また「学識のある者も無学な者」も含めて）の生活の魅力と影響力、これらはすべて情熱によって説明がつかます。

キリストへの情熱(*passion*)が必然的に人類への深い同情(*compassion*)に変容したと考えるならば、情熱はしばしば無言の謙遜な奉仕の土台となります。そのような奉仕は主の目にも、また、ルカのたとえ話に出てくる善きサマリア人のように、道端に倒れている「半死半生の」人の世話をする多くの兄弟たちの目にも、とても大切なものに思われます（ルカ 10：30 以下参照）。

従って、フランシスコとクララの場合のように、深く心を奪われた愛から生まれる情熱は、現代の私たちの存在と活動に重要な目に見える力を与えてくれ、未来に対しても希望をもって備えるようにと私たちを励ましてくれます。情熱がなければ、生活の質もないのです。情熱がなければ、私たちの生活とミッション（派遣使命）は、決まりきった退屈な日課となり、容易に中流の生活様式に陥ってしまいます。

20. 悲観主義と幻滅が教会の生活や多くの兄弟たちの生活に影響を及ぼしている現代（そうした悲観主義は多くの国々の社会的・政治的不安や、奉献生活を送る人の数の減少により増幅しており、いわゆる「先進国」では奉献生活を送る人の高齢化が進んでいます）において私たちが直面している最大の課題は、真の情熱をもって私たちの生活とミッションを生き抜くことです。そのようにして、私たちは情熱の持つ魅力とその意味するものを取り戻し、伝染性のある喜び、強烈な魅力、穏やかな新鮮さと刺激性のある楽観主義を取り戻すと断言いたします。

21. 奉献生活は終焉を迎えているとか、少なくとも事実上崩壊していると考えの人がいる現代では、私たち小さき兄弟は次のことを自分に問うてみなければなりません。私たちの生活とミッションをこれからも魅力あるものにし、人々の関心と共感を呼ぶためには、どうすればよいか？ 私たちは今どこにいるのか？ 私たちの生活とミッションの現状はどうなっているか？ それらは情熱と魅力に満ちているか、それとも、幻滅させられるものか？

これらの問いに答えるのは容易なことではありません。小さき兄弟としての私たちの生活とミッションは、私たちを取り巻く社会的、政治的、教会的生活の変化と希望と危機に影響を受けています。つまり、上記の問いに答えるためには、背景にある社会と特に教会の状況を知らなければなりません。私は、現在の社会情勢や教会の状況を分析できてはいませんが、その状況を考慮に入れて、現時点で会の状況を判断することはリスクを伴うことを覚悟の上で、しかもすべてを網羅しようと思わずに、兄弟の皆様が現在の会についての私の意見を申し上げたいと思います。その第一段階として、前回の総集会で「自分たちの召命を如何に生き、世界が私たちに何を期待

しているかを理解する鍵」²⁸として採択され、この6年間の最初の総理事会で再編成された「優先事項」²⁹を取り上げたいと思います。光と影、活力のしるしと回心への招きについて述べると同時に、私たちが行動を起こし、すでに良きこと（good）をさらに良いもの（better）にするために必要だと思われるいくつかのステップを提示していきたいと思います。

²⁸ ペルージャの伝記4

²⁹ Cf. *優先課題 2003-2009*, Rome 2003.

Ⅰ 祈りと献身の精神

「主お一人が全能であられることを、
生活と言葉によって世界に告げ知らせるために
心を神に向けた兄弟共同体」

22. 会の様々な公文書は、かねてから、観想的な面を私たちの生活とミッションの「優先事項中の最優先事項」として、また、「私たちの生活様式の中心軸」³⁰として提示してきました。アシジのフランシスコが守り、提案した様式に従って教会の中で福音的な生活を送るように招かれている小さき兄弟たちは、フランシスコのように「祈りの人」でなくてはなりません。あるいは、さらに、自分自身を祈りの人に変えた人、主との出会いを知り、生き、喜ぶ恵みを持つ人間に自分自身を変えた人とならなくてはなりません。

私たちはフランシスコとクララ、そして、フランシスカンの流れを汲む偉大な神秘家たちから、兄弟愛の喜びと、小ささの喜び、神への憧れ、そして、神を求め、神を知り、神を愛し、神に仕えようとする情熱を受け継ぎました。「聖なる祈りと献身の霊を消さないようにしながら」(第2会則 5:2)、「精神と心を神に向ける」(未裁可会則 22:19)ことは、すべての小さき兄弟の何よりも大切な務めです。この選択は、小さき兄弟が生涯の間にいろいろな選択をするに当たって基準となり、選択すべき事柄を明らかにしてくれます。

祈りと献身の霊を生き生きと保つことは、会の創立の恵みの新しさと正統性を維持する上で、また、大胆さと創造性をもって時のしるしに応える上で絶対に必要です。祈りと献身の霊を生き生きと保つことは、聖霊に導かれて天の御父と御子イエス・キリストといつも新たな気持ちで出会うために、主と人間への燃えるような愛を持ち続けるために、そして、私たちのカリスマをさらに深く理解するために、絶対に必要です。祈りと献身の霊を生き生きと保つことは、自分のルーツを発見し、未来への道を開きたいと思うならば、絶対に必要です。祈りと献身の霊を生き生きと保つことは、私たちの兄弟的共同生活に活力を与えるために絶対に必要です。なぜなら、三位一体の営みに対する深い愛を観想することによって初めて、兄弟的な交わりの生活に一貫性を与える愛を兄弟愛に満ちた従順を通して学ぶことができるからです。祈りと献身の霊を生き生きと保つことは、キリストから出発して、キリストの愛を現代の人々に証ししたいと思うならば、絶対に必要です。祈りと献身の霊を私たちの生活の最優先事項として保つことができ初めて、私たちはキリストを発見し、キリストを証しし、キリストの弟子となることができます。「私たちは、見たことや聞いたことを話さないではいられないのです」(使徒言行録 4:20)。

会則と会憲には小さき兄弟としての私たちのあり方が記されていますが、それによれば、私た

³⁰ 全世界をキリストの福音であまねく満たすために 60, Rome 1996

ちは自分の生活の中で祈りと献身の精神を最優先しなければなりません。それは、各兄弟が、霊の達人となり、兄弟共同体が霊性の学校、祈りと観想、黙想の特権的な場、主を探し求め、主に出会い、主がこれまでなさってください、今もなさってくださいであることを祝う「晚餐の部屋」となるためです。

この「優先事項」中の最優先事項をどのように実践していったらよいでしょうか？

活力のしるし

23. 会が祈りと献身の霊を最優先するためにここ数年払ってきた努力はすごいものです。活力のしるしは明らかです。その中から特筆すべきことがらを挙げてみましょう。

祈りと典礼の生活の意味の再発見

24. 多くの兄弟たちと兄弟共同体が、そのプロジェクトと活動を本当に重要な祈りの生活と調和させるために多大な努力を払ってくださいました。多くの兄弟たちと兄弟共同体が、時課の典礼をそれによって「昼夜の時の流れ全体が神への賛美によって聖化される」³¹祈りとして味わい、御聖体の中に、それによって主の人類との約束が新たにされる秘蹟、すなわち、キリストと兄弟たちとの真の交わりの秘蹟³²を見るようになったのです。また、多くの兄弟たちと兄弟共同体が、祈りについて考え、黙想や霊操の日を持つために会合を何度も開いています。多くの管区で、「黙想の家と祈りの家」が新たに作られたり、再開されたりしました。これらの努力はいずれも刷新のために大変良い成果をもたらしました。

御聖体を祝い、崇敬することの大切さの再発見

25. 聖体祭儀を祝い、御聖体を崇敬することは、アシジのフランシスコの生活の中で一番重要なことでしたが、それは、フランシスカン霊性においても一番重要な位置を占めるべきです。「御覧なさい。主は、天の玉座から処女の胎内に降られた時と同じように、毎日へりくだられるのです。毎日御父の懐から祭壇上の司祭の手のなかにお降りになるのです」(訓戒の言葉 1: 16 - 18)。主は、御聖体の中で御自身をお示しになります。聖化されたパンとぶどう酒を私たちの肉の目で見るとき、私たちは霊的な目で、それを私たちの主イエス・キリストのいと聖なる御体と御血として見、信じるのです。フランシスカンの霊性とは、御聖体の霊性です。そして、多くの兄弟たちと兄弟共同体は、会憲が求めているように、兄弟フランシスコのカリスマと一つになって、この霊性を生きるように努力しています。会憲にはこう書かれています：「聖フランシスコの模範と教えに従って、兄弟たちは、主の至聖なる御からだ御血の秘蹟に対し、『最大限の尊敬と誉れ』をささげる。それは、教会の霊的な恵みのすべてがそこにあるからである。そして兄弟たちは、適切な手段によって、この偉大な神秘に対する愛と誠実な心づかいを、自分たちのうちに育む。同

³¹ 典礼憲章 84、会憲 23: 1 参照

³² 典礼憲章 10 参照

じ所に住んでいたり、居合わせたりするすべての兄弟は、それがすべての兄弟的交わりの真の中心かつ源泉となるように、できるかぎり毎日、清く敬虔な心をもって、共同で聖体祭儀を行う。

『この最も聖なる神秘がすべてを超えて尊ばれ、崇敬され、貴い場所に安置されること』を死に至るまで願っていた聖フランシスコの模範に倣って、兄弟たちは、兄弟的交わりとこの偉大な神秘に対する信心が育まれるために、どの修道院においても、少なくとも聖体を安置する礼拝室を設ける。³³多くの兄弟と兄弟共同体は、御聖体に「教会のすべての靈的善が含まれている」ことを心に留め、この神聖な秘跡の崇敬と聖体祭儀を「兄弟的交わりの中心かつ源泉」、すなわち靈的生活の中心かつ源泉とするのです。

神の御言葉の重要性の再発見

26. 兄弟フランシスコは次のような言葉を残してくれています：「神に属する者は神の言葉を聞くのですから、神聖な務めのために特別に召された私たちは、神の仰せを聞き、行うだけではなく、更に、創造主の偉大さと神への服従とを私たちの心に刻み付けるために、聖なる器や主の御言葉の書かれている典礼書などを、大切に保管すべきです。それで私は、キリストにおいてすべての兄弟を戒め、励まします。書きしるされた神の言葉をどこで見つけても、可能な限り崇め尊んでください。また、兄弟たちに関わりのある限りにおいて、書きしるされた神の言葉が正しくしまってなかったり、どこかに不当に散らされていたりするなら、主御自身がお語りになった御言葉において主を敬いつつ、それを拾い上げて、保存してください。なぜなら、多くのものは神の言葉によって聖とされ、祭壇の秘跡はキリストの言葉の力によって成就されるからです」（「全兄弟会にあてた手紙」34 - 37）。

兄弟フランシスコのような信仰をもって神の御言葉を聴こうとする多くの兄弟たちおよび兄弟共同体は、自分の生活の中心を御言葉の中に見いだし、祈りに満ちた御言葉の奉読を、主と出会う恵みの時間に変える術を知っています。実際、多くの兄弟は *lectio divina*（御言葉の奉読）を個人として毎日行い、共同体としても毎週行っています。

このようにして、神の御言葉は兄弟たちの祈りと生活の糧となります。しかもそれだけでなく、御言葉を聴くということは、多くの兄弟共同体にとって統一のための原則であり、識別の重要な手段であり、「共通の感覚」を養う手段なのです。このようにして、兄弟共同体は「信仰を照らす場」となり、神を体験する場³⁴となります。

回心への招き

27. すべてに超えて愛する神に完全に奉献し、祈りのうちにキリストに従うように、そして聖フランシスコが守り提案してくれた様式に従って聖福音を生きるように招かれている私たちは、熱心な祈りのうちに主を求め、主に出会うために生きるように招かれているからこそ、自分の受け

³³ 会憲 21 : 1 - 3

³⁴ 現代のフランシスコ会の使命 8、12 参照

た召命と現実の生活との間に、魅惑的な愛と飼いならされてしまった愛との間に、個人としてまた共同体としての祈りの理想と祈りの現実との間にギャップがあることを認識しております。私たちの生き方はちりぢりになってしまいました。仕事に追われ、司牧活動が増え、共同体内の責任も増えています。生活はそれで一杯になり、祈りはしばしば犠牲になります。祈りの優先順位が個人や共同体の中で二次的なレベルに落とされる危険が迫っており、場合によっては、兄弟や兄弟共同体が祈りを生活の中で最下位に貶める可能性さえあります。

私たちの召命の観想的な側面の進歩と積極的な結果を認識しながらも、兄弟たちの歩むべき道のりは長いことを忘れてはなりません。

回心への招きはたくさんありますが、ここではいくつかを挙げるにとどめます。

兄弟共同体の中で祈りに捧げる時間

28. 兄弟共同体の生活と福音宣教生活の中では祈りが大変重要であると言いながら、実際にはそれが実践されていないことがよくあります。そのことは、兄弟たちと兄弟共同体がいわゆる念禱³⁵のために費やす時間から明らかのように思われます。

祈りのうちに主に愛を込めてすべてを捧げるような個人的なことがらを、質量化したり生活の中の時間の長さで測定したりすることはできませんが、時間は重要な要素であると思います。108の管区規則から、次のような事実が明らかになりました。20の管区では一時間の念禱を、67の管区では30分の念禱を、一つの管区は15分の念禱を定め、20の管区は念禱の時間を定めず、一般的な賛美にとどめるか、念禱を兄弟的共同生活から除外しています。念禱の方法は次のようなものです。30の管区は念禱を共同で行うように規定し、8つの管区は個人で行うように規定し、70の管区は念禱についての決まりはそれぞれの修道院会議に任せています。

また、ローマ総本部に送られた公式訪問後の(Canonical Visitations)報告は、もう一つの重要なデータとなっています。次のような表現がよく見られました。

せかせか働いていて祈りの精神を忘れてしまった兄弟がいます。また、さまざまな職務のために祈りの実践を典礼だけに限ってしまい、神との出会いの絶対的必要性を形式的なものにしてしまった兄弟もいます。

召命生活の質を顧みないで、祈りと秘跡を行うことをやめてしまった兄弟がいます。

詩篇を使った教会の祈りを唱えることを難しいと感じ、それ以上の良い祈り方を見いだせずに、祈るのをやめてしまった兄弟がいます。

何人かの兄弟が陥っているもう一つの落とし穴は、「兄弟共同体の祈り」を「信者と共の祈り」で代用している点です。「信者と共の祈り」は、原則として評価できるものですが、現実には必ず

³⁵ 管区規則で使われている用語はいろいろです。たとえば、念禱(mental prayer)、黙想(meditation)、betrachtendes Gebet、瞑想(reflective prayer)など…。

しもそうとは言えません。多くの場合、視察者が認めているように、「信者と共の祈り」は朝の祈りと晩の祈りにだけになっています。そして実際に祈っているのは、時課の典礼の前か後に行われるミサや時課の典礼が組み込まれたミサに与る兄弟(たち)あるいはミサを司式する兄弟だけになってしまっています。

このような状況ですので、個人および兄弟共同体のレベルでの「念禱」の場(時間と様式)を見極める必要があると思います。念禱のための時間割を作って、それを守ることは祈りの生活に不可欠です。秘跡の実践、たとえば、聖体の秘跡、ゆるしの秘跡などについて、ミサの質や頻度および時課の典礼を忠実にやっているかなどをも含めて、真剣に見極めることが大切だと思います。「聖務日課を唱えること」と「時課の典礼を祝うこと」とは同じでないことを認識する必要があります。祈りの生活は、兄弟的共同生活と同じように定期的に見直されなければなりません。祈りの生活が成長するかどうかは、時間やリズムや神聖な感覚などについての建設的な批判にかかっています。大切なことは、フランシスコプロジェクトを神の時間に合せて作り、それを祈りに満ちた体験に変えて行くことです(未裁可会則 22:27 参照)。

典礼の質

29. 2005年にローマで行われた「聖体に関するシノドス」は、ふさわしい品位をもって行われる祭儀そのものが、聖体に関する最善の要理教育/福音化であると述べています。私たちが行っている祭儀はどの程度福音化に寄与しているのでしょうか?多くの兄弟たちや兄弟共同体は祭儀に最大の注意を払っていますが、祭儀を思いつきでやったり、お決まりの日課としてやったり、やめてしまったりしている兄弟も多いのです。

視察者が気づいた最も気になる点は次のようなことです。

教会の規範に「忠実であること」を創造性のなさと同義としている兄弟がいます。創造性は教会が認めているばかりではなく、推奨しているものです。

祈りの生活を「祈りを唱えること」と混同している兄弟がいます。

祭儀のためにふさわしい場を用意することに無頓着な兄弟共同体があります。

ミサの回数について教会の規範を軽視していると思われる状況があります。たとえば、正当な司牧上の理由がないのに、日々のミサの回数を増やしている場合など。

良い典礼には準備が必要であることを心に留める必要があります。また、忠実さは創造性の妨げになるものではないこと、そして、自主性は思いつきとは何の関係もないことを心に留める必要があります。フランシスコが教会を清潔に保つことに如何に心を配っていたか、また、私たちの主イエス・キリストのいと聖なる御体が保管されているところを如何に尊敬し、崇敬していたか、そして、兄弟たちが主の御名や御言葉が記されているものを如何に大切に扱うべきか(「聖職者への手紙」11-12参照)を思い起こすことはとても大切であると思います。最後に、私たちが大切にしなければならないことは、聖体祭儀の前提である他者への奉仕を、自分自身と自分の属する兄弟共同体の生活の重要性と調和させることだと思います。

隠遁所と隠遁生活

30 . フランシスカンの聖人伝や年代記を読むと、フランシスコと兄弟たちは山奥や洞穴、森の中、孤島など、人里離れた場所を好んでいたことが分かります。しかも、フランシスコ会が生まれたばかりの頃から、彼らは人里離れた場所に引きこもるべきか、世間のにぎやかな通りで宣教すべきかに悩んでいたようです³⁶。「隠遁所のために与えられた規則」は、福音によって養われ、「霊であり命である」御言葉を人々に伝えるためには、徹底した隠遁生活とそこから得られる恵みが、隠遁生活の長さによるのではなく、質によることを心に留めた上で、完全に独りになって祈る場が兄弟各人にも兄弟共同体にも必要であることを示しています。

隠遁生活のプロジェクトや祈りの家のプロジェクトについていろいろな意見が最近述べられています。そのようなプロジェクトに参加することや、そのような場所に頻繁に赴くことが本当に兄弟のためになるのかは依然として議論的になっています。事実、隠遁生活の経験をしたことのある兄弟は少数です。視察者の報告書にもあるように、共同体によっては、毎月の黙想会や年に一度の霊操、刷新のための集会（chapters of renewal）のような簡単なものさえ、実現が難しいところもあります。そのため、神を追い求め、後にその神を世間の人々に伝えることができるために、すべての雑事から離れて「荒れ野に退く」必要があると本当に思っているのか、私たちは自問しているところです。

私たち小さき兄弟は、生活（使徒職、司牧責任など）の生産性という幻想の犠牲になることがよくあります。隠遁所での体験や隠遁生活、あるいはモラトリウムを体験する必要性は、「普通の」「まじめに働く」（normal or committed）兄弟の目には、特別の「少数な」（original or rare）兄弟にのみ許される贅沢であり、自分たちにとっては貴重な時間の無駄と映っているようです。

この種のプロジェクトは、継続性と透明性を持ち、だれでも実行できてこそ、その真価が発揮されます。仕事や司牧の義務があるからといって、一定の期間引きこもる必要がないわけではありません。司牧責任と自分独りになる時間とのバランスを保つことは必要です。特にイエスとフランシスコの模範を見れば、それは明らかです。独りで静かに暮らす生活は、私たちの日々の活動を支え、改善し、再統合するために、昔以上に今の方が必要とされていると思えてなりません。

良い状態をさらに良くするために

(In the process of passing from the good to the better)

31 . 私たちの兄弟会は、謙遜な忍耐をもって生活とミッションを刷新する道（原点に立ち返る道、再建する道、本質を回復する道）を歩みたいと願っていますが、この刷新の衝動が内容を伴わない言葉に終わることもあり得るし、行動主義に陥ったり、失意に負けてしまったりすることもあ

³⁶ 「1 チェラ」35、「大伝記」12：1 参照

り得ることを承知しています。道の途中でつまずきたくなければ、祈りを「キリストから常に新しい力を引き出すための手段」³⁷に変えて行かなければなりません。

会憲は、私たち兄弟には観想生活を奨励し、祈ろうとする意思を強め、祈りと献身の精神を強め養う義務があると述べています。私たちにはまた、観想生活への証しとして、黙想の場や人里離れた場所を熱心に探し求める義務もあります³⁸。また、祈りは愛と友情のように、絶えず注意と配慮を必要とします。さもなければ、祈りの質は低下し、ただの日課となって、その特徴と力と質を失ってしまいます。「祈りと献身の精神」、祈りと観想が私たちの生活の命となるためには、どうすればよいのでしょうか。そのために不可欠と思われるいくつかの方法を挙げてみます。

32. 「主のそばにいるため、また、派遣されて宣教するため」(マルコ 3:14) に招かれた私たちは、祈る義務があることは確かですが、私たちを愛してくださっている主に祈りのうちに出会うことを恵みの時と考えるよう最善の努力をしなければなりません。義務化された祈りは、疲れると打ち捨てられてしまいます。私たちを愛してくださっている主に会いたいとの願いは飽くなく願いであり、生き生きとした主との出会いの体験をもう一度味わいたいとの切なる願いを兄弟たちの心に呼び覚ますのです。

祈りを単なる義務と考えてはなりません。むしろ、生活に必要不可欠の糧と考えましょう。ですから、生きることが愛することであるならば、また、愛されていると感じる人が愛し、愛によって心を動かされ、変えられるならば、その人は祈りによって、神の愛を受け入れ、愛に生き、命を得ることができるのです。神の愛に浸ることにより、私たちは日々の力を得ることができます。

多くの人々がストレスに悩み、世俗主義が浸透している現代においては、祈りの生活は以前にもまして必要になっています。「行動主義と世俗主義の高まりに直面している今こそ、祈りの重要性を再確認すべきです」³⁹。兄弟や兄弟共同体は、心配で身がすくんでいる時、そして方向を見失い、気落ちしている時は、「高間」(最後の晩餐の広間)に、親密な場所に行く必要があります。そこは神を感じ、礼拝できる場所であり、神に嘆願の祈りと感謝の祈りを捧げる場所です。自分独自の戦略を立て、自分独自の火を灯そうという誘惑に負けそうになった時は、神の霊、すなわち聖霊降臨の火だけをいただけるように祈り、観想することが必要です。皮相的なことに捕らわれ、統一がとれなくなりそうな時には、全身全霊をこめて祈り、観想し、礼拝し、すべてを委ねて感謝することが必要です。以上のような状況においては、祈りの力に身を任せることが必要なのです。祈りと観想は、私たちの兄弟的生活にも福音宣教にも影響を及ぼします。神だけをひたすら求める人になることによって、それまで得られなかった力を得ることができます。

祈りを一つの完成された行動と考えるメンタリティーを克服し、新しいメンタリティーを身に

³⁷ 回勅「神は愛」、36

³⁸ 会憲 29 - 31 参照。

³⁹ 回勅「神は愛」、37

付け、それによって、兄弟たちがすべての信者と同じようにいつも祈るようになることが大切です。

祈りをどのように捉えるべきでしょうか？単なる義務でしょうか、重荷でしょうか、時間の無駄でしょうか、それとも絶対に必要なものでしょうか？私個人の生活および共同体の生活は祈りにどのような具体的な場を与えているのでしょうか？

祈りを単に守ることから創造的な忠実さに変えること

33. 祈りの生活は愛の関係の歴史であり、それ自体が忠実さを前提とします。しかし、その忠実さは、戒めや規則を守ることではなく（もちろん、それも大切ですが）、創造的な忠実さのことです。つまり、愛の忠実さであって、「決まった形」はありません。そのために、兄弟各人によって、兄弟共同体によって、この関係性の歴史のどの時期かによって、さまざまな形をとります。しかも、愛が積極的で、熱心であれば、その愛は創造的となり、新しい祈りの形が生まれます。

もし祈りが私たちの生活を照らすはずのものであるならば、その生活もまた兄弟たちや兄弟共同体を促して、新しい祈りの形を絶えず探し求めるようになるはずで。このようにしてこそ、祈りは生活に影響を与え、生活を変えるものとなり、私たちは自分の奉獻生活の究極の目的である主に自分自身を重ね合わせ、主と一致することができるのです⁴⁰。

祈りを創造性に欠けた単なる日課にしないよう最大限の注意を払わなければならないと思います。創造性に欠けたり、決まりごとになってしまうのは、準備が不十分であったり、即席で間に合わせようとしたり、形式主義や規則主義に陥ったりしているからです。そのような形骸化した状況では祈りは貧弱なものとなり、延いては、私たちの生活は窒息してしまいます。

創造的な忠実さを保持したいと思うならば、兄弟各人や兄弟共同体の状況と現代のニーズに合った新しい表現形式で祈りを豊かなものにすることが大切です。

私たちの作る祈りは私たちの生活を照らすものとなっているのでしょうか？どのような時に私たちの祈りは創造的になるのでしょうか？祈りが単調な日課にならないために、祈りに新しい活力を与え、祈りを刷新するには、どうすればよいのでしょうか？祈りの中でジェスチャーやシンボルをどの程度重視していますか？

祈りを私たちの活動の中心にする

34. 私たちは自分の仕事や福音宣教活動の質や成果が、観想や祈りの体験に左右されることを忘

⁴⁰ 奉獻生活 18 参照。

れて、祈りを使徒職と切り離して考えたり、「祈りの時間」を「活動の時間」と切り離して考えたりすることがよくあります。そうして、「働くために働く」ような危険を冒すのです。現代は、すべてが「観想と祈りに深く根ざす」⁴¹べき時であることを認めなければなりません。あり方や生活の質を忘れて、働くことで満足する誘惑に負けてはなりません。

奉獻生活を送る人およびフランシスカンを特徴付けるのは、何をしているかではなくて、どのようにしているか、なぜしているかなのです。それは、行動の前や後にちょっと祈るといった問題ではありません。私たちの行いはすべて、祈りによって活力を与えられ、支えられるべきもので、その土台は熱心で忍耐強い祈りであるべきです。

そうすることによって、生活の深みにおいて神に出会うことができます。フランシスコの場合がそうであったように、私たちの場合も、祈りが生活という植木や使徒的生活という植木を育てる苗床となり、腐葉土とならなければなりません。そうなるこそ、フランシスコの場合がそうであったように、私たちも祈りの人になるだけでなく、祈りそのものになる⁴²ことができるのです。

このように考えてくると、聖母マリアの祈りが完全な意味を持つようになります。いつの時代にも、教会が生まれた時は、聖母マリアがおられました。母親の存在なしに、教会が誕生し成長することが一体どうしてできるのでしょうか？しかも、聖母マリアは信仰の「然り」を初めて口にされた方なのです。私たちはマリアの「然り」の中に福音を見だし、その「然り」の中で私たちの証しは実を結ぶのです。

自分の活動を骨の折れる不安な、疲れるものに終わらせたくなければ、時間を神に捧げること、vacare Deo を学ばなければなりません。祈りに時間を捧げることが必要です。祈ることによって初めて祈り方を覚え、祈りの中にこそ祈りの味を見出し、祈りの必要性を感じる可以从るからです。

生活の中で、ミサと御言葉の祈りに満ちた傾聴とゆるしの秘跡を優先すること

35 .ここで、フランシスコの言葉を思い起こしてみたいと思います。「私は全身全霊をこめてあなたたちに願います。ふさわしいことであり、また、あなたたちが有益だと考える時には、私たちの主イエス・キリストのいと聖なる御体と御血、および、キリストの御体を聖別する書きしるされた聖なる御言葉が、すべてに越えて尊ばれなければならないということを、聖職者の方々に謙遜に願ってください。聖職者はカリス・聖体布・祭壇の飾り、その他ミサの犠牲に関わりのあるすべてを貴いものとみなさなければなりません。また、主のいと聖なる御体が極めて粗末に置かれているならば、聖職者は、公教会の定めに従って貴い所に移し、錠をかけておくべきです。そして、深い尊敬をこめて御聖体を持ち運び、人々には識別したうえで拝領させなければなりません

⁴¹ 使徒的書簡「新千年紀の始めに」15

⁴² 2 チェラ 95 参照。

ん。主の書きしるされた御言葉が、どこでも清くない所にあるのを見つけたなら、拾いあげて、ふさわしい所に置くべきです。あなたたちの行うすべての説教において、悔い改めなければならないこと、主のいと聖なる御体と御血を拝領しなければ、だれも救われないことを、人々に諭してください。司祭によって、ミサの犠牲が祭壇上で捧げられ、パンまたはぶどう酒の形色のもとに運ばれる時には、すべての人がひざまずいて、生けるまことの主なる神に、賛美と栄光と誉れを帰さなければなりません」(「長上への手紙 I」2 - 7)。

いと聖なる聖体祭儀、主が私たちのために御自分を渡されたすばらしい犠牲の秘跡、子としての父なる神への従順と罪びとである私たちのための御死去の祭儀を、私たちはどのような愛をもって日々行わなければならないでしょうか。無限の愛をもって私たちのために渡された御体と御血の聖なる秘跡において、私たちはどのような愛をもって主を拝領しなければならないでしょうか。この口で言い表せぬほど神聖な神秘のうちにいと謙遜な形で現れ、私たちの糧となるために共にいてくださる主を、私たちはどのような愛をもって賛美し、称え、崇めなければならないでしょうか。

神の御言葉と御聖体によって結ばれた共同体との間に、また、神の御言葉への従順と聖体祭儀を祝う共同体との間に、そして、信仰の強さと主の御言葉への愛着との間に、さらに、神の御意志の識別と神の御言葉についての熱心な黙想との間には、深い親密な関係があることを、兄弟の皆さんに思い起こしていただきたいと思います。神の御言葉に耳を傾けずしてまことの信仰共同体はあり得ないし、神の御言葉への従順なくして神の子としての自由はあり得ないこと、そして、永遠の至福である神の御言葉への忠実さなくしては永続するまことの幸せはあり得ないことを強調したいと思います。

ですから、神の御言葉への私たちの愛着がいつも乏しく限りがあることを考えれば、そして、この愛着がいつも私たち人間の条件の弱さと罪深さに特徴付けられていることを考えれば、さらに、主の御言葉が、私たちに語りかけてくださる主の現存を感じさせてくださるだけでなく、私たちを解放し、導き、慰める御言葉となってくださり、私たちを照らし、問いかけ、諭し、戒める御言葉となってくくださることを考えれば、すべての兄弟は、神の慈しみに満ちた戒めを固く守り、毎日自分を糾明し、特に誓願の時の言葉を心に留め、しばしばゆるしの秘跡を受け、絶えず主なる神に仕えることを新たに始める必要があることを思い起こさなければなりません⁴³。

これまで述べてきたことを念頭に置いて、次のように自問してみましよう。ミサを捧げたりミサに与ることは、兄弟個人のおよび兄弟共同体の生活の中でどのような位置を占めていますか？祈りに満ちた御言葉の奉読は、自分の生活および兄弟共同体の生活の中でどのような位置を占めていますか？自分の霊的な旅路において、ゆるしの秘跡はどのような重要性を持っていますか？

⁴³ 会憲 33 : 2 参照。

マス・メディアを分別をもって活用する

36. マス・メディアが兄弟たちおよび兄弟共同体の生活に影響を及ぼしていることは周知のとおりです。メディアはしばしば人間関係の質にも、また、祈りや勉学、休息などのために必要な兄弟共同体での静修の環境にも少なからず影響を及ぼします。兄弟たち一人一人の生活様式や、奉献生活者として、また小さき兄弟としての使命の達成にも影響を及ぼすことは言うまでもありません。

マス・メディアが現代社会において果たしている重要な役割を無視することはできません。私たちはマス・メディアの活用の際に霊的識別を行う必要があります。会憲は、「主がお示しになる善いものを心にとどめておくために、兄弟たちがマス・メディアを用いる際には、必要な分別を怠らない」ようにと促しています⁴⁴。

フランシスコのように、「注意深く愛をこめて」⁴⁵主に願いたいと思うならば、マス・メディアを「軽率に」(indiscrete) 用いるべきではありません。エレミヤのように主の御言葉をむさぼり食べたいと思うならば(エレミヤ 15:16 参照)、御言葉以外の言葉の余地を減らさなければなりません。

私たちのマス・メディアの使い方は、兄弟間のコミュニケーションを促進しているでしょうか？それとも、兄弟間に溝を作っているでしょうか？マス・メディアは、小さき兄弟として、また奉献生活者として真剣に生きようとしている私たちの助けとなっているでしょうか？それとも妨害しているでしょうか？マス・メディアが私たちフランシスコの「生活様式」に従ってより良く生きて行く助けとなるためには、どのような心構えが必要でしょうか？

⁴⁴ 会憲 28:2。

⁴⁵ 2 チェラ 95 参照。

II 兄弟的な共同生活

「あらゆる分裂を超えて
キリストのうちに和睦を証しするために
愛の従順と相互奉仕に生きる兄弟共同体」

37. 小さき兄弟としての私たちの生活とミッションを表すキーワードは「兄弟共同体」です。私たちは兄弟共同体であり、兄弟共同体として世界中に宣教のために派遣されるのです。私たちは主が兄弟共同体に与えてくださる兄弟を受け入れます。兄弟共同体の中で人間的な価値観を養いながら、私たちは人間として、キリスト者として、そしてフランシスカンとして成熟して行きます。私たちは主の御言葉を兄弟共同体の中でいただき、兄弟として福音を告げ知らせるために兄弟共同体から世界へと出かけて行くのです。アシジの兄弟フランシスコに、あなたは何者かと問うてみたら、自分は兄弟フランシスコだと答えることでしょう。そして、自分の生活について話してくださいとお願いしたら、彼は、「遺言」に書きしるした言葉でもって、主の賜物についてのみ、神の御働きについてのみ、神の恵みについてのみ話すにちがいません。なぜなら、主が彼を導いて悔い改めさせ、彼に教会への信仰と、聖なるローマ教会の様式に従って生きる司祭への信頼をお与えになり、また、兄弟たちをお与えになったからです。フランシスコが受けた悔い改めの恵みと信仰の単純さと確かさを無視して、祝福されたフランシスコの生活を理解することができないのと同じように、主が彼にお与えになった兄弟たちの存在を無視して、フランシスコの生活を理解することはできません。小さき兄弟の生活とミッションは、悔い改めの恵みなくして、信仰の力なくして、主がお与えになる兄弟たちなくしては、理解し得ないものです。

フランシスカンの兄弟共同体は、共同生活を送るすべての兄弟共同体と同じように、三位一体の交わりに与ることであり、「天の御父の子であり、聖霊におけるイエス・キリストの兄弟である」⁴⁶ことにしっかりと気づくことから生まれます。従って、兄弟共同体は、何よりもまず、感謝していただく贈り物なのです。しかし同時に、神の賜物である兄弟の人格をありのままに認めて尊重しながら⁴⁷、それを築いて行く努力と真剣さが求められる任務でもあります。

この生活様式、つまり兄弟共同体の生活には、信仰の一致と福音的生活プロジェクトの一致という生活を統合する要があり、それは、会則と会憲に具体的に述べられています⁴⁸。同時にこの生活様式の基本的な「構成員」として、相互に関わりあうものとしての兄弟と、主から委ねられた兄弟たちの生活のアニメーターとしての院長とがいます。

人間の最高の召命は「神との、また自分たちの兄弟姉妹である他の人々との交わりに入ること」

⁴⁶ 会憲 38。

⁴⁷ 完全の鏡II、85 参照。

⁴⁸ 会憲 42 : 2 参照。

49です。教会は、「その最初の瞬間から、心も思いも一つにして一致する兄弟性と交わりに特徴づけられます」⁵⁰。「奉献生活の歴史は、さまざまな会の性格に従って、唯一の交わりを生きるいろいろな方法を示しています。共同で営む兄弟的生活は、すべてのキリスト者を結び合わせる共通の兄弟的精神の徹底的な表現として常に現れます。」⁵¹私たち小さき兄弟にとり、共同体における兄弟的生活は私たちの生活様式の根本的諸要素の一つを表しており、キリストに忠実に従うという真実に近づくためには、不可欠の識別基準となっています。兄弟的生活はまた、福音的生活を証しする重要な中心点の一つでもあります。まさにそれゆえに、共同体における兄弟的生活は、「兄弟会」⁵²として定義づけられている私たちの会の「再建 (re-foundation)」の中心的な柱をなしています。

兄弟的生活について最近どのような進展がありましたか？また、直面すべき課題は何ですか？

活力のしるし

38. 本会は、奉献生活を送るすべての修道会と共に、聖霊の力と第二バチカン公会議の言葉とによって始められた刷新の過程に参加しています。兄弟たちが聖霊と教会とに従った結果、私たちの生活の諸局面に刷新のしるしが認められるようになりましたが、その一つが、まさに共同体における兄弟的生活です。

兄弟共同体についての新しい特徴 (プロフィール)

39. さまざまな困難があるにもかかわらず、「共同体における兄弟的生活」が一般的な奉献生活について述べている診断を自分のものとすることができました。この文書はこう述べています。「一般的な意見によると、近年の変遷は、共同体における兄弟的生活を成熟させることに貢献しました。多くの共同体での共同生活の雰囲気は改善されました。全員が積極的に参加することがより容易になりました。共同で営む生活が、あまりにも規則に縛られたものから、個々の必要にもっと留意して、人間的なレベルで磨かれたものに変化しました。」⁵³

そうです。兄弟たちは意思決定により積極的に参加するようになりましたし、個人に対する尊敬や、兄弟共同体としての困難に直面する能力、共同体としての識別能力、人間としての質が改善されました。現代の私たちの共同体は、「形式主義や権威主義が少なくなって、兄弟性や参加が多くなりました」。⁵⁴ 強調点が共同体の側面から兄弟的な次元へと移行し、兄弟共同体はもっと交わりの場として捉えられるようになりました。つまり、「関係性が堅苦しいものでなくなり、受

⁴⁹ 共同体における兄弟的生活、9。

⁵⁰ 共同体における兄弟的生活、9。

⁵¹ 共同体における兄弟的生活、10。

⁵² 会憲 1 : 1

⁵³ 共同体における兄弟的生活、47。

⁵⁴ 同上

容や相互理解が容易な場」⁵⁵となったのです。

兄弟性を築く方法

40. 兄弟的生活の質を改善するのに役立つ方法の一つとして次のことを指摘したいと思います。多くの管区で、兄弟たちの熱心で積極的な参加を得て作成され、その後定期的に見直しが行われる「兄弟的生活のプロジェクト」；兄弟共同体の中で行われる「祈りに満ちた御言葉の奉読(lectio divina)」 - これは、多くの兄弟共同体に少しずつ開放されて、兄弟たちの内面的な成長と司牧活動を促進する恵みの道具となります；「修道院会議とその他の兄弟共同体の集まり」 - これらは会議を管理上の問題解決の場に限定しないで、養成や活動と生活の両面での兄弟的生活のプロジェクトの作成、真の深いコミュニケーションのための場として活用する兄弟共同体の中で素晴らしい成果をあげています。「管区レベルの集まり、もしくは幕屋の集会」、「管区を越えた集まり」、特に養成を目的とした集まりは、大変重要で実りも多いものです。

修道院長の職務

41. 修道院長の職務は、基本的に兄弟共同体を建設することです。近年は、経験と考察から、修道院長の職務を、兄弟たちと神との交わりおよび兄弟間の交わりを助ける職務と考えるようになってきました。つまり、兄弟共同体においてキリストの弟子としての精神を育み、兄弟共同体における最高の権威である福音と、カリスマと各兄弟に奉仕する職務であり、霊的同伴を行う職務なのです。この霊的同伴によって、修道院長は、各兄弟と兄弟共同体全体がその召命とミッションを生き、遂行することができるよう、心のこもった穏やかで責任ある応答を促し、導き出し、要求するべきです。

コミュニケーション

42. コミュニケーションもまた、兄弟的生活を築くのに不可欠のものと思われれます。兄弟となって互いに相手をよく知るためには、コミュニケーションが欠かせません。コミュニケーションがあれば、兄弟共同体内の雰囲気は明るく健康的なものとなり、関係はより近く、親密なものとなります。そして、積極的に参加する精神が生まれ、帰属意識も生まれます。これに対し、コミュニケーションが欠けていると、交わりは低下し、破壊されることさえあります。

インターネットによるものも含めて、あらゆる種類のニュースレターのおかげで、また、さまざまな形の兄弟の集まりや、修道院長、管区長、理事会のメンバーとの個人的な面談のおかげで、私たちのコミュニケーション能力は確かに成長しました。これらの集まりや面談は、一人一人の兄弟が生活の中で他者の言うことに耳を傾け、意見を交換し、共に成長の度合いを評価し合う貴重な時間なのです。兄弟の集まりの中でも特に指摘したいのは、総長と総理事が行う管区長協議

⁵⁵ キリストからの再出発、29。

会会長との会議、各協議会との集まり、管区長との面談、視察者との面談です。そのほか、大陸別の管区長協議会会議、管区間の理事の集まり、同じ管区長協議会での管区長および養成担当者の会議、管区長協議会の各種活動のアニメーターやコーディネーターの会議。さらに、管区長と管区理事たちの兄弟たちとの会議、特に院長との会議。それから、幕屋の集会や霊的集会などのような特別な会議。これらすべての会議は、各地域や管区の兄弟共同体の生活への関心を高め、参加を促すのに役立ちます。

協力

43. 共通の目的の実現のために働く兄弟たちの能力は大幅に向上しました。たとえば、共通のあるいは管区間共同の修道院とか、管区間共立の研究センターとか、各管区に共通の生涯養成や福音宣教の体験など。この分野では、管区間共立の国際的な兄弟共同体の存在が特筆に値します。民族間の憎悪や殺意に引き裂かれた世界では、これらの国際的な兄弟会は「国民や民族や文化間の交わりの感覚を維持し、あかしする」⁵⁶ 預言的な使命を持っています。その意味で、ローマやグロッタフェラータ、ブリュッセル、イスタンブール、ウォーターフォード（米国）の総長直轄の修道院、また、サンタ・マリア・メディアトリス（総本部共同体）、聖アントニオ大学のガブリエル・マリア・アレグラ共同体、ラテラン大聖堂付き共同体などは国際的な共同体です。

ロシア - カザフスタンや、タイ、スーダン、ミャンマーにおける総長直轄修道院の宣教プロジェクトや、聖地、モロッコ、アフリカにおけるその他の宣教プロジェクト⁵⁷を推進するための会内での協力もとても重要です。

回心するように招かれて

この40年間共に歩んできた兄弟共同体の生活の刷新のプロセスは大変実り豊かなものですが、フランシスコが望んでいたような兄弟共同体を築く（裁可会則6:8参照）にはまだまだ長い道のりがあります。

兄弟的生活においては、フランシスカン生活の他の側面と同じように、光と影の部分をはっきりと区別することは不可能です。ですから、活力のしるし（signs of life）は回心への招きと常に表裏一体です。中でも、次のことを指摘したいと思います。

幻滅と懐疑主義

45. 幻滅と懐疑主義の濃厚な影は、努力に比例しない不満足な結果の影響をしばしば受けながら、共同体における兄弟的生活に重くのしかかっています。言ったことを行動に移すこと、診断から

⁵⁶ 奉獻生活 51。

⁵⁷ モロッコはアフリカの一部ですが、アフリカにおける他のミッションと非常に異なる性格を持っているので、モロッコのミッションは別個のプロジェクトとして捉えられています。

治療に移ること、計画を実践すること、霊性を日々の現実に生かすことはいずれも決して容易なことではありません。

兄弟共同体について言えば、束縛や極端に厳しい枷を共同体から外してやり、自由に愛を表現すれば、兄弟共同体は成長し、発展すると恐らく私たちは安易に考えているのではないのでしょうか。しかし、どういうわけか、最初に現れるのはたいていの場合、意見の相違や緊張なのです。メンタリティーや意見の相違、それぞれの個性を受け入れることができず、その結果緊張が生まれてしまうのです。これらの相違や緊張は最初のうちは共同生活という共通性によって隠れており、目に見えないのですが、一旦あらわになると、失望から多くの兄弟たちの生活に幻滅と懐疑主義が忍び込むのです。

こうした誘惑に負けたくなければ、現実をしっかり見据え、兄弟共同体を築くのは決して容易なことではなく、むしろ、苦行と犠牲が必要であること、そして、一人一人の真剣な取り組みがなければ不可能であることを認めなければなりません。困難を敗北としてではなく挑戦として受け入れ、争いに対しては、対決を迫ったりせず、臨機応変かつ慎重に、成熟した態度で取り組む必要があります。そのためには、尊敬と理解と謙遜さと対話がなくてはなりません。思いやりのあるコミュニケーションを途切れさせたり、誰かに責任を転嫁させたりしてはなりません。兄弟共同体を築くということは、健全で確かな多元的共存を穏やかに受け入れることを意味します。

ここで言っているのは、理想的な兄弟的共同体生活のことではありません。そのようなものは存在しません。そうではなくて、愛と信仰とゆるしと相互受容（長所も欠点もありのままに受け入れる）に基づいた生活を送ることなのです。絶えず建設中の状態で生きることは私たちの宿命です。私たちが築くべく招かれている一致は、和睦の上に築くべき一致なのです。私たちは若い兄弟たちを、初期養成の最初から、兄弟共同体の消費者としてではなく建設者として、また、互いに相手にたいする責任を持ち、互いの個性を神からの贈り物として受け入れるように育てなくてはなりません。

分裂

46 兄弟共同体の建設が進んでいるにもかかわらず、私たちの間には相変わらず分裂があります。たとえば、管区の内部に分裂があり、それは会議のときに知れ渡ります。また、管区理事や分管区理事の間に分裂があり、それは時に管区の統治を妨げます。また、それぞれの兄弟共同体にも分裂があります。

分裂の原因となるのはたいてい高慢の罪です。高慢さのゆえに、フランスカン生活の見方が変わったり、ミッションの理解の仕方が変わったり、兄弟間に分裂が生まれたりするのです。高慢さが罪であるというのは、正当な個人のあるいはグループの利益となり得るものを分裂に陥れ、一部の兄弟を、自分の経済的利益や特権的地位を手に入れるために勢力のあるグループを形成するようにそそのかすからなのです。

このような現実を私は非常に深刻なものと受け止めており、この現実直面して、私たちは次のように自問してみなければならぬと思います。なぜ私たちはフランシスコ会に入会したのか？兄弟共同体に私たちをつなぎとめるものは何か？

私たちが抱えている分裂は本当に恥ずべきことであり、共同体における兄弟的生活を選択した以上決して正当化できないものです。分裂は、私たちのアイデンティティーが求めていること、すなわち、「他者」を主から兄弟会に授けられた賜物（「遺言」14 参照）として受け入れ、自分自身を兄弟として示すことを明らかに否定するものです。⁵⁸

コミュニケーション（意思の疎通）の不足

47.すでに述べたように、私たちはコミュニケーションの分野では大幅に向上しましたが、共に成長するのを助けるようなコミュニケーションのレベルにまで達するにはまだ長い道のりがあります。この分野での向上を心に留めながら、深みのある質的・量的な更なるコミュニケーションの向上に向けてまい進する必要があることを強調したいと思います。

私たちのコミュニケーションは表面的なものにとどまっているような気がします。私たちは普通、何を考えているかよりも何をしているかについて話すことの方が多いし、ましてや何を感じているか、何を計画しているかについて話すことはあまりありません。特に、聖霊の賜物によるコミュニケーションや信仰をもって信仰について語るものが欠けているように思います。その結果、兄弟間の「お互いに対する知識が不足」という悲惨な状態になるのです。私たちは知識のレベルでお互いのことを本当によく理解してはいないのです。そのようなレベルの理解は、「母がその子を愛し、養う以上に」⁵⁹兄弟同士互いに愛し、支え合うためには不可欠のものです。

思い違いをしてはなりません。コミュニケーションの貧しさや不足は、遅かれ早かれ、兄弟共同体の弱体化を招きます。なぜなら、他の兄弟の生活を知らないことは、「兄弟を部外者にし、関係を没个性的にし、さらに、真の本来の意味での、隔絶と孤独の状態を創り出す」⁶⁰からです。コミュニケーションの欠如は、兄弟間の交わりの正しい手段である喜びを兄弟共同体から遠ざけ、その結果、兄弟共同体は少しずつ活力を失って行きます。そして多くの兄弟は、家庭である兄弟共同体で見つけられなかったものをいつのまにか外部に求めようとするのです。

コミュニケーションを図るためには、話すだけでは不十分です。たくさん話しているにもかかわらず、ほとんどあるいは全く意思の疎通ができていないことが往々にしてあります。何かの話題や瑣末な問題について話してもあまり意味はありません。特に相手に伝えている内容がゴシップ（うわさ話）の域を出ていないならば、兄弟間のコミュニケーションに貢献しているとはとて

⁵⁸ 会憲 40 参照。

⁵⁹ 会憲 38 参照。

⁶⁰ 共同体における兄弟的生活 32。

も言えません。率直で、謙遜で、誠実なコミュニケーションのシステムを兄弟共同体の中に打ち立てる必要があります。魔法のような処方箋はないのですから、普通のスムーズで誠実なコミュニケーションがなければ兄弟共同体は人間的にも霊的にも成長することはできないということを経験に銘じて、創造的にならなくてはなりません。また、このコミュニケーションにはさまざまなレベルがあることを忘れてはなりません。たとえば、私たちの関係の70パーセントをしめるコミュニケーションがあります。それはつまり、言葉を使わないコミュニケーション（身振り、沈黙、表情など）のことです。千の言葉よりも雄弁な沈黙というものがあるのです。

本物のコミュニケーションができるようになるためには、信頼と誠実と透明性のある、相手に自分をさらけ出すことのできる環境を作る必要があります。そうした環境がなければ、また、礼儀正しさ、自制心、感受性、ユーモアのセンス、対話の能力などがなければ、イエス・キリストの弟子として成長するように導くコミュニケーションのレベルに到達することは不可能でしょう。

マス・メディアの侵略

48. 私たちの生活はテレビ、インターネット、携帯電話などの情報伝達手段に「侵略されて」います。たいていの場合、これによってコミュニケーションは強烈な影響を受け、私たちの兄弟共同体も例外ではありません。

マス・メディアに侵略されていると感じたら、その対策法を考えなければなりません。マス・メディアそれ自体は分別をもって活用されるならば良いものですが、それに捕らわれると有害なものとなります。特にインターネットは、使用に当たって必要な識別を怠ると有害なものとなります。

現在のところ、私たちの間では、コミュニケーション手段を用いるに当たっては（特に一部の地域においては）いっそうの厳格さと分別を怠らないように戒めています。また、そのようなメディアを活用するための適切な教育も義務付けています。それは、私たちが誓願によって選び取った生活様式において個人的にも共同体としても成長して行くためです。私個人としては、これらのメディアを利用するには慎重な識別が必要になってきていることを確信しています。これらのメディアは、責任感をもって利用するならば、福音とフランスカンの価値観を宣べ伝えるのにも、また、学問や研究を進める上でも、さらには、兄弟間のより親密なコミュニケーションを図るためにも最高の道具となると思います。⁶¹

マス・メディアの使い方について修道院会議や管区会議で取り上げないのはなぜでしょうか？

個人主義

⁶¹ RS139 - 141 参照。

49. 個人主義に陥る傾向はいつの時代にも見られるものですが、現代は特に人との関係を絶ち、自己中心に生きようとする傾向が勢いを増しているように思われます。フランシスカン生活も例外ではありません。私は時々、私たちは自分のことで精一杯で、他人のことを考える余裕がないような、「自己責任」の法則（law of “let those who can, save themselves”）がはびこっているような印象を受けます。他者と一緒に過ごす時間が欠けていると感じることもよくあります。たとえば、一緒に祈るとか、一緒に食事をするとか、一緒にレクリエーションをするとかの時間が欠けているようです。悲しいことに、多くの兄弟の個人主義が、まるで悪性腫瘍のように、彼らのフランシスカンとしてのアイデンティティを蝕んでいるように思えます。また、兄弟たちは自分の引き受けている仕事を孤立のきっかけにしてしまっているような印象も受けます。宣教の場が、個人の興味を満足させるという許しがたい基準で選ばれ、私たちが兄弟共同体によって、兄弟として派遣されているということを忘れていることが時としてありますが、それはとても悲しいことです。

私たちが個人主義へと誘い、他者とのつながりを失わせる主観主義の文化に直面して、私たちは兄弟愛の文化を選び取らなくてはなりません。兄弟愛の文化こそは、誰の「我」も他者の「汝」なくしては存在し得ないこと、そして、奉獻した者として、また小さき兄弟としての自己実現は兄弟的生活を通してなされるものであることを私たちに悟らせてくれるのです。私たちは互いに他者に属しているという感覚の中で成長して行かなければなりません。つまり、他者は私に属し、私は他者に属しているという感覚です。これは、初期養成および生涯養成の中で強く意識すべき側面です。

良い状態からさらに良い状態に移行するプロセスの中で

50. 私たちの小さき兄弟としての理想と現実の間、フランシスコが提案して生き抜いた兄弟共同体のすばらしい理想とお粗末な現実との間のギャップは時に著しいものですが、このギャップを埋めるために、今取るべきいくつかのステップを指摘したいと思います。それは、兄弟共同体における交わりの生活を預言的なものにするのに役立つでしょう。

共同生活から交わりの生活へ

51. 私たちの多くは交わりの生活よりも共同生活を、兄弟的な生活よりも規則の遵守を優先するように育成されてきました。

教会を「交わりの家・交わりの学びや」とする時期が来たのだとするならば、また、教会にとって、交わりが第三の千年紀の始めに大きな挑戦として目前に迫っているならば⁶²、一般的な奉獻生活にとっても、また特にフランシスカン生活にとってもそれは例外ではありません。なぜなら、彼らは、「交わりの専門家」となり、教会における交わりのしるしとなるように招かれている

⁶² 使徒的書簡 新千年期の初めに 43 参照。

からです⁶³。

「愛に満ちた交わりの生活へと特別に召し出された」⁶⁴私たちは、「神によって、愛とあわれみの交わりによって、また、交わりの霊性が生活のルールとなっている成熟した共同体によって内的に育成された」人間でなくてはなりません⁶⁵。

このような高い重要な目標を達成するためには、活動を計画するだけでは不十分です。私たちに特に求められていること、それは、「交わりの霊性を推進し」、交わりの霊性を初期養成および生涯養成を含む養成の全過程において必要不可欠のものとして提唱することです⁶⁶。

この過程は、教皇ヨハネ・パウロ 2 世の言葉を借りるならば、次のようなことを前提とします。すなわち、「交わりの霊性は、まず何よりも、私たちのうちに住んでおられる三位一体の神秘に向かう心のまなざしを指し、その神秘の光を、そばにいる兄弟姉妹の顔の上にも見いだすという意味です。交わりの霊性は、そのほか、・・・神秘体の深い一致のうちに、信仰の兄弟姉妹を『わたしの分身』であるとみなす能力です。」他者の中に良い点を見だし、それを神からの賜物として受け入れ、評価すること。しかも、それを直に受けた兄弟姉妹の賜物としてだけでなく、「自分の賜物」として受け入れ、評価することなのです。それはまた、兄弟姉妹のための「ゆとり」を持ち、「互いに重荷を担い合って」(ガラテヤ 6:2)、絶えず押し寄せる、競争心や出世主義、不信感や嫉妬心を煽る自己中心的な誘惑に打ち勝つ術を知らなければならないということでもあります。現実主義者であった教皇は、締めくくりに次のように述べています。「幻想を抱いてはなりません。この霊的な道を歩まなければ、交わりの外側を形成する組織はほとんど役に立たないのです。それらは交わりの表現と成長の手段とならずに、交わりの〈仮面〉を被った魂のない単なる機械的な組織と成り果ててしまうでしょう。」⁶⁷

ここで述べている交わりは、「兄弟共同体内部に向けられる」だけでなく、「それを超える」ものでなければなりません。それは、教会、具体的に言えば、司教たち (Pastors)、特に主なる教皇との交わりでなければなりません。つまり、「思いと心の」交わりであり、「誠実に生き、はっきりとあかしされた⁶⁸」交わりであって、効果的で愛情あふれる関係を前提とします。そして、奉獻生活を送る他の修道会、特にフランスカン家族との交わりは大切です。これによって、私たちは福音という共通の根源を発見し、いっそうの明晰さをもって、それぞれのカリスマの多様性の中にある独自のアイデンティティーを共に受け入れることができるのです。そのためには、修道会間の集まりを推進し、福音宣教プロジェクトにおける相互の連帯と協力を図ることが必要です。痛みや喜びや心配がすべての人の運命であるならば、皆で一丸となって立ち向かうべきです。最後に、この交わりは、信徒、特に在世フランスカンとの交わりであるべきです。教会は

⁶³ 奉獻生活 46 参照。

⁶⁴ キリストからの再出発 28。

⁶⁵ 同上。

⁶⁶ 使徒的書簡 新千年期の初めに 43 参照。

⁶⁷ 同上。

⁶⁸ 2 チェラ 161 参照。

一つであり、多様な召命は、神の民の神秘的な一致の中でこそ受け入れられ、生かされるべきものです。

この「交わりの旅路」には、それを顕示すると同時に強める何らかの「交わりの秘跡」が伴わなくてはなりません。この意味で、兄弟たちが集まって互いに耳を傾ける場というものが必要です。さらに、兄弟たちが司教たち（Pastors）と集まる場、兄弟たちが他の修道会の人たち、特に私たちのカリスマに近いルーツを持つ修道者たちと集まる場、信徒と集まる場が必要です。

共同の生活から兄弟的な交わりの生活に移行するためには、回心が必要です。つまり、精神と特に心の転換が大切です。私たちにその心構えがあるのでしょうか？私たちの養成方法は、共同生活を守ることに重点を置いているのでしょうか、それとも、兄弟共同体の中で交わりの生活を育成することに重点を置いているのでしょうか？兄弟共同体生活の中で交わりの霊性を育むためにどのくらい努力しているのでしょうか？

中心を活動から存在と活動の調和へと移行させること

52. 管区全体を見ても、また兄弟たちの大半を見ても、私たちはせわしなく働いていると言えるでしょう。兄弟たちに聞いても、管区を訪問してもそのことを私自身感じますし、総視察者の公式視察訪問後の報告書にもそのように書かれていることが多々あります。兄弟たちは概してよく働きますが、行動主義の犠牲になっていると思われることもよくあります。他方、各管区では人数の減少と共に、活動の数が増え、活動の規模も大きくなっているために、仕事量が増える傾向が見られます。

会則や会憲が述べているように、行動主義は、福音的な生活のプロジェクトを危険にさらすだけでなく、兄弟たちの身体的・精神的健康をも危険にさらします。主のため、兄弟共同体の他の兄弟のために捧げる時間のない人、それどころか自分のための時間すらない人も大勢います。

このような「仕事依存状態」に直面して何度も思ったことですが、今日、皆様と共に考えてみたいと思います。「いろいろな行動主義の根底にはどのような原因が潜んでいるか？」と。たいていの場合、行動主義によって示されるのは兄弟たちの寛大さであり、彼らは他者のために働くのを惜しみません。しかし、それと同時に私が感じるのは、こうした働きすぎの根底には、「働いたという実感」がほしいとか、後世のために「仕事」を残したいとか、ある種の働き者のメンタリティーとか、あるいは単に誓約したフランスカン生活が必要とすることから逃れたいという欲求があるのではないかということです。いずれの場合も確かなことは、「活動にのめりこむ」、時には「病的なまでに寛大になる」傾向は、私たちの生活の根本的な諸側面、特に共同体における兄弟的生活を変質させる原因となるということです。それは不思議なことではありません。なぜなら、私たちの能力には限りがあり、一つのことに全力で打ち込めば、その他のことはなおざりになるからです。

いわゆる「ミサと食事だけに顔を出す兄弟」や「兄弟なる八エ」にふさわしく怠惰で「一日中何もしないで」、私たちの大事にしている生活様式と程遠い生活を送っている兄弟は⁶⁹、私たちの兄弟会には必ず何人かはいましたし、これからもあるでしょうが、彼らのことを弁護したり、正当化したりせずに、働き方とあり方の適正なバランスを早急に取り戻さなければなりません。「フランスカンとして調和のとれた生活プロジェクト」(project of ecological life)、つまり、私たちの生活様式の中でそれぞれのものが優先順位に従ってしかるべき正しい位置に置かれるようなバランスのとれたプロジェクトを選択して行くことが私たちの急務であると思います。

その他、行動主義はフランスカニズムの典型的な価値の一つである「無償行為」(gratuitousness)をその根底からむしばんでしまいます。兄弟たちはしばしばその行為や貢献によって評価され、彼らの活動はその成果によって評価されます。こうした基準は、私たちの仕事や奉仕になくてはならない「無償の心」と私たちのあり方に対する評価を致命的なまでに傷つけてしまうのです。

共同体における兄弟的生活の中で成長したいと思うならば、何よりもまず、私たちの行動を導く価値判断を真剣に見直す必要があります。その見直しは、個人的なレベルの基準から、共同体レベルの基準、延いては会全体の基準にまで及ぶべきです。それと同時に、個人および兄弟共同体の生活プロジェクトによって支えられる「調和のとれた日」(ecological day)を過ごすことが早急に求められます。つまり、個人および兄弟共同体で祈る時間、勉強の時間、兄弟たちと共に過ごす無償の時間(ムダな時間 gratuitous time)、黙想の時間、問題に対処する時間、自分自身のための時間のある日のことです。「調和のとれた日」(ecological day)を過ごすにあたって、個人的・共同体的識別を促すような「生活プロジェクト(個人的な、また兄弟共同体としての)」を重要な道具として提示するべきです。その識別の意味するところは、共にいること、語り合うこと、互いの言うことに尊敬の念をもって耳を傾けること、ある程度の合意に達することです。この意味で、「個人的および兄弟共同体的生活のプロジェクト」は、私たちの兄弟生活の「ガン」である個人主義に対抗する強力な手段となります。

私たちは日々の生活の中で「調和のとれた日」(ecological day)を送っていますか？それとも、仕事依存症(行動主義)に陥っていますか？私たちを「行動主義」に駆り立てる原因は何でしょうか？仕事の恵みについて無責任になるのはなぜでしょうか？具体的な日常生活の中で、仕事中心から、理想的なあり方と行動の調和へと移行するにはどうしたらよいでしょうか？「調和のとれた日」を楽しむことができるために、日ごろの自分の活動を見直す勇気がありますか？私たちを取り巻く個人主義に染まらないようにするにはどうすればよいですか？

効率の虜^{とりに}から「無償の愛」(agape)の喜びへ

⁶⁹ 2 チェラ 161 参照。

53. 私たちの社会は、努力の成果を収穫によって判断します。そればかりか、人々をも、その働きや貢献、収入、見栄えなどによって評価することが多々あります。このロジックは、価値があるにもかかわらず、生産していないとか貢献していないとか自慢するものがないなどの理由で多くの兄弟たちを排除することにつながる恐れがあります。

推論の域を出たこのような危険に直面して、共同体における兄弟的生活を真に強めたいと願うならば、主の賜物である兄弟（遺言 14 参照）のありのままの価値を発見することが必要です。また、「無償性」、すなわち、兄弟はその働きや貢献のゆえに愛されているのではなく、兄弟であるがゆえに、「自分に属するがゆえに」、「神から与えられた賜物であるがゆえに」⁷⁰愛されているという事実を発見し、正しく評価することが必要です。

これら二つの発見を成し得た人だけが、アガペー（無償の愛）の喜びを体験することができます。アガペーとは、無償の、己を顧みない愛であり、兄弟たちの喜びと苦しみを分かち合う「献身的な愛」(oblativ love)⁷¹のことです。それは他者と関わり、他者を気遣う愛なのです。⁷² これら二つの発見を成し得た人だけが、「兄弟をありのままに受け入れる」ことができ、他者に「まことの深い友情」を差し出すことができます。そして、困難さのために乗り越えることができないと思われたような障害物を飛び越えることができるのです。⁷³ 大切なのは、愉快的兄弟共同体を建設することではなくて、兄弟を愛すること、仮にその兄弟から何の応答がなくても彼を愛することなのです。

私たちは、新約聖書が「アガペー」と呼んでいるこの関係性に向かって早急に回心する必要があると思います。アガペーとは、人間の愛、神の愛、隣人愛、相互愛、兄弟愛のことですが、この愛を小さき兄弟の生活の中で最優先しなければなりません。そうせずして、いつも互いに愛し合うことを求めたフランシスコの願い（遺言 3）をどうして実現することができましょう？神である愛（charity）に生き、兄弟愛に生きる人だけが、兄弟共同体の建設のために真剣に取り組んでいるのです。私たちの生活およびそれが意味するすべては、愛の交わりを体験して初めて理解することができます。

ここで大切なのはまことの回心です。つまり、思いや考え方や、生活とそれに伴う諸問題に対する取り組み方、人々を判断するときの基準の選び方などを転換することが求められているのです。アガペーを踏みこむような人を正当化する社会で効率を求める誘惑に屈しないためには、自戒の心構えが必要です。真のキリスト者として、また真のフランシスコンとしての有効性はアガペーにあるという確信を日々の生活の中で持ちつづけることが大切です。そのほかのすべてのことは二の次なのです。

⁷⁰ 使徒的書簡 新千年期の初めに 43

⁷¹ 回勅「神は愛」 7

⁷² 回勅「神は愛」 6 参照。

⁷³ 使徒的書簡 新千年期の初めに 43

私たちにそうする心構えがあるのでしょうか？私たちは兄弟共同体から何を期待しているのでしょうか？私たちはアガペーを土台としてまことの共同体を建設しようとしているのでしょうか、それとも、単なる消費者にすぎないのでしょうか？私たちが共同体を建設する目的は何でしょうか？兄弟共同体の中で愉快にすごすためですか、それとも、キリストに倣い、キリストがなされたように行い、キリストが愛されたように愛するためでしょうか？

単なる友情から、あるいは単に利益を共有する関係からキリストのうちに一致する家族へ

54. 私たちの兄弟共同体を特徴付ける価値の中で、会憲は「相互の友情」⁷⁴を強調しています。「友達のグループ」が閉ざされたグループではなく、「他者」や「異なる人」や「特異な人」をありのままに、気持ちよく受け入れるならば、また、友情が信仰によって支えられるならば、共同体における兄弟的生活を建設する上で、友情は重要な役割を果たすことができます。共通の利益や使命は、その利益が個人主義的なものでなく、その使命が共同体の識別の結果であり、管区や会の兄弟たちの賛同を得るならば、兄弟たちを一つにまとめる力となります。

それぞれの修道院や管区や兄弟会全体の生活の中で、閉鎖的なグループの存在を見かけるのは難しいことではありません。そうしたグループは利害関係から生まれたり、兄弟会の前提条件である信仰の側面を考慮しない単純な友情によって生まれたりします。いずれの場合も、分裂を引き起こします。分裂は「キリストにおいてに結ばれた家族」⁷⁵として定義されたフランシスカンの兄弟性とは無関係のものです。この家族の中でこそ、神を求め、愛することが優先され⁷⁶、私たち兄弟は、「各々の性格、文化、習慣、才能、能力、資質は異なっても、お互いをお互いがあるがままに、そして対等な者として受け入れる」⁷⁷のです。

これらのことをすべて実現するためには、私たちが同じ父なる神の息子であることを体験によって知ること、そして、御子の愛の冒険に関わっていることを実感し、聖霊の一致の力を実感することが必要不可欠です。真のフランシスカン的な兄弟性は、三位一体の営みを体験することによって生まれ、育まれます。そして、その体験の深さに応じて成長して行きます。

すでに述べてきたことから、私たちが愛してくださり、私たちにも同じように愛し合うようにと呼びかけてくださっている神をいつも私たちに示してくれる神の御言葉に、親愛の情と祈りを込めて耳を傾けることが最優先されるべきだと言えらると思います。アガペーという神聖な愛に結びつけてくれる御言葉に耳を傾けることを習慣的に怠っている人々が兄弟共同体に真剣に尽くすことができるのでしょうか？聖霊をいただくためには、日々神の御言葉に耳を傾けつつ、熱心な秘跡の生活と祈りとを並存させる必要があります。聖霊だけが、兄弟共同体を生み出すことができるのです。つまり、「異なった」人々が「心も思いも一つにして」(使徒言行

⁷⁴ 会憲 39。

⁷⁵ Esa II, 25.

⁷⁶ 会憲 45 : 1 参照。

⁷⁷ 会憲 40。

録4：32) 共に生きることのできる兄弟共同体です。聖霊がなければ、兄弟共同体は単なる空想的な理想郷、単なる友情や利害の一致したグループになってしまいます。しかし、聖霊は私たちが「心を合せて熱心に祈っていれば」(使徒言行録1：14) 必ず訪れます。ですから、兄弟共同体においては、本物の祈りの生活が必要とされるのです。つまり、規則や習慣を守るためだけの祈りではなく、兄弟愛の生活を体現し、支えるような祈りの生活です。共同体における兄弟的生活の成長は、一人一人の兄弟の信仰の旅路と兄弟共同体の信仰の旅路と歩調を合せて起こります。もし兄弟共同体の土台に信仰がなかったら、兄弟共同体は遅かれ早かれ消滅し、残るのは単なる友達の集団、仕事集団、あるいは、共通の利害で結ばれている個人の集団になってしまうでしょう。それすら実現しないならば、そこはいつも最も弱い人が負けてしまう「戦場」となってしまいうでしょう。

私たちの兄弟共同体は何を土台として築かれているのでしょうか？私たちの兄弟共同体が信仰の面で成長するためには、どうすればよいのでしょうか？

ファリサイ人の態度から収税吏の態度へ

55. 兄弟共同体は賜物であると同時に困難な務めでもあります。賜物として、私たちはそれを感謝の気持ちをもって受け取ります。そして、務めとして、私たちは兄弟共同体の建設と成長のために真剣に努力しなければならないのです。「深い信仰を持たない共同体は魂を持たず、修行することのない共同体は身体を持ちません。受肉した交わりを築くため、つまり兄弟的交わりの恵みと賜物に肉付けと具体性を与えるためには、神からの賜物と個人的な努力との『共働作用』を要します。」⁷⁸

この「共働作用」の実現のために不断の努力を続けている多くの兄弟がいることを喜びをもって認めなければなりません。しかし同時に、すべてを当然の権利のように考えて、兄弟共同体を「消費する」兄弟もたくさんいることを認識する必要があります。事実、兄弟共同体に最も多くを要求する人は兄弟共同体を最も無視する人であることがまあるのです。そうした兄弟は、真の兄弟共同体は「一人一人の犠牲なしには存在しない」⁷⁹ことを忘れていているのです。

共同体における兄弟的生活の建設に積極的に関わるためには、私たちが互いに傷つけ合っているという現実を認める勇気を持たなければなりません。いただいたものを感謝して受け取り、与え方を知らないことについては謙遜に認めて生きることが必要です。兄弟共同体の建設を可能にするのは、自分のことを罪深い人間と考えていた徴税人の態度であって、自分のことを義人だと考えていたファリサイ人の態度ではありません。理想的な兄弟共同体というものは存在しないこと、そして、人間の弱さという「恵み」の生かし方を知っているならば、その理想に近づくことができ、共同体の一致が崩れても、和睦を図ることによってその一致を取り戻すことができると

⁷⁸ 共同体における兄弟的生活 23。

⁷⁹ 共同体における兄弟的生活 24。

いうことを認識することが必要です。ゆるしてもらいたいと感じている人だけが、他者をゆるすことができるということを心に留めましょう。

自分の弱さに気づくことによって、兄弟愛による矯正を求めるようになるはずですが、これは、目を開き、客観的な態度で行動を起こし、自分の「決心」⁸⁰を思い出し、そして、「軽い足取りで」⁸¹「どのような悲嘆にも、憂いにも迷わされずに」⁸²「主の掟の道をいっそう安全に進む」⁸³ためには、とても重要なことです。

共同体における本物の兄弟的生活の土台を築く時に必要不可欠なのは、与えられたものを認識し、自分の弱さを認めることです。そうした態度を初期養成の初めからたびたび教え込み、人生のすべての段階で育てていくことが大切です。

これらの態度を身に付けるためには、どのような養成が必要でしょうか？ 共同体における兄弟的生活の建設に当たって、ほかに提案するべき大切な方法がありますか？

III 小 さ さ、貧 し さ、そして連 帯

*すべての人、すべての被造物の大切さを
告げ知らせるために、イエスの足跡に従いながら、
この世の街道を歩きつづける旅人であり寄留者である、
小さく、貧しく、連帯した兄弟共同体（2003年の優先課題）*

56. 小 さ さ（内的な貧しさ、心の謙遜さ）、清貧（何も持たずに生きること）、そして連帯（他者の運命に責任を持つこと）は、共同体における兄弟的生活を特徴づけ、定義づける特質です。なぜなら、それらの特質は兄弟としての私たちのあり方、教会の中で、また、世間で見捨てられた修道院の中で福音を告げ知らせる私たちの独特な生き方を示しているからです。私たちは「小さき者」の兄弟共同体なのです。

何も所有せず、連帯して小さき者として生きることは、現代世界における私たちの生き方です。それは、フランシスコが彼の時代に福音を選び取って生きた生き方であり、「言葉と行い」（クララの遺言5）によって示した生き方であると同時に、御身分は神であられたにもかかわらず、神と等しくあることに固執されず、御自分を空しくし、十字架上の死まで受け入れるほどに謙遜で

⁸⁰ 聖クララ プラハのアグネスへの第二の手紙 11。

⁸¹ 聖クララ プラハのアグネスへの第二の手紙 12。

⁸² 聖クララ プラハのアグネスへの第三の手紙 11。

⁸³ 聖クララ プラハのアグネスへの第二の手紙 15。

あられたキリスト、私たちの救いのためにパンの形色のうちに隠れられた（全兄弟会への手紙参照）キリストの思いを自分のものとする生き方なのです。

何も所有せず、連帯して小さき者として生きようとすると、ある程度社会的な制約を受けます。なぜなら、ある程度外的にも内的にも剥奪された状態になりますし、すべての人のしもべとなり、すべての人に仕えて（全キリスト者への手紙II, 2 参照）他者に対して権力を振るわず、貧しい人と共にいて、世界を貧しい人の目で見ることが必要になるからです。いずれにしても、その最も深い動機はいつも絶対的に福音です。福音こそは「イエス・キリストの御跡にいつそう近く従う」⁸⁴ことを選んだ人の行動を示し、仕えるために「すべてを脱ぎ捨て、耳を傾け、服従し、分かち合うために「謙遜になること」を意味するのです。

また、神は、御自分の物を持たず、御子のペルソナを通してすべての人と連帯する小さき者として御自分を示されたのですから、何も所有せず、連帯して生きる小ささは、神に出会う特別の恵みの場です。従って、何も自分のために取っておかない人（全兄弟会にあてた手紙 29 参照）だけが他者を受け入れ、他者に仕えることができるのだということが分かります。

活力のしるし

57. 私たちの兄弟会は、第二バチカン公会議以後、「キリストを心から愛し、キリストに従った」⁸⁵フランシスコが行ったように、会則が提案しているプロジェクトに励まされて、兄弟たちの生活と活動の中でイエスの歩まれた道を忠実に辿るために大変な努力を続けてきました。このプロジェクトは「優先課題」の中で次のように述べられています。すべての人、すべての被造物の大切さを告げ知らせるために、イエスの足跡に従いながら、この世の街道を歩きつづける旅人であり寄留者である、小さく、貧しく、連帯した兄弟共同体。⁸⁶

このような文言にたどり着くことができたのは、フランシスカンのカリスマに対する知識が深まり、時のしるしと場所のしるしを調べ、それらを聖福音の光に照らして解釈することができたおかげです。それを通して、私たちは神から問われていると感じ、福音的な応答をするように呼ばれていると感じるのです。⁸⁷

周辺地域への移動

58. 小ささ、貧しさ、連帯の中で見られる時のしるしの中で特に指摘したいのは、最近、兄弟たちが自分が偉く見えるような（小ささとは正反対の）組織や（清貧の生活と正反対の）富や（小さき人々との連帯と正反対の）所有者であることを捨てて、周辺地域や辺境地帯へ、「忘れ去られ

⁸⁴ 誓願文 会憲 5 : 2。

⁸⁵ クララの遺言 5。

⁸⁶ 小さき兄弟会の優先課題 2003 - 2009、兄弟的な世界を目指してキリストに従う p 23。

⁸⁷ 2003 年総集会 2003 年総集会総括文書 6。

た非人間的な修道院」⁸⁸へと移動する傾向が出て来たことです。この中で、特に最近増えてきた「巡業する兄弟共同体」と「地域に入り込んだ兄弟共同体」(inserted fraternities)の重要性を強調したいと思います。これらの共同体が管区の兄弟共同体の識別と同伴の結果生まれたものであるならば、私はこれらの兄弟共同体を、「旅人であり寄留者」(裁可会則 6:2 参照)である必要と、貧しい人々や卑しくて見捨てられている人々(非裁可会則 9:2 参照)と共にいる必要をすべての兄弟たちに思い起こさせる非常に肯定的で意味のある重要な兄弟共同体であると宣言することをほばかりません。⁸⁹

質素で本質的な生活の選択

59. 福音のラディカリズムと生活必需品にも事欠く多くの貧しい人々との連帯への招きに突き動かされて、簡素で本質的な生活を送ることを、多くの兄弟たち、そして各管区を含めて多くの兄弟共同体が選択したことは、活力があることを示す重要なしるしです。これによって、多くの兄弟共同体が自分の家の一部を貧しい人たちに提供したり、食料を配給したり(スープキッチン)、ホームレスの人たちを受け入れ、手を差し伸べ、専門的な助言を与えたりするようになりました。

正義の推進者として、また、平和の道具として

60. 小ささと貧しさと連帯を選んだことが示すもう一つの明るいしるしは、正義と平和と被造物の保全に真剣に取り組む兄弟が増えたことです。彼らは、そうすることで、市場や暴力の世界で黙って耐えている声なき人々との特別な連帯を表明し、人権擁護のために積極的に働き、人権侵害に対しては容赦なく糾弾するのです。連帯は、教育や支援、司牧、人間開発などの活動においても見られます。多くの兄弟がエイズやハンセン病、深刻な依存症(薬物やアルコールの)に苦しむ人々のために働くと同時に、学校や大学などで教育に携わっていますが、それは連帯という点で非常に意義深いことです。

協力態勢

61. 私たちの小ささの持つもう一つの重要な側面は、今まで私たちが全責任を持っていた活動について、信徒やフランスカン家族や他の教会関係者や国家からの協力を歓迎するようになったという事実です。また、私たちの責任ではない他の人々の活動に対しても、協力するようになったという事実です。

連帯への呼びかけに対する応答

62. 連帯という面では、会の総本部が行った協力への呼びかけに対して惜しみない応答があったことは喜ばしい限りです。たとえば、自然災害の被災者との連帯、貧しい管区との連帯など。こ

⁸⁸ 2003年総集会 2003年総集会総括文書 37 参照。

⁸⁹ 共同体における兄弟的生活 63 参照。

れに関連して、各管区が「養成学問基金」や「聖フランシスコ連帯基金」、「福音宣教基金」などに出資してくれたことに対して心から感謝し、お礼を申し上げたいと思います。

回心への招き

63.すでに指摘したポジティブな要素と、小ささ、貧しさ、連帯のうちに生きる兄弟たちが証している他のすばらしい要素のほかに、私たちの生活のこの側面には常に陰の部分があること、そして、神の恵みはそれらの陰の部分を識別するための光と克服するための精神力を与えてくださることを指摘しなければなりません。

考えるヒントをいくつか挙げてみましょう。

私たちの占める社会的な立場

64.多くの兄弟や兄弟共同体が中央から周辺部に移動してきていることは疑いようのない事実です。周辺部に移動するための具体的な選択肢はいろいろあります。私は各管区を訪問していた時に、それらを直接知る恵みを主からいただきました。しかし、それと同時に、私たちが社会的に中流/上流階級に属する場合が多いことも、残念ながら疑いようのない事実なのです。

会憲は、私たちに「自分が無価値で、愚直で、軽んずべき者とみなされることを、平然と受け止める」ように求めています⁹⁰。そればかりでなく、「社会においては、取るに足りないと言われる人々の生活と境遇を受け入れ、常に彼らの間で、小さきものとして生き、この社会的境遇から神の国の到来のために働く」ように求めています⁹¹。私たちは誰をも、とりわけ貧しい人々を拒むことのないような生き方をするように求められているのです⁹²。私たちは「現代の『偽りの価値観』を非とする預言的な姿を明らかに示さなければなりません」⁹³。

この観点から考えると、折に触れ次のように自分に問うてみる必要があります。すなわち、私たちの社会的立場とは何か？どのような立場から語り、どのような立場からプロジェクトを作るのか？聖霊はどの方向に私たちを導いているか？と。

連帯

65.私たちは確かに貧しい人たちや困っている人たちのためにたくさんの良いことをしています。それらを今後とも続け、強化するべきだと私は思います。しかし、それだけでは不十分です。支援活動だけでは足りないのです。なぜなら、すでに述べたように、彼らをいろいろな形で支援に

⁹⁰ 会憲 65。

⁹¹ 会憲 66：1 参照。

⁹² 会憲 66：2 参照。

⁹³ 会憲 67。

頼る、あるいは支援の虜^{とりに}にしてしまう可能性があるからです。困っている人を助ける時には、彼らが自分の手で自分の生活と未来を築くことができるようにするべきです。

それと同時に、私たちの連帯の活動が、私たちの生活様式と何の関係もないような態度、すなわち、中流階級になったり、安全を求めたり、内面的・外面的自由を失ったり、特定の場所や仕事や人々、物事、過去の地位などにこだわったりするような態度を正当化することのないように気を付けねばなりません。

連帯はまた、「内に向かう」(ad intra)ものでもあります。つまり、同じ共同体の兄弟たちとの連帯、各地域の兄弟共同体と管区共同体との連帯、管区共同体と兄弟会との連帯です。

物品の分かち合いについては、主はどのようなことを求めておられるでしょうか？ある者は無駄遣いをし、ある者は不足に悩む。同じ兄弟共同体の中で、あるいは同じ管区であり、会なのに修道院によってそのような不平等が生じるのをどうして正当化できるでしょうか？

私たちの財産、それはいと高き清貧

66. 私たちは自分の相続分、すなわち、フランシスコが残してくれたあのいと高き清貧という美しい財産を守るために細心の注意を払わねばなりません。この財産は、小ささが物質的な貧しさと連帯と不可分に結びつくことによってできたものなのです。私たちが守るべきこの貴重な財産（裁可会則 6：4 - 6 参照）は、権力闘争 一部の管区で見られる争い や、管区内の分裂や理事たち間の分裂の結果、あるいはまた、他者の必要に無関心で無責任な一部の兄弟のために失われてしまう可能性があります。このいと高き清貧という財産は、「個人の財力」やフランシスコの正義によれば兄弟共同体に属すべきものを不正に私物化して溜め込んだ個人のお金が認められるようになった時に失われてしまいます。いと高き清貧という財産は、兄弟たちが互いのために生きるのをやめた時、互いに頼りあいながら生きるのをやめた時、それはすなわち、真の従順に生きることと拒否するのと同じことなのですが、その時に失われてしまいます。いと高き清貧はフランシスコの特徴でしたが、私たち小さき兄弟の特徴でもあらねばなりません。

良い状態からさらに良い状態に移行するプロセスの中で

67. 小ささと貧しさと連帯は、現代の私たちの生活の特徴です。それは、師父であり兄弟であるフランシスコの次の言葉に基づいています。「これまでのところほとんど、あるいは全く進歩がなかったのですから…。」⁹⁴

良い状態からさらに良い状態へと移行するために、次のような提案をしたいと思います。

⁹⁴ 1 チェラ 103。

清貧の誓願に対する理解を深めよう

68. 清貧の誓願は多くの兄弟たちにとって個人的な事柄に過ぎません。清貧の誓願によって彼らの生活は個人主義的なものになりがちで、しかも、物質的な貧しさとの関連においてのみ理解されることが多いようです。それにより、彼らの清貧生活は形式的で定量化しやすいものとなっています。多くの兄弟たちは、貧しい人々との情のこもった連帯という清貧の側面を自分の生活から締め出し、貧しい人々と共に貧しく、現代のハンセン病者に憐れみを示す（遺言3参照）ようにとの兄弟会のカリスマからの呼びかけに無関心になっています。

清貧の誓願が物質的なことにとどまらないことは確かですが、しかし、物質的な貧しさを必然的に伴うこともまた確かです。清貧の誓願は「他者とのつながりという観点」(ecological perspective)から見ると、兄弟同士および貧しい人々の相互依存と連帯の関係を意味します。この観点から見ると、清貧の誓願は、貧しい人々の必要を常に念頭に置いて、どのような蓄財をも避けるための手段でもあります。⁹⁵それは、私たちの間にも浸透してきている消費文化(culture of waste浪費の文化)に対抗する手段でもあるのです。

清貧の誓願は、与え受けるという相互性を伴う連帯の誓願として理解され、実践される必要があります。

相互性がなければ、連帯は依存を生み出し、会の内外で「偽りの連帯」の対象となっている人々を抑圧する結果になりかねません。ヨハネ・パウロ2世が述べておられるように、「今は、新しい愛の姿が求められる時」⁹⁶ なのです。すなわち、最も小さく、排斥された人々に近づけてくれる愛、与え受けるために、「全世界の社会的に小さな人々と兄弟的交わりを持」⁹⁷ たせてくれる愛なのです。

清貧の誓願はまた、フランシスコが望み、私たちが約束したように、何も持たずに(sine proprio)生きるように導いてくれる自由の誓願として理解され、実践されるべきです。福音的かつフランシスカンの清貧は、主に徹底的に従うことと最も貧しい人々に仕えるのを妨げるあらゆるものから兄弟を解放してくれます。この意味で、貧しい人だけが本当の自由人なのだと言えます。貧しい人は、異邦人の取り越し苦労(マタイ 6:31-32参照)から解放されており、「穀物倉」に保管してある余剰品に心を奪われることもなく、過去へのこだわりからも解放され、個人的なプロジェクトからも解放されて、フランシスコのように自由で、いつでも主の不意打ちに 대응することができるのです。

清貧の誓願をどのように捉えたらよいのでしょうか？また、どのように生活したらよいのでしょうか？貧しいために自由であると感じますが、それとも自分の必要をすべて満たすことができないので

⁹⁵ 会憲 82:3 参照。

⁹⁶ 使徒的書簡 新千年期の初めに 50。

⁹⁷ 会憲 97:2。

不自由だと感じますか？ 私たちに本当に必要なものをはるかに超えた釣り合わないものをどのように生かし、誰のために用いるべきでしょうか？

労働を恵みと考えよう

69. 労働は、神の御計画によれば、人間の条件に属します。仕事もまた、私たち小さき兄弟にとっては恵みなのです。

労働は恵みです。なぜなら、何よりもまず、それが「あらゆる善を語り、そして行われるいと高き」(訓戒の言葉 8 : 3) 神の賜物であるからです(裁可会則 5 : 1 参照)。労働は恵みです。なぜなら、労働のお陰で私たちは他者、特に最も貧しい人々と関わることができるからです。労働、特に手作業および肉体労働は、貧しい人々が(彼らだけではないが)最もよく理解できるしるしです。彼らの中で、彼らと共に私たちは生き、生活を共にするのです。従って、フランスカンの生活の証しと、貧しい人々への連帯と奉仕が輝き出るような労働の分野を求めるべきです⁹⁸。労働は恵みです。なぜなら、報酬として「体に必要なものを」(裁可会則 5 : 3) 受けることによって、他人の重荷にあまりならないようにできるし、「怠惰のために心や舌が、悪い方に傾かないように」⁹⁹できるからです。最後に、労働が恵みなのは、働くことによって創造主である神に協力する者となれるからです。

労働は恵みなので、誰もどのような働きをも自分のものにしてはなりません。そのようなことをすれば、自分のものでないものを不当に私物化することになり、従って、いと高いお方への冒瀆となります。それゆえ労働は、どのような働きであれ、主からいただいたものを主にお返しするような態度で行うべきです。「神が、他人を用いて語ったり、行ったりされる善について誇れないように、自分を用いて語ったり、行ったりする善について誇らないしもべは幸いです」(訓戒の言葉 17 : 1)。これはどういうことかということ、私たちはいつも自由で、いつでも仕事を断念し、必要な新しい働きに就く用意を持つ(それが仮に専門職であったり、長年携わってきた仕事であっても)ということ¹⁰⁰です。この意味で、すべてをお返しするという態度は、私たちを真の旅人にし、貧しい人と聖霊の臨在を感じて生きる真の信者とが持つ自由へと向かうのを妨げるあらゆる形の依存症と奴隷化から私たちを救う真の方法なのです。それに、労働が私たちのものでないなら、労働から得られる成果も私たちのものではありません。兄弟たちにとって、労働に携わらなかった他の人をも私たちの労働の実りに与らせることこそ、正義であり、連帯の精神にかなうことです。

フランスカンの見地から考えると、労働は「忠実かつ献身的に」(裁可会則 5 : 1) 行われるべきものです。兄弟たちのすべての労働(肉体労働、司牧活動、知的労働など)を特徴づけるべきこの二つの表現の中に、「聖なる祈りと献身の霊を消さないようにする」(裁可会則 5 : 2) こ

⁹⁸ 会憲 78 : 1 参照。

⁹⁹ 2 チェラ 161。

¹⁰⁰ 会憲 77 : 2 参照。

とを忘れずに、労働に真剣に（忠実に）取り組むことをフランススコが私たちに求めていることが読み取れます。言い換えれば、小さき兄弟にとって、労働とは、選択ではなくて、賜物に対する応答、すなわち、召命への応答なのです。ですから、惜しみなく、忍耐強く行われなくてはなりません。しかも、労働は兄弟たちの生活の中で絶対的な価値を持つものではありません。価値には優先順位があり、祈りと献身の霊こそ第一位に置かれるべきもの（兄弟アントニオへの手紙 2 参照）です。

価値の優先順位を明らかにし、労働を小ささと清貧とに結び付けつつ（裁可会則 5:4 - 5 参照）、フランススコは「フランススカンの労働」が、あり方、すなわち小ささと貧しさを重視する生活の質を土台として兄弟愛を裏付けるものとなるべきであることを私たちに教えています。フランススコにとり、すべての善が生まれ、すべての善が帰するのは神なのです。「あなたは私たちの十全の富、富のすべて」（いと高い神への賛歌 4）。

私たちが行う労働の自由 - いつでも主の祝福をいただいて別の仕事を始められる自由 - と、いただいた賜物および委ねられた任務に対する責任と、価値の優先順位に対する尊重とを土台として、私たちの活動（それが司牧活動であれ、専門職であれ）を位置付けなければなりません。

労働に対するフランススコのこうした考え方に照らしてみると、次のように自分に問うてみることは役に立ちます。

自分に委ねられた労働について、自分はその労働の所有者であると思いますか？それとも、主のブドウ畑で働く単なる労働者であると思いますか？神とのかかわりにおいて、また、兄弟共同体の兄弟たちや貧しい人たちとのかかわりにおいて、労働の恵みを具体的にどのように「還元」していますか？働くことは生活の一部であり、選択の余地はありません。私たちの労働時間を考えた場合、私たちは貧しい人だと言えますか？自分に委ねられた働きに対してどのような責任感を持っていますか？私たちの労働は、社会的身分からいうとどのようなものになっているでしょうか？

個人主義的な経済から兄弟的で、透明性のある連帯の経済に移行しよう

70. 私たち兄弟は、経済のことを、フランスカン精神の本質的な価値と切り離して考える傾向があります。たいていの場合、経済状態を貧しさと結びつけて考えています。しかも、自分が誓約した福音的な選択を、共同体的・兄弟的の意味合いから離れて、個人主義的なレベルでのみ行い、生き、評価すべきだと考えがちです。しかし、私たちはその人の経済行動によって、自分の誓約に従った生活様式を守っているかどうかをはっきりと判断することができます。

すでに述べたように、私たちの間には多くの経済的不平等がありますが、それこそは本当の不正義なのです。複数の会計があり、個人口座があり、自分の労働から得た収入を自分の懐に入れ

る兄弟がいます。また、管区長や兄弟共同体からの必要な識別を受けずに、かなりの額の金銭を自分個人のために使ったり、家族に送金したりする兄弟もいます。多くの場合、状態は深刻です。ある視察者たちは、公式訪問後の報告書にそうしたことを記しています。不正なお金の使い方の問題だけでなく、ほかにも私たちの生活様式にそぐわない多くの問題が発生しています。これらのことをどうして正当化できましょうか？それらは私たちの兄弟的なあり方にふさわしいものではなく、会則にも会憲にも認められていないものです。複数会計や秘密会計は決して許されるべきものではありません。では、どうすべきでしょうか？

このような状態を続けてはなりません。変革が必要です。秘密会計から完全な透明性へと移行しなければなりません。そうすれば、兄弟間の関係に自由と平穏が生まれます。複数会計や秘密会計は緊張を生むもととなりますし、自由を損ないます。そればかりか、私たちが誓約した「何も持たずに生きる」という生き方に背きます。兄弟たちのお金の使い方如何で、兄弟共同体の中に信頼が生まれもするし、緊張が生まれもするのです。

また、会計が透明であるだけでは不十分です。兄弟愛と連帯の精神が必要です。連帯は、「何も持たずに生きる」、つまり、経済的安定を捨てて生きることを選んだ結果なのです。

さあ、始めましょう。小さき兄弟としてのアイデンティティーが示す方向に、そして、「創立の恵み」が呼びかけている方向に歩みたいならば、経済面での再建が緊急に必要です。

連帯の精神で兄弟愛と透明性のある会計管理を行うために、初期養成の段階からどのように取り組んでいますか？金銭の無駄遣いや乱用に対してどのように対処しているのでしょうか？個人のレベルや兄弟共同体のレベルで、連帯の精神を持っているのでしょうか？

正義と平和と和解のあかし人となり、推進者となりましょう

71. 私たちはあらゆる種類の不正義に引き裂かれ、暴力によって傷つけられ、ゆるしが欠けているために分裂した世界に住んでいます。2003年の聖霊降臨の総集会総括文書、「主があなたに平和を与えてくださいますように」は、不完全ではあるものの、この悲しいしかもドラマチックな現実を強調するしるしを列挙しています。¹⁰¹

このような状況に直面して、「全世界の暴力とそこに住む人たちの毎日の叫び声」¹⁰²に心を痛めるだけでは不十分です。ましてや、多くの男女、兄弟姉妹が経験している悲劇を黙って見ていることはゆるされません。このような状況に直面して、私たちは暴力を呼び起こすダイナミクスに気づき、個人としても組織としてもそれに対抗していこうという意識をもつように強く呼びかけられていることを認識しなくてはなりません。¹⁰³

¹⁰¹ 2003年2003年総集会総括文書12参照。

¹⁰² 2003年2003年総集会総括文書20。

¹⁰³ 2003年2003年総集会総括文書9、13参照。

同じ総集会の文書が指摘しているように、神のお陰で、私たちは「私たちの生活と人々の暗闇の中にある光に気づかせてもらうことができます。それは希望を生み出してくれる灯火です。」¹⁰⁴それは私たちの間に生まれようとしている新しい時を指し示しています。¹⁰⁵このような状況の中で、私たち小さき兄弟は、どのような態度をとるべきでしょうか？暗闇の中で一条の光を見つける術を私たちは持っているでしょうか？

会憲は私たちに次のように求めています。「慈善と正義と国際的連帯の諸事業に参加すること」¹⁰⁶、そして、「全世界に和解と平和と正義を、行いをもって説くこと」¹⁰⁷、さらに「正義の擁護者、平和の先駆者および働き人となり」¹⁰⁸、「復活したキリストにおいて、正義と解放と平和の社会を築くよう献身し」¹⁰⁹、「落ちこぼされた人々、貧しい人々、抑圧されている人々、苦しめられている人々、病気の人々を優先させること。」¹¹⁰

私たちはこうした会憲の呼びかけにまだ真剣に答えていないような印象を私は持っております。むしろ私の印象では、私たちは現代の多くの人々が体験している過酷な現実気づかずに暮らしていることが多いのではないかと思います。貧しい人々の叫びを聞き、多くの男女、兄弟姉妹が苦しんでいる不正義を見逃さないために、「扉と窓を開け放つ」必要があります。多くのケガ人や半死半生の人が道端に転がっているのに、彼らの存在に気づきもしない、あるいは、気づいても通り過ぎてしまうことが多いという気がします。そのことに気づくことから始めるのは良いことです。それは私たちの回心の旅路の第一歩となるでしょう。

小ささと貧しさと連帯を証しするということは、正義と平和と和解のために献身的に働くことでもあります。この献身的な働きこそは、私たちのアイデンティティーの基本です。私たちの生活のこの側面を決して斥けてはなりません。人権が侵害されるのを腕をこまねいて見てはいけません。いろいろな形となって現れる暴力を傍観してはいけません。会憲の次の言葉を心に銘記しましょう。「抑圧された人々の権利を擁護するに当たって、兄弟たちは、暴力的行為を斥け、より弱い者にも使えるその他の手段に訴える。人類を脅かす大きな危険をも認識して、兄弟たちは、あらゆる形での戦争行為および軍備競争が、世界にとって最悪の災難であり、貧しい人々に最大の痛手を負わすものとして、強く非難する。そして労苦をいとわず、平和な神の国を築くために働く。」¹¹¹

今ここで、正義と平和と和解の証し人となり、推進者となるために、福音が現在の私たちに求め

¹⁰⁴ 2003年2003年総集会総括文書6。

¹⁰⁵ 2003年2003年総集会総括文書6、13参照。

¹⁰⁶ 会憲96：2。

¹⁰⁷ 会憲1：2。

¹⁰⁸ 会憲68：1。

¹⁰⁹ 会憲96：2。

¹¹⁰ 会憲97：1。

¹¹¹ 会憲69。

ていることとは何でしょうか？ 私たちに小さき兄弟として、正義と平和と和解の促進のために貢献できることとは具体的にどのようなことでしょうか？ 現代世界および会憲や会則が求めていることに応えるには、個人として、また兄弟共同体としてどうすればよいでしょうか？ 私たちが暮らしている現実を踏まえて、また、会憲や会則の求めていることに応えて、私たちはどのような変化を遂げなければならないのでしょうか？ それぞれの管区に J P I C 委員会を作るにはどうすればよいでしょうか？ どうすれば、彼らの仕事に協力できるのでしょうか？

IV 福音化 - ミッション

*「不安で人生の意味を探し求めている人類に
『霊と生命』である御言葉を差し出すために
福音によって育まれている兄弟共同体」*

72. 私たちは福音化するように招かれています。宣教のために派遣されるべく存在しているのです。「イエスは 12 人を任命し、使徒と名付けられた。彼らを自分のそばに置くため、また、派遣して宣教させるためであった」(マルコ 13:3)。「神の示しを受けて」(非裁可会則 2:1) この生活に入ることを望んだ私たち小さき兄弟は、私たちの主イエス・キリストの福音を守ることを「会則と生活」としています(裁可会則 1:1)。それと同時に、私たちは自分の使命が、フランシスコと同じように、「この世界をキリストの福音であまねく満たすこと」であると感じています。¹¹² 「私たちの主イエスキリストの足跡に従いつつ」(非裁可会則 1:2) 私たちは自分の使命、すなわち教会と世界に存在する理由が、福音を生き、すべての人々、特に「貧しいひとびと」、「捕らわれた人々」そして「目の見えない人々」に福音を告げ知らせることであることを知っています。

113

従って、福音化について語るということは召命について語ることであり、教会と世界における自分の存在理由について語ることなのです。ミッションは一つです。つまり、ひとり子を世に遣わされた父なる神のミッションであり、使徒たちを派遣されたひとり子のミッションです(マタイ 10 以下参照)。私たちは洗礼を受けた者として、また、フランシスカンとして、聖霊の恵みをいただきながら、全教会に委ねられた使命を分かち合うことによって福音を生き、告げ知らせるために派遣されています。「だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にきなさい。」(マタイ 28:19)。

¹¹² 1 チェラノ 97。

¹¹³ 2003 年総集会総括文書 37 参照。

ミッションが単なる教会の活動ではなく、その存在自体に関わるものであるならば、福音化はフランシスカン共同体の生活における単なるもう一つの任務としてではなく、キリスト者としての召命をその深みにおいて表す任務として考えるべきです。福音化は遂行すべき使命ではなくて、私たちの存在理由なのです。「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたをえらんだ。あなたがたが出かけて行って実を結び、その実が残るようにと。」(ヨハネ 15 : 16)

その方向に私たちの「背中を押して」くれるのは聖霊です。私たちはその「後押し」に応えなければなりません。ですから、福音化を小さき兄弟の召命として語るとき、私たちは司牧的な必要を満たすことを言っているのではなく、召し出しに応えることについて語っているのです。それは、神と人間との深い対話から生まれる応答、父なる神の福音そのものである主によって人々のもとへ派遣されたことへの気づきから生まれる応答、神の国を各兄弟の心の中で受け入れることによって生まれる応答なのです。

活力のしるし

73. 第二バチカン公会議以降、私たちの兄弟会は、福音化 宣教派遣 (ミッション) を刷新するために大変な努力を重ねてきました。

グアダハラ (メキシコ) での総評議会でも明らかになったように、私たちは「派遣されて宣教する兄弟共同体」(fraternity-in-mission) を形成することの大切さに気づくようになりました。そして、福音化 宣教派遣 (ミッション) に献身することこそ、私たちの生活のアイデンティティであるがゆえに、私たちの存在理由であることをいっそうはっきりと気づくようになりました。教会の公文書および会の公文書はこの点で大いに私たちの助けとなりました¹¹⁴。

より明らかな活力のしるしとして、次のことを指摘したいと思います。

新しい形の福音化を求めて

74. 使徒的生活を営む他の修道会のように、私たちの兄弟会も、新しい方法でフランシスカンのカリスマを生きるように促され¹¹⁵、新しい要求に応えた福音宣教活動の方法を探し求め¹¹⁶、福音を創造的かつ徹底的に具体化しようとする心を発見し、励まし、祝うようにと突き動かされつつ、活動の場 (occupational geography) を変えて来ています。私たちは新しい形の使徒職を取り入れ、新しい教会と社会の必要に応えようとしています。たとえば、少数民族のために働いたり、薬物依存症患者、エイズ患者、その他あらゆる種類の現代の「らい病者」と社会から締め出された人々のために働いています。

¹¹⁴ 特に、1991年のサンディエゴでの総集会の文書「今日のフランシスコ会と福音宣教」、1996年兄弟ヘルマン・シャルック総長の手紙「この世界をあまねく福音で満たすために」。

¹¹⁵ 会憲 115 : 2 参照。

¹¹⁶ 会憲 51 参照。

生活を刷新するということが時のしるしだけでなく、場所のしるしをも識別することだとすれば、自分が今どこにいてどこにいるべきなのかを確かめる必要は日に日に増しています。このようにして、「地域に入り込んだ兄弟共同体」(fraternities of insertion)と「巡業する兄弟共同体」が生まれ、組織のあり方が見直され、空間が共有され、活動の場の移動が見られるようになりました。¹¹⁷

これらのことを考えれば、私たちが「自分の判断で生活すべき場所を選ぶこと」はできないこと、そして、「美しさや人間としての尊厳が相変わらず損なわれている忘れ去られた修道院、つまり非人間的な修道院へ惹かれるままに行く」¹¹⁸必要のあることが分かります。こうして、私たちは少しずつ貧しい人々、すなわちイエスの宣教の最初の対象者(ルカ 4:18 - 21 参照)に近づき、彼らに慈しみと優しさを示すことができるようになります(遺言 2 参照)。

その結果、今日では多くの兄弟が文化的、社会的、宗教的に多様な環境に住みながら、その中で対話と連帯を通して、また、平和と和解と正義への献身によって、福音化を進めています。

福音宣教の第一の方法としての生活による証しの再発見

75. 「奉献された人々の福音宣教に対する独自の貢献は、第一に、人間への愛から自らをしもべとした救い主に倣って、神と兄弟姉妹に完全にささげられた生き方をあかしすることです」。¹¹⁹最近では、フランシスカンの源泉資料についての知識が深まったことにより、私たちは福音宣教とそれに携わるように召し出された人々の生活の証しとの不可分の一体性についてよりよく理解できるようになりました。神の国を、自分の生き方で身を以って証しすることにより静かに告げ知らせることは、福音宣教の第一の方法であり、兄弟たちは置かれた環境でそれを実行しようとしています。キリストに結ばれば結ばれるほど、私たちの福音宣教の実りは豊かなものとなりますし、「キリストのうちに生きれば生きるほど、他者においてキリストに仕えることができるようになり、はるか遠くの宣教の地点にまでも足を伸ばし、きわめて大きな困難に直面するようになる」¹²⁰のですから、福音化 宣教派遣(ミッション)は、キリストとの実存的交わりから始まらなければなりません。ということは、福音宣教を目指して私たちが行うことはすべて、その力の源泉を絶えざる祈りの生活に求めなければならないということです。生活のすべては、祈りと崇敬と自己放棄と感謝の心で満たされていなければなりません。

福音宣教と兄弟共同体の生活における交わりとの間には深いつながりあることも徐々に理解されつつあります。フランシスコは、イエスのように兄弟たちを決して一人でではなく二人ずつで

¹¹⁷ 小冊子「時のしるしからしるしの時へ」は、新しい形の福音宣教の試みについて実例を挙げています。ヨーロッパにおける新しい形の福音宣教について、福音宣教総本部事務局は2006年2月20 - 25日にアシジでセミナーを開きました。

¹¹⁸ 2003年総集会 2003年総集会総括文書 37。

¹¹⁹ 奉献生活 76。

¹²⁰ 奉献生活 76。2003年総集会総括文書 38 参照。

派遣しました。私たちは「宣教のために派遣される」(in-mission) 兄弟共同体であり、兄弟共同体として派遣されるのです。私たちは兄弟共同体から出発し、兄弟共同体に戻るのです。ですから、原則的には、宣教派遣(ミッション)のない兄弟共同体はあり得ないし、兄弟共同体のないフランスカンの宣教派遣(ミッション)もあり得ないと言えます。

私たちの生活様式を心に留めると、私たちの福音宣教活動が、小さく、貧しく、連帯するようにとの召し出しと不可分のものであることが分かります。私たちは小さき者であるからこそ、誰にも如何なる権力を振るうことなく、すべての人のしもべとなるのです。私たちは貧しいからこそ、貧しい人々によって福音化されるのです。私たちは連帯しているからこそ、「私たちの天幕に場所を広く空け、この世の最も貧しい人々の喜びと苦しみを分かち合いたい」¹²¹と願うのです。

また、ここ数年の間に、福音宣教は、現代の要求にかなった養成と不可分のものであることがいっそう明らかになりました。確かな養成というものがあって初めて、私たちは福音を現代文化の中心に据えることができるのです。質の高い養成なくしては、質の高い福音宣教もあり得ません。

「諸国の民への」ミッションを目指して

76. 私たちの兄弟会は、人種や言語、文化、宗教を問わず、すべての人のそばにいたために、すべての人に会い仕えるために、最も遠くの人々のもとに行くように求められているといつも感じて来ました。その結果、数年前から、アフリカプロジェクト、タイプロジェクト、そしてロシア・カザフスタンプロジェクトが生まれ、さらに2003年の総集会の後では、ミャンマー、ブルキナ・ファソ、ナミビア、そしてスーダンにも新しい宣教基地ができました。主は、これらの土地での新しい召命を祝福して下さり、新しい管区のいくつかは「新しい土地」に「会を新設する」(implantatio Ordinis) 責任を引き受けることになりました。それと同時に、聖地やモロッコのように重要なこれらの宣教基地を強化するために、並々ならぬ努力が重ねられたのです。

これらのプロジェクトのすばらしさは、それが会のプロジェクトだという点にあります。なぜなら、そのためにさまざまな管区から、多様な文化的背景を持つ兄弟たちがこのプロジェクトに参加しており、国際的で多文化的な兄弟共同体を構成しているからです。

この意味で、特筆すべき例が二つあります。一つは、ブリュッセルにできた「神の示しを受けて」「諸国の民」に派遣される人々を養成するためのノートルダム・デ・ナシオン(諸国の聖母)兄弟共同体、そしてもう一つは、イスタンブールに出来た異文化間のエキュメニカルな対話を目指す、新しい形の「諸国民への」ミッションであるサンタ・マリア・ドラペリス兄弟共同体の建設です。

¹²¹ 2003年総集会総括文書 37。

伝統的な福音宣教方法の活性化

77. 私たちの会にはフランシスカン的で非常に豊かな存在の証しと福音宣教活動があります。本当の福音宣教を目指す兄弟共同体を生み出すための称賛に値する努力が、多くの管区で行われています。全般的に見ても、兄弟たちが人々、特に貧しい人々のそばにいるのは確かです。また、兄弟たちが教会とも緊密に協力し、交わりながら働いていることも確かです。多くの兄弟たちは、小教区や巡礼地、学校、社会福祉などの「伝統的な使徒職」に新しい命とフランシスカン的な精神を吹き込みたいと考えています。そうした伝統的な使徒職の重要性を認めて、定期的な見直しがしやすいように、目標の明瞭化と具体的な方法を探ろうとの試みがなされています。それは、現代の司牧的な必要とフランシスカンの生活様式によりよく応え、単なる反復作業に陥る危険を回避するためです。

福音宣教プロジェクトは、それがあるところではどこでも、こうした活性化に大いに貢献してきました。

回心への招き

78. 私たちの生活の他の側面と同様に、福音宣教にも光と影があります。たくさん前進したと思える時には、これから進むべき道のりが長いことも確かなのです。回心への招きはたくさんありますが、中でも次のことを強調したいと思います。

フランシスカン的な精神に欠けた福音宣教

79. 明瞭なフランシスカン精神を持った「福音宣教方針」(project of evangelization) にふさわしい福音宣教する兄弟共同体を生み出すために、多くの管区でさまざまな努力が払われてきたことはすでに述べました。しかしそれと同時に、他の多くの管区ではこの方針 (project) が欠けており、多くの場合、私たちの活動には明瞭なフランシスカン精神というものが欠けていることを認めなければなりません。いまだに多くの、あまりにも多くの兄弟が、特に小教区で一人暮らしをしています。多くの兄弟がすばらしい仕事をしていても、しかも兄弟共同体に住んでいても、それを「兄弟共同体の仕事」とは言えない場合が多いのです。かなりの人数で共同生活をしている兄弟共同体においてすら、各人が「自分の」活動に没頭し、他の兄弟と関わらずにいることがしばしばあります。個人主義と行動主義は多くの場合、共同の祈り、共同計画、福音宣教活動の共同の見直し作業を妨げます。

明瞭なフランシスカン精神をもった福音宣教方針 (project) が欠けています。つまり、フランシスカン・カリスマを中心的な価値として持つ生活様式が欠けているのです。たとえば、祈りと献身の精神、兄弟愛と小ささと貧しさと連帯のうちに生きる交わりの生活、正義、平和、被造物の保全への献身、・・・それらが個人としてだけでなく、兄弟共同体としても欠けているのです。

質の高い福音宣教をするにはもっと十分な準備が必要

80. 福音宣教に携わる兄弟の中には、知的にも技術的にも教育を受けて十分な準備のできた兄弟がいることは事実です。しかし、多くの場合、福音宣教活動の質を高める神学的・実践的な準備の欠けた兄弟がいることも事実なのです。

私たち小さき兄弟は何事にも上手で、何でも出来ると思いで、ぶっつけ本番で臨むことが多すぎます。そして、知的養成が「福音宣教の根本的な必須条件」¹²²であることを忘れることが多すぎるのです。適切な知的養成を含めた確かな養成があって初めて、私たちは「現代人の抱える諸問題を理解することができ」¹²³、現代文化との実り多い対話が可能になり、福音を現代文化と現代の歴史の中心に据えることができるということを忘れてはなりません。¹²⁴

良い状態からさらに良い状態に移行する

81. 「創立の恵み」にいつも忠実であるためには、「時のしるし」と「場所のしるし」を読むための絶えざる努力が必要です。それは、聖霊の呼びかけによりよく応えるためです。聖霊は、「歴史の新しい文脈の中で、小さき兄弟としてのアイデンティティーを見直し、絶えず新たにする」ように¹²⁵、そして、福音の証し人となり、イエス・キリストのことを決然たる態度ではっきりと告げ知らせることができるようになりなさいと私たちに呼びかけておられます。

福音宣教という私たちの生活の根本的な側面においても、私たちは良い状態からさらに良い状態へと移行するように招かれています。さらに良い状態に移行するとは、次のようなことを意味します。

守りの姿勢の福音宣教から「新しい福音宣教」へ

82. 「新しい福音宣教」を選ぶ必要について語るとき、私たちは「新しい福音宣教」を「伝統的な福音宣教」に対立するものとして示しているわけではありません。そうではなくて、福音をすべての人にもたらす新しい方法、神の国をすべての人に告げ知らせる新しい方法について語っているのです。

「新しい福音宣教」に命を賭ける必要 - これは教会が絶えず呼びかけていることですが - は、啓示された御言葉と人々の要求と存在意義についての人々の問いかけとによって自分自身を問いただしてみた結果生まれたものです。なぜなら、御言葉と要求と問いかけは、「現代世界の新たな問題に対して新しい答えを出すように求め、・・・今日の状況に合った福音宣教の新しい計画を練

¹²² ヨハネ・パウロ2世「サン・ディエゴでの総集会へのメッセージ」1991年、6。

¹²³ サン・ディエゴでの総集会 2003年総集会総括文書 10、奉獻生活 98 参照。

¹²⁴ ヨハネ・パウロ2世「OFM養成担当者会議(Congress of OFM Rectors)へのメッセージ」2001年、4。

¹²⁵ 小さき兄弟会の生涯養成(1995年)2。

り上げる」¹²⁶ように求めているからです。

典礼や秘跡や信心行を大切にする一方で、信仰の中心的な役割を再発見し、信徒を福音宣教の活性剤にするように努めなければなりません。信徒が神の国の建設に献身していることを心に留める一方で、福音化されていない多くの信徒に、現代の新しい現実、人々の大きな流動性に、そして、移住という特別な現象に目を向けなくてはなりません。「群れの99匹の羊」を心に留める一方で、「迷える一匹の羊」を探しに行かなくてはなりません。なぜなら、迷える羊もまた、神の国を引き継ぐ者だからです。

現在のところ、大切なのは、メッセージの量を増やすことではなくて、メッセージを質の良い、分かりやすい、透明な、伝播性のある効果的なものにすることです。そのためには、新しい熱意、新しい方法、新しい表現が必要です。メッセージの質を高めるためには、福音の告知はまずその中心、すなわち、イエスに顕現された神の愛の永遠の新しさから始まるべきだと私は思います。すべての人の救い主であるイエスが、新しい福音宣教の第一目標となり、本質的内容となるべきです。この意味で、私たちの福音宣教は福音から出発すること、神の御言葉、イエス・キリストという受肉された御言葉、父なる神から人類に与えられた良い知らせを中心として出発することが必要不可欠であるように思います。同時に、多くの国々で世俗主義が私たちを取り巻いている現状では、主の現存を示すことができ、良心を究明することのできる生き方と透明性のあるしるしが絶対に必要です。

メッセージの質を高めようと真剣に努力するに当たって、やはり本質的に大切なことは、「愛の生きた証し人」となることです。なぜなら、福音に忠実に生きることによって示される愛は、神の現存を最も透明な形で示すものであり、良心を究明し、信仰の宝の発見に導いてくれるものだからです。つまり、福音的な生活と愛の証しこそは、私たちが福音宣教によって伝えようとしているメッセージの質を最大限に高めてくれるのです。

「新しいアレオパゴス」(集まりの場)が私たちに投げかける課題と、私たちが愛の証し人となる責任とによって私たちに求められていること、それは、「愛の想像力を働かせること」であり、それは私たちの場合「使徒的創造性」とか「新しい形の福音宣教」と言い換えることができます。

奉獻生活を送る私たちは教会と世界において預言的な存在となるように求められているのですから、教会や世界をあっという間に驚かせるような現代の必要に合わせた新しい形のあり方と福音宣教方法を考え出さなければなりません¹²⁷。福音を証しし、宣べ伝えるために世に遣わされたことを認識すれば、現代の人々の真っ只中に入り込んで行って、神の国の永遠の若さと喜びに満ちた福音を彼らと分かち合う身軽さと勇気が得られるでしょう¹²⁸。

¹²⁶ 奉獻生活 73。

¹²⁷ 2003年総集会総括文書 38 参照。

¹²⁸ 現代のフランススコ会の使命 3 参照。

今こそ、自分よりはるかに偉大な御言葉の奉仕者に過ぎないことを確信して¹²⁹、創造的に、大胆になり、現代の人々のニーズに応える時です。今こそ、辺境地帯に、「見捨てられた、非人間的な修道院に」福音宣教に出かける時です。今こそ、私たちの幕屋に場所を広げ(イザヤ 54:2 参照)「この世の最も貧しく苦しんでいる人々の喜びと悲しみを分かち合う」¹³⁰時なのです。

新しい形の福音宣教を受け入れる用意がありますか？私たちは今何をしているのでしょうか？私たちは福音宣教の組織や活動を定期的に見直していますか？

福音宣教活動プロジェクトからフランシスカンの福音宣教プロジェクトへ

83. 私たちの「本来あるべき福音宣教の形態は兄弟共同体のあかし」¹³¹でありますから、福音宣教を私たちの生活様式の周辺的なものと考えてはなりません。つまり、福音宣教活動を本当に実りあるものにしたいならば、生活の質を福音的なものにするよう努めなければならないということです。

召命とミッションは私たち小さき兄弟たちにとって、二つの別個の現実ではなく、一つの現実です。私たちは誓願によって約束した福音的な生活様式に従って生きつつ、福音を宣べ伝えるのです。そして、福音を宣べ伝える時、私たちは召命に答えているのです。2003年の聖霊降臨の総集会の総括文書は、いみじくも次のように述べています。「私たちの主たる使命は、兄弟共同体と小ささという私たちの生活様式の『まさに核心に書かれて』います」¹³²と。

従って、フランシスカンの派遣されて / 福音宣教する使命は、実生活と述べ伝えていることとの間の絶えざる「対話」を必要とします。私たちの福音宣教が実りをもたらすかどうかは技術や方法によるのではなく(福音宣教は広報活動ではありませんから)「御言葉を知り、人々に説き明かすことだけを望む」(訓戒の言葉 7:3)だけでは満足しないで、御言葉を宣べ伝え、理解し、説き明かす前に、御言葉を実行しようと努め、自分の知っているすべてを、あらゆる善の所有者である至高の主・神に返す(訓戒の言葉 7:4)人々の心の中で燃える「聖霊の火」によるのです。ミッションのない証し(生活)はないし、証し(生活)のないミッションもありません。

従って、フランシスカンの福音宣教は「優先課題」によって照らされ、その「優先課題」の光は「私たちの生活様式を中心となる機軸」¹³³である観想の光の中で、さらに兄弟的な共同生活の光の中で評価されなければなりません。私たちは兄弟共同体の中で、また、そこから生活し、福音を宣べ伝えるのです。「自分の名前で派遣される兄弟はいません」¹³⁴。福音的な生活の質は福音

¹²⁹ 同上 15。

¹³⁰ 2003年総集会総括文書 37。

¹³¹ 全世界をキリストの福音であまねく満たすために 86。

¹³² 2003年総集会総括文書 38。

¹³³ 全世界をキリストの福音であまねく満たすために 60。

¹³⁴ ヨハネ・パウロ 2 世「サン・ディエゴでの総集会へのメッセージ」。

宣教を一貫したものにするための決定的な要素です。¹³⁵

このように考えてくると、人々を福音化するためには、自分自身が福音化される必要があることが分かります。特に、福音化するということは、あかし、つまり、自分の生活で身を以って示すことであって、レッスン（教育）ではありません。「現代人は教育者によりもあかし人の方に喜んで耳を傾ける」のです。¹³⁶ いわゆる「旅立つための心得」（マルコ 6：7 - 13 参照）の中で、イエスが指示しておられるのは、何を言うべきかよりも何をなすべきか、です。「行為」が過大に評価されているようなら、途中で立ち止まって、自分のしていることを「確かめ」、本質的なことに立ち返る勇気を持たなければなりません（使徒言行録 6：3 参照）。

「私は信じた。それで私は語った」（2 コリント 4：13）とあるように、福音宣教する人はこのパウロの体験を実践しなければなりません。福音宣教の任務を果たすだけでは不十分です。「生きた福音」となることが必要です。御言葉を他の人々に説き聞かせるだけで満足してはなりません。それでは、「文字に殺される」ことになってしまいます（訓戒の言葉 7 参照）。大切なのは、御言葉を私たちの中で受肉させ、ヨハネの第一の手紙にあるように、「私たちが聞いたもの、目で見ただもの、よく見て、手で触れたものを証しし、伝える」（1 ヨハネ 1：1 - 3）ことです。

福音宣教の主目的の一つが、信条として受け継がれた信仰を個人の中で開花した信仰（personalised faith）に変えていくことであるならば、福音宣教をする人がまずその体験をしなければなりません。父なる神から人類に与えられたよき知らせ - 福音 - そのものである主に個人的に出会うことなくして、福音宣教者となることはできないのです。福音宣教者はパウロのように福音によって心を動かされ、変えられ、原動力を与えられる人でなくてはなりません。もはや問題は福音を宣べ伝えることだけにとどまりません。福音を告白し、人々を感化することが求められているのです。そして、それは、福音宣教者が主と個人的に出会うことがなければ不可能です。福音宣教の将来は、神のよき知らせ（福音）を人々に証しすることができるかどうかにかかっているのです。

「小さき兄弟は何よりもまず生活を通して福音宣教を行う」とは、どういう意味でしょうか？ 私たちの生活や兄弟共同体の生活にこの原則を適用するならば、どのような結果が生まれるでしょうか？ 私たちは福音宣教活動の計画を立てるに際して、自分の生活の質を福音に基づいたものにしようと心掛けているでしょうか？

「内向きの(ad intra)」宣教(ミッション)だけをする兄弟共同体から、外向きの(ad extra)」宣教(ミッション)もする兄弟共同体へ

¹³⁵ 共同体における兄弟的生活 55 参照。

¹³⁶ 福音宣教 41。

84. さまざまな理由から、たとえば、兄弟の数が減っているとか、地元の教会での強力な司牧責任があるとか、自分の管区の管轄の宣教地が会に委託されて責任がなくなったとか、多様な文化を尊重する必要があるなどの理由で、私たちは会の宣教派遣（ミッション）の範囲を司牧的な福音宣教に狭めがちです。そして、「すべての地域が宣教地だ」とか、「私たちはみなが宣教師なのだ」と言ってそれを正当化し、宣教派遣を平凡な司牧活動にしてしまい、本来の宣教派遣の召命に十分な注意を払わなくなっているのです。

教会の他のメンバーと同様に、私たちも、「内向きの教会」(introverted Church)のために働く危険があります。つまり、「外に向かって」(ad extra) 派遣されて宣教すべき使命に忠実であるならば、ほんとうは宣教する教会のために働くべきであり、福音を聞いたことのないすべての人々に福音を告げ知らせようとするべきなのに、教会を訪れる信者の司牧的世話に追われているのが現状です。

自分の殻に閉じこもり、自分の管区の差し迫った必要に応えるのが精一杯のような自己中心的な傾向、そして、「諸国民」への宣教派遣に携わる会の必要に応えようとする人々の身軽さと柔軟性を麻痺させる傾向を乗り越えるために、真剣に努力しなければなりません。

さまざまな管区を訪問してみて、多くの兄弟が「宣教に出かけたい」という願いを持っていること、そしてその願いがしばしば日常の司牧活動によって「抑えられている」現実に気づきました。フランススコ会は、教会と同様に、福音がまだもたらされていないところで福音をはっきりと宣べ伝える責任を放棄してはならないのです。それこそは、「古くからある管区」と「新しくできた管区」から派遣された宣教師に求められていること、特に「新しい管区」から派遣された宣教師に求められていることです。新しい管区では主はしばしば豊かな召命をもたらしてくださるのです。そうした宣教師たちは、「受動的な宣教派遣の主体」から「積極的な宣教派遣の主体」へと考え方を変えていかねばなりません。今は、「若い教会」の時代、「若い管区」の時代なのです。

このように考えてくると、「創立の恵み」を受け入れるということは、「出かけて行く」そして「会いに行く」という挑戦に応えることであることがわかります。宣教派遣の呼びかけは常にあります。この呼びかけに耳をふさいではなりません。それに、宣教派遣は自分の自由意志で選択するものではありません。宣教に派遣される人はだれでもみな、「神の示しを受けて」そうするのです。この「神の示し」に出会い、その祝福を受けた兄弟は、それに惜しみなく応えなければなりません。そして、管区長または分管区長は、その兄弟が派遣されるにふさわしいと認めるならば、許可を与え、反対してはなりません。このことやその他のことで無分別な処置を取れば、主に報告しなければならないからです（非裁可会則 16：4 参照）。

会の宣教派遣プロジェクト（missionary projects）をどのような形で支援していますか？派遣される人々の召命をどのように識別していますか？「宣教のために出かけたい」と願い出る兄弟に許可を与えない場合、その理由は何ですか？宣教者精神を持つように若い兄弟たちを励ますには、

また、彼らにフランシスカンの宣教師としての身軽さを身につけさせるにはどうすればよいでしょうか？

V 養成と学問

兄弟共同体は、神の靈感によって始まり、
毎日、回心と新しい生活へ呼ばれる。

「派遣されて宣教する兄弟共同体 (Fraternity-in-mission)」として成長するために。

85. 奉献生活が根本的に刷新されるかどうかは、養成にかかっています。¹³⁷ 実際、会の本当の「再建」は、養成の質にかかっているのです。養成とは回心の過程であり、忠実さを必要としますから、私たちは奉献した人として、また小さき兄弟として、養成において自分のあり方と行動のすべてを賭けるのです。

聖書の言葉の中で「こころ」という言葉の持つ最も深い意味において、こころの養成だけが、私たちに召命の偉大さとすばらしさを徐々に発見させてくれ、イエス・キリストの現存（生きた顔）に魅せられる体験をさせてくれるのです。堅固で総合的な養成だけが、私たち兄弟に現代社会や人類から発せられる呼びかけに応えさせてくれるのです。養成によってフランシスカン生活の意義は高められ、「すべての人の目から見て」永遠に新しい預言的なしるしとなるのです。ただしそれには条件があります。つまり、養成が総合的なものであり、多様な社会文化的な状況と調和したものであること、三位一体の交わりの神秘に根ざしていること、イエス・キリストと福音への忠実さ、教会とその使命への忠実さ、修道生活と私たちのカリスマへの忠実さ、人類と時のしるしへの忠実さという四つの忠実さを兼ね備えていること、そして、生活に応用できるモデルを基礎として計画されることです。

養成と学問の分野において私たちはどのように進歩しているのでしょうか？

活力のしるし

86. 養成と学問の分野においては、たくさんの活力のしるしが見られます。それらのすべてを詳細に説明することはできませんが、非常に重要と思われることを次に述べたいと思います。

養成と学問に関する深い考察

87. 養成と学問は最近最も力を入れている優先課題の一つです。さまざまな文書が第二バチカン

¹³⁷ PI 1 参照。

公会議以降に出版されましたが、そのことは本会が養成と学問を如何に重視しているかを示すものです。たとえば、「主の霊とその聖なる働きを持つことを憧れ望まなければならない」(1987年会憲第6章)、「小さき兄弟会における養成」(1971年)、「養成に関する文書」(1981年)、「フランシスカン養成綱領」(1991年初版、2003年改訂版)、「小さき兄弟会における生涯養成」(1995年)、「フランシスカン勉学綱領」(2001年)、「召命の司牧的配慮のためのオリエンテーション」(2002年) その他、養成に関するさまざまな国際会議の文書など。¹³⁸

養成としての生活

88. 奉獻生活を送る他の修道会と共にこのように考えてくると、小さき兄弟たちの生活はそれ自体が養成の一つの過程であり、それは生涯続くもので、「決して終わりが無い」¹³⁹ことが分かります。ですから、フランシスカンの召命への忠実さについて語るとき、決して終わりのない養成の一つの過程として語るべきです。養成を荘厳誓願の準備教育に過ぎないかのようにみなし、兄弟的生活の初期の期間、つまり初期養成のためと捉えてはなりません。

生涯養成の大切さ

89. 養成を、生涯続く回心のプロセスと捉えるこの新しい考え方によって、生涯養成をすべての兄弟の生活の中で、また人生のあらゆる段階で最優先すべきだとの認識が芽生えました。特に荘厳誓願宣立直後の数年間に兄弟に同伴すること、使徒職や叙階のためにふさわしい準備を整えること、そして、その他の専門的な使徒職に向けて教育することに注意を払うことは大切です。

養成の基本原則

90. このように考察を重ねてきた結果、私たちはまた養成に関する基本原則を発見することができました。つまり、たとえば、養成は総合的で、一人一人の個性に合ったもの、生涯的なもので、経験に根ざしたもので、徐々に進歩して行くものでなければならないということです。¹⁴⁰ それと同時に、フランシスカン的な養成の方法について一定の合意に達しつつあります。それを私たちは「誘発して理解に導く」(provocative-interpretative)方法と呼んでおり、それには個人的およびグループでの同伴が含まれ、各人に足りないものを補うように作られています¹⁴¹。

フランシスカン独特の養成と共通の養成

91. フランシスカンの源泉資料に対する理解が深まったことにより、私たちはフランシスカンの

¹³⁸ 修練長会議(1988年)、有期誓願者の養成担当者会議(1990年)、生涯養成担当者会議(1994年)、OFM研究センター代表者会議(1994年)、志願者の養成担当者会議(1995年)、召命の司牧的配慮のアニメーター会議(2000年)、OFM学問研究センター長会議(2002年)、第二回修練長会議(2005年)。

¹³⁹ 奉獻生活 65。

¹⁴⁰ 養成綱領 40 - 54 参照。

¹⁴¹ 養成綱領 55 - 61 参照。

な養成の必要性和緊急性を認識するようになりました。つまり、創立時の精神の養成にとどまらず、フランシスカンとしてのカリスマ的、靈的、哲学的、神学的伝統についての知識を深めるような養成の必要です。それは、「人類のドラマチックな疑問に対するふさわしい答えを引き出す」ためであり、「福音を文化と現代の歴史の中心に置く」ためです。¹⁴² フランシスカンイヤー（Franciscan year）を導入した管区の数が増えつづけています。この期間には実践的な養成（価値を体現する養成）と知的養成（伝統についての知識を深める養成）の双方に力点が置かれています。

フランシスカン養成に関連して、ブラザーの兄弟にも司祭である兄弟にも、それぞれの志願者の状況や使徒職の多様性を考慮に入れて、共通の養成を施す必要があります。特に大切なのは、兄弟共同体を構成するメンバーであるすべての兄弟に「真の平等」を保証する養成です。

養成の方法

92. 最近の経験から、養成にはいくつかの基本的な方法があることが分かりました。たとえば、養成担当者の適切な養成。養成担当者が自分に委ねられたデリケートな職務（奉仕）のために十分な備えができるように計らい、その場しのぎの任命をできるかぎり避ける、とか、養成担当者が一人で責任を負うのではなく、共同体全体で養成に関わるような兄弟共同体を作る、とか、養成と勉学のコーディネーターとして、また、会全体、管区・分管区の中で、それについて考えさせる推進者としての「養成学問担当主任（養成事務局長）」を配置するとか、生涯養成担当者を配置するなど。

経験と考察を重ねた結果、また、他の修道会とも話し合った結果、養成の各段階の具体像をよりよく把握できるようになりました。たとえば、「召命の司牧的配慮」は動機を識別する最初の段階。「志願期」は特に人間性の成熟に重点を置く段階。「修練期」は神の体験と兄弟共同体の生活を優先する段階。そして、有期誓願期は召命の識別過程における決定的な時期、というふうに。

最後に、兄弟たちがカリスマ的、靈的、哲学的、神学的な伝統についての知識を深め、しっかりした知的養成を受ける必要¹⁴³に気づき始めているということをつけ加えておかねばなりません。

回心への招き

93. 第二バチカン公会議以降、養成と学問に関して、特に奉獻生活についてこれまで全教会と共に歩んできた道のりは長いとしても、目標はまだまだ遠いのです。多くの側面が「活力のしるし」を示していますが、それはすでに始めたことと同じ方向で進もうという呼びかけでもあります。

生涯養成

¹⁴² ヨハネ・パウロ2世「OFM大学および研究センター国際会議へのメッセージ」2001年9月19日。

¹⁴³ FW参照。

94 .それぞれの兄弟共同体の中で、管区の中で、また全兄弟会の中で生涯養成を優先することは、養成と勉学の分野においてまず必要なことであると思います。私たちの「生活様式」(forma vitae)が活力を保ち、他者に影響を与えることができるかどうかは、この分野において私たちが何をするかにかかっています。

生涯養成は初期養成の腐植土でありますから¹⁴⁴、初期養成は、生涯養成なくしては本来の目的を適切に達成することができません。どんなに努力を重ねても、成果をあげても、初期養成と生涯養成の間には深い隔たりがあります。つまり、初期養成の時期に教えられることと、若い兄弟たちがそれぞれの管区の日常的な兄弟共同体の生活の中で体験することとの間には、ギャップがあるのです。私は会の各管区を視察してみて、この状態の深刻さに気づきました。初期養成と兄弟共同体の生活(生涯養成の最初にして基本となる形態)との間にズレがあることが、荘厳誓願宣立後間もなくしてフランシスコ会を去る理由となることがしばしばあります。初期養成と生涯養成との間のズレが引き起こすダメージは、特に若い兄弟にとって深刻な問題です。

養成は荘厳誓願または叙階の時に終わるものと考えている兄弟が多すぎます。そのような考え方は私たちの生活、あかし、ミッション(宣教派遣)にとって有害です。会の「再建」を心から望むなら、生涯養成の質を大幅に上げねばなりません。目標と手段が明確に設定された「生涯養成プロジェクト」とそれにふさわしい担当者が絶対に必要です。

実践的な養成

95 .教会と会の公文書の指針に沿った養成というものを考えて行く必要があると思います。私たちの養成はあまりに観念的で実用性に欠けています。私たちの養成は知的レベルでは良く出来ていますが、心や感情の面が不足しており、日常性に欠けています。地に足が着いていないと感じることがよくあります。それは、養成を受ける人の現実に即していないか、あるいは、彼らの最も深い現実を変えてしまっているからです。

養成が「御父に向かうキリストの心にしだいに形づくられていく道である」¹⁴⁵とするならば、初期養成および生涯養成はいずれも、生活に影響を与え、生活を変えるものであるはずで、さもなければ、それは養成とは言えません。

養成が生活に影響を与えるようになるためには、十分に準備され、同伴されて、吟味された強力で長期間にわたる経験を必要とします。それがあってこそ、具体的な日常生活の中で、私たちの生活様式の本質的な価値を生き抜くことが可能となるのです。いわゆる「フランシスカンイヤー」(Franciscan year)は初期養成期間および有期誓願期のふさわしい手段となり得ます。初期養成が完成したら、いわゆるサバティカルイヤー、またはモラトリウム期間を設けるのもいい方

¹⁴⁴ 養成綱領 108。

¹⁴⁵ 奉獻生活 65。

法でしょう。これらの方法は、兄弟たちの生活を照らし、同伴し、変えていくのに役立つはずで
す。

召命の司牧的配慮

96. 召命の司牧的配慮については、修道生活の志望者の数が少ないために、あまり積極的に取り
組んでいないように思います。多くの管区で経験していることですが、人数が減り、仕事の量が増
えていることは私たちにとって脅威です。そこで最も顕著に見られる誘惑は、現代のフランシ
スカン生活に求められている識別を怠る誘惑です。私たちは「人数や効率だけにとらわれず、召
命の真正さと動機の純粹さを、信仰の光に照らし、否定の可能性も含めて確認するために、平和
な心で識別しなければならない」¹⁴⁶とする教会の呼びかけに真剣に答えなくてはなりません。

このように考えてくると、志願期の段階を真剣に考えることが急務となります。最近の総集
会では志願期を12ヶ月とし¹⁴⁷、志願者の人間的な成熟と、キリスト者としての養成と、召命の動
機の深い分析に焦点が当てられるべきことが定められました¹⁴⁸。

養成担当者の育成と養成担当者になろうとする兄弟の識別

97. 養成と勉学の分野で明らかに欠けており、その結果、私たちの良心に呼びかける差し迫った
問題がもう一つあります。それは、養成という奉仕職に招かれている兄弟の育成の問題です。養
成担当者を育成する必要は痛感されていながら、これまでこの必要に適切に応えることができ
ていません。この問題は優先課題です。

「養成学問担当総事務局」がこれまで何年か養成担当者のためのコースを企画してきたことは
確かです。それは重要なことですが、それだけでは不十分です。なぜなら、2003年の聖霊降臨
の総集会は「これらのコースは継続されるべきであり、会のその他の役務や使徒職に携わる人々
に対しても生涯養成のコースが提供されるべきである。これらのコースは養成学問総事務局が準
備し、管区長協議会が必要な補足を行って完成するものとする」と提案しているからです¹⁴⁹。教皇
庁立聖アントニオ神学大学が、この分野でフランシスカン家族の要望と2003年の総集会の要
請に応じて、養成担当者のための修士プログラムを準備したのも確かです¹⁵⁰。しかし、参加希望
者は果たしているのでしょうか？

各管区が優先してやらねばならぬことは次のようなことです。現代にふさわしいフランシスカ
ンの養成者プロフィール(人物像)を描くこと、養成担当の候補者の素質を綿密に識別すること、
拙速を避け、特別な養成を施すこと(古い基準では不十分です)そして、養成担当者になる者が、

¹⁴⁶ キリストからの再出発 18。

¹⁴⁷ 総則 86:3。

¹⁴⁸ 会憲 150 参照。

¹⁴⁹ 総集会で承認された提案 28。

¹⁵⁰ 総集会で承認された提案 24 参照。

自分に委ねられた兄弟たちの同伴（個人として、また共同体として）のふさわしい「道具」となることができるように導くことです。

養成担当の候補者を識別する基本的な基準の中でも特に大切な点は、養成を受ける者に「主に従うことのすばらしさ」を示すことができるということです。そのために養成担当者は、「神を探求する道を熟知する人でなければなりません。それは、他の人々が神を探求する道に同伴することができるためです」¹⁵¹。また、養成担当者は、自分の召命による選択を固く確信していること、そして、本会への強い帰属意識を持っていることが絶対に必要です。

知的養成

98. もう一つの「回心」への招きは、兄弟たちの知的養成に関連しています。これは現代社会が要求していることではないかもしれませんが。私たちは、若い兄弟たちが自分の信仰や希望の正しさを認め、自分の召命による選択の正しさを認め、自分の存在を賭けた誓約の正しさを認め、この世界における自分のあり方の正しさを認めることができるよう、彼らに十分な養成を施していないように思います。また、修道生活をやめていく多くの理由の根底には、こうした知的養成の欠如があると思えてなりません。兄弟たちの適切な知的養成なくしては、会の「再建」もないのだということを私は痛感しております。

知的養成にもっと力を注ぐべきです。それは、この問題に関する会の基準に従って¹⁵²、兄弟たちが自己実現した上で、現代文化と実り多き対話をするチャンスが与えられるため、そして、自分に委ねられた、あるいは今後委ねられる使徒職を完全にかつ現代の要求にふさわしい方法で成し遂げるチャンスが与えられるためです。また、会には十分な養成を受けた兄弟たちが必ずいるようにしなくてはなりません。それは、彼らが特に私たちの運営する学問研究センターで、より高度な教育を受けることができるため、研究活動ができるためです。兄弟の人数が少ないからとか、司牧活動が忙しいからといって、管区が兄弟たちの知的養成を使徒職の訓練に必要なコースに制限することは許されません。すべてに配慮することができないのなら、堅固な知的養成を諦めるよりも、使徒職をどれか諦めるほうがましです。知的養成を諦めることは、新しい福音化の扉を閉ざすことになるからです。

これまで述べてきた問題に関連して、私たちの霊的・知的伝統に関する深い知識を兄弟たちに与えることが絶対に必要だと思います。そうすることによって、会への帰属意識を強めることができますし、私たちの福音宣教活動を促進することができます。兄弟たちが私たちの霊性とあまり関係のない霊性の泉に水を飲みに行くのはなぜだろうと考えたことがありますか？この問いに対する適切な答えを見いだすように、すべての管区、特に学問センターや大学は求められています。

¹⁵¹ 奉獻生活 66。
¹⁵² RSとFW参照。

ブラザー（修道士）を志す兄弟と司祭を志す兄弟のための共通の養成

99. 兄弟一人一人の状況や性格、知的能力、資質、傾向などを考慮に入れて、司祭を志す兄弟とブラザー（修道士）を志す兄弟に共通の基本的養成を施す必要があることをここで再確認することはとても大切です。

1970年の会憲以来呼びかけてきた諸原則から、私たち全員が受けている小さき兄弟となるようにとの招き、すなわち、誓願によって私たちはみな「完全に平等である」¹⁵³という現実に移行すべき時がやってきました。共通の養成の必要性はこの招きに基づくものです。私たちの召命と規則に従えば、平行した別々の養成の道を認めることはできません。私たちはみな平等であり、その意識があるからこそ、兄弟共同体を構成することができるのです。しかし同時に、兄弟たちが招かれている使徒職の多様性を忘れてはなりません。別々の養成があってはなりません。それは、兄弟間に「階級」を生み出してはならないからです。また、たった一つの養成に絞ることも避けねばなりません。なぜなら、すでに一部の管区で見られる現象ですが、ブラザー（修道士）を志す兄弟を司祭のように育ててしまう危険があるからです。

良い状態からさらに良い状態に移行するプロセスの中で

100. 兄弟たちの活動分野は多岐にわたっていますが、それぞれの活動に取り組む動機もまた多様です。養成はその性質上、未来を志向しています。だからこそ、養成は複雑で厳しいプロセスを抱えた問題や困難を表すばかりでなく、活力、創造性、新しさ、人生の約束、未来の保証をも表すものなのです。

立ち止まってはいけません。探求を続けなくてはなりません。本会の内外で最近数十年にわたって蓄積された体験から始めなければならないのは確かですが、召命への新たな忠実さへと私たちを導き、教会と社会における本会の重要な存在意義に気づかせてくれる新しい養成の旅路を絶えず探し求める強い意思を持ちつづけなければならないのも確かです。私たちが置かれている今という時は、すべての人にとって、養成のプロセスを考え直し、活性化して、神の霊が私たちに求めておられることに応える恵みの時であり、絶好のチャンスなのです。新しい形の奉獻生活、新しい形のフランシスカン生活には新しい養成が必要であることは疑う余地のないことです。

そのためには、次のことを考える必要があると思います。

守りの養成から忠実さの養成へと移行すること

101. 守ることを忠実さと相対するものと考えることが間違いであるとするならば、それらをきちんと区別しないのも間違いでしょう。忠実さには守ることが含まれますが、忠実さと守ることは

¹⁵³ 会憲 3 : 3。

同じではありません。忠実さは守ることをはるかに越えるものです。つまり、守ることは忠実さのほんの一部にすぎないということです。守るけれども忠実ではないということもあり得るのです。忠実さは信仰のように個人に関連することですが、守ることは規則や成就に関連しています。

私たちの生活の究極の目標は、「イエス・キリストにより忠実に付き従う」¹⁵⁴ことです。ですから、養成の中でまず必要なことは、イエスというお方に忠実であるように育成することです。私たちはイデオロギーに従うのではなく、人物に、イエスというお方に従いたいと願っているのです。それゆえに、イエスは全養成過程のまさに中心に置かれなければなりません。ですから、養成が兄弟たちに与えることのできる第一の基本的な勤めとは、イエスというお方を発見し、イエスを友人として愛することができるように助けることです。

兄弟たちの生活の中で、イエス・キリストとのこうした個人的な出会いを決して当たり前のことと考えるではありません。イエスというお方に会おうことなしに、荘厳誓願を立てることだってできるのです。その場合、イデオロギーがイエスに取って代わり、イデオロギーがもたらすものは、原理主義、生活と「教義」との分離、そして、フラストレーションです。また、イエスというお方を発見するだけでは不十分です。イエスを友人と覚えることも必要です。このこともまた当たり前のことと考えるではありません。「世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛しぬかれ」(ヨハネ 13:1)、私たちの救いのために御自身を渡された友としてのイエスではなく、イエスを要求するお方としてしか見ないで養成をすることはできません。なぜなら、私たちは多分にそのように養成されてきたからです。

イエスを人間として、友として見ることのできる人だけが、すべてをイエスのために捨てることのできるのです。このようにしてこそ、イエスの弟子であることの厳しさが喜びの源となり得るのです。兄弟たちの目には、イエスは自己実現の妨げとしてではなく、御自分もすべてを投げ出されたがゆえにすべてを求める友として映るはずなのです。このようにして初めて、トマスのように「わたしの主、わたしの神よ」(ヨハネ 20:28)とすることができ、フランシスコのように「Deus meus et omnia」、「わが神よ、あなたは善、全き善、最高の善」(PrG3 参照)とすることができ、キリストに出会い、主の美しさに心を奪われ、主の友情を味わった人だけが、すべてを売り払い、死ぬまで(ルカ 18:28 参照)主に付き従うことのできるのです。

イエスというお方との真の深い出会いのために養成していますか？そのために、どのような方法や手段を用いていますか？全養成過程で、イエスというお方はどのような位置を占めておられますか？私たちはキリストとの出会いから生まれた力の上に生きていますか？それとも、単に宗教的なイデオロギーの上に生きているのでしょうか？

自分に与えられた賜物を大切にす養成

¹⁵⁴ 会憲 1:1。

102. これまで述べてきた忠実さには、賜物を大切にするという意味もあります。「永遠に」という言葉は、完全であろうとする賜物の本質的な側面です。つまり、少なくともその意図において完全で、永遠で、決定的であることです。キリストの自己譲渡との類似によって、奉献生活における信仰者の自己譲渡は、フランシスカン生活においてもまた、パウロ6世の言葉によれば、「完全で撤回できない」¹⁵⁵賜物なのです。

これによって小さからぬ問題が生じます。人間が一時的(時間的)な存在として条件付けられ、評価されるならば、現代の若者がそのように見えるのはなおさらでしょう。「決定的」という言葉は、彼らの選択の質を説明する上で忘れられた言葉のように思われます。「パートタイム」の選択とか、一時的な約束とか、次から次へといろいろなことをやってみるもののほうが好まれていて、むしろ、そのほうが合理的と考えられているふしがあります。

そこで疑問が出てきます。現代社会から私たちのもとにやってくる若者たちに決定的な言葉を期待するのは無理からぬことでしょうか？もしそうならば、教会がこれまでも述べてきたように、私たちはどのような力に頼ることができるでしょうか？若者たちが自分の約束した言葉を決定的なものとして守るためには、彼らをどのように養成したらよいでしょうか？

私には、奉献生活を神の視点から見ることに、つまり、イエスに「より忠実に」従うようにとの神の召し出しと考える以外に道はないような気がします。しかし、神においては招くことは与えることであり、召命が賜物であるとするならば、「神の賜物と招きとは取り消されないものである」(ローマ 11:29)ことは明白です。召命の賜物をくださる神は、それに永遠に応える能力(on-going capacity)をも与えてくださいます。なぜなら「神は真実な方である」(1 コリント 1:9)からです。従って、私たちの忠実さは「戦車や馬」に頼っているわけでも、自分の「知恵」や力に頼っているわけでもありません。神は強い者を混乱させるのに弱い者をお選びになりました。それは、だれ一人、神の前で誇ることがないようにするためです(1 コリント 1:29)。パウロが「わたしを強めてくださる方のお陰で、わたしにはすべてが可能です」(フィリピ 4:13)と述べているように、自分の生涯を捧げ続けることができるのは、私たちの力によるのではなく、神の忠実さによるのです。

このように考えてくると、初期養成と生涯養成にいくつかの課題が残ります。そのうちの主なものを挙げてみましょう。

第一に、召命の司牧的配慮のごく初期から、つまり、召命を感じた時から、私たちの召命とミッション(宣教・使命・派遣)のすばらしさを伝えると同時に、その徹底振りと、要求についても伝えなければなりません。私たちは自分に対しても、他者に対しても正直でなければなりません。そして、召命の提示(vocational proposal)と識別において一貫性を持たなくてはなりません。召命を堅持するように養成することの中には、絶えず神を探し求めるという本質的な養成、

¹⁵⁵ ET 7。

意思決定や積極的な責任負担、リスク負担、兄弟性と交わり、貞潔を選択した者としての苦行と孤独などについての養成も含まれます。

このような要求に直面して、次のように問うてみることは道理にかなっています。何者になるように養成するのか。私たちの「生活様式 (forma vitae)」が必要とすることを志望者にどのように伝えるのか？

責任と自由についての養成

103. 責任と自由とは互いに関連しています。自由は責任を伴いますし、責任は自由から生まれません。養成計画はこのことを心に留めなければなりません。兄弟たちが、召命の選択を真剣に責任を持って行い、その結果、自らを完全に捧げて¹⁵⁶、「自由に引き受けた務めを一貫してあますところなく生きる」¹⁵⁷ことができるように、自由において成長するのを助けることが大切です。

養成は責任を与えると同時に要求するものです。その意味で、養成は硬直してはならないが、要求の厳しいものであることを理解する必要があります。大切なことは、「徹底した福音的生活と個人の自由と独創性に対する配慮」¹⁵⁸を統合することです。責任をもたらし、真の自由に導いてくれるのは、放任主義でもなければ凡庸さでもありません。厳しく要求されるということは、人間の成長に欠かせないものです。人は成熟するために、刺激され、活力を与えられ、その人の持っている可能性に応じて最善を尽くすことを求められるのです。しかも、厳しく要求されることと徹底した福音的生活は、福音とフランシスカンの生き方が提案しているように、イエスに従うためには不可欠のものです。

責任を持つように養成するに際して、私たちの召命が必然的に共同体的、兄弟的側面を持つということを忘れてはなりません。それらの側面によって、私たちは兄弟共同体の中で相互性をもって、互いに相手に心に向けて生きることができるのです。従って、フランシスカン養成は連帯責任に向けて、他者の「召命を刺激する」(vocational animation)方向に向けて行われなければなりません。

兄弟がまず認識しなければならないこと、それは、兄弟共同体の中で生きるように招かれたということです。つまり、各人が自分の受けた賜物に対してだけでなく、同じ生活様式で共に生きるように主が与えてくださった兄弟の召命に対しても責任があるということです。ですから、兄弟に誤りを認めたら、兄弟愛をもってそれを指摘し、指摘された兄弟もそれを謙遜な心で受け入れるように導くことが必要です。私たちは「過ちを犯した」兄弟を愛をもって正す勇気を持たなければなりません。

¹⁵⁶ 奉獻生活 103。

¹⁵⁷ 奉獻生活 16 参照。

¹⁵⁸ 養成綱領 55。

私たちは徹底した福音的生活に向けて養成しているのでしょうか、それとも、私たちの養成は「カフェインの抜き」の「軽い」ものになってしまっているのでしょうか？私たちは妥協のない厳しさを保っているのでしょうか？

キリストへの情熱と人類への情熱を持って生きるように養成すること

104. 奉献されたフランシスカン生活は、キリストと人類に対する激しい情熱に動かされて初めてほんとうの意味を持ちます。奉献されたフランシスカン生活は、キリストと人類に対する激しい情熱と、すべての人々を、御子通して現された人類に対する神の無限の愛に導きたいとの強い願いとによって突き動かされた時に初めて、現代の人々にとって分かりやすいしるしとなるのです。

キリストへの情熱と人類への情熱を生活の中で表していくのに、現在の環境が絶好とは思われません。むしろ、メディア文化に支えられた新自由主義 (neo-liberal ideology) が特に若者たちを信仰という「ハード」から宗教的混合主義 (syncretism) と主観主義 (subjectivism) という「ソフト」に移行するように背中を押しているのです。これらの混合主義や主観主義は、イエスによって示された神との個人的な出会いを遠ざけ、秘伝神秘主義、神聖全体論 (holism)、深層生態学 (deep ecology) に、そしてやがては神の死に至らしめるのです。しかも、「わたし (I)」を強調し、快楽や主観的で感情的な自己実現を推し進めるポストモダニティーは、人類への情熱を育むどころか、他人を利用して自己実現を図ったり、自分の必要を満たそうとしたりするのです。

従って、自分の中に、また他者の中にキリストと人類への情熱を目覚めさせるためには、養成が必要です。そのためには、主が「善、全き善、最高の善、・・・美、喜び、希望と楽しみ、十全の富」(PrG 1以降参照) にましますことを発見すること、そして、若い人たちが発見できるように助けることが必要です。心を捉えるこのことを発見せずして恋に落ちることはあり得ないし、恋に落ちることなくして情熱はあり得ないのです。また、人類への情熱なくしてキリストへの情熱がないならば、フランシスカンの養成は、人類への情熱、特に「十字架に付けられた人々」、最も小さく、貧しい人々、苦しみ、排斥され、困窮している人々への情熱を育むことから始めなくてはなりません。彼らこそは、キリストのみ顔を観想できる¹⁵⁹場だからです。

キリストへの情熱を呼び覚まし、強めるためには、信仰体験を生活とミッション (宣教・派遣・使命) の根幹とし、中心とし、土台として養成することが必要であると思います。大切なのは外面ではなく内面の養成です。内なる自分に出会うことは、主と他者に出会うための必須条件であり、賜物ですが、そのためには孤独と観想の時間が必要です。聖書に親しむことによって、自分の召命とミッションを深めるならば、私たちは個人的・兄弟共同体的識別の基盤を神の御言葉に置くことができるでしょう。秘跡を中心とした生活 - 特にゆるしの秘跡と聖体の秘跡 - は、主に出会い、また自分自身や他者とも出会うための大切な時間です。

¹⁵⁹ キリストからの再出発 23 参照。

人類への情熱を呼び覚まし、強めるためには次のような面での養成に力をいれることが肝要であると思います。つまり、本質的(優先課題)なこと、苦行と小ささ、対話の文化と人を歓迎し、心からもてなす気持ち、実生活に結びついた霊性(incarnated spirituality)、人々、特に最も貧しい人々と生活を共にするような体験を選択すること(短期的、長期的に)、そうすれば、現代の「ハンセン病患者」を慈愛の心で抱きしめることができるようになるでしょう。

私たちの兄弟共同体における生活様式は、神と人類への情熱を呼び覚まし、育むのに役立っていますか？養成修道院でフランシスカンのカリスマと生き方を示すことは、そうした情熱を呼び覚ますのに役立っているのでしょうか、それとも、逆に麻痺させているのでしょうか？この意味で、どのような点を改善しなければならないのでしょうか？

VI 人数の減少と召命の脆弱さ

105. この章を書き始めるに当たって、申し上げておきたいことがあります。それは、私は統計というものをあまり信じていないということです。その根拠は、聖書の言葉と最近数年間の自らの体験に基づいています。

聖書は、私たちもよく知っているように、統計に批判的です。でも、統計そのものに対してではなく、統計の意味するものに対してです。私たちは「主はわたしの力、わたしの歌」(出エジプト記 15:2)と言わないで、「馬や戦車を持っている」と考えがちです。詩篇の作者も言うように、力を与えてくれるのは馬でも戦車でもなくて(詩篇 32:16-17 参照) 主の「伸ばした腕」(列王記下 17:36)なのです。勝利をもたらしてくれるのは兵力への信頼ではなく、主への信頼なのです(詩篇 19:8-9 参照)。

また、統計は二つの危険性をはらんでいます。統計上の数字が良くて、増加傾向か現状維持かということの問題にしている場合はたいてい、私たちは管区内の生活の質について考える努力を怠りがちになります。そして、意識的にか無意識的にかは分かりませんが、数値的に良い結果が出ると、私たちのやり方が良かったからだと考え、それまでのやり方を継続すれば充分だと考えてしまいます。このような考え方は、決してフランシスカン的ではなく、他の管区が困っていても協力しなかったり、会の定める道と平行した道を歩むことを正当化したりするような自給自足の態度や行動につながります。これに対し、入会希望者の不足は、入会希望者のいない管区の人々の心に罪悪感を植え付けます。召命がないのは、約束したとおりに生活していないからだと考えってしまうのです。入会希望者の不足はまた、フラストレーションや諦めの気持ちを生み出します。そして、私たちは自分にできることは何もない、働き続けることに何の意味があるのか、人数の減少は絶対的で、誰にもそれを止めることはできないと考えてしまうのです。

これらの誘惑に負けないように用心しなくてはなりません。そして、数は質を保証するものではないことを強調したいと思います。ここで、事実を考察するための参考として、過去 31 年間の統計結果をご紹介します。

人数

106. 1973年には、22,888人の兄弟がいました。2004年の終わりには、16,493人になっています。31年間で6,395人も減ったわけで、パーセンテージで言うと27.94%の減少です。つまり、一年に平均して209.29人減少している計算になります。¹⁶⁰この減少は特に、修道士を志す兄弟に顕著です。1973年には3,985人だったのが、2004年には2,283人に減っています。従って、修道士の兄弟の人数の減少率は42.74パーセントということになります。同時期の司祭を志す兄弟の数は、32.34パーセント減って、15,605人から10,559人になっています。

しかも、この減少は、兄弟の平均年齢の高齢化を考えると、今後も続くと容易に予想されます。1973年のデータはありませんが、2004年の終わりの平均年齢は56.52才です。18才から55才までの兄弟の数は全体の48.06パーセントを占めており、56才以上の兄弟の数は7,961人で、全体の51.9パーセントに当たります。現在のところ、22の管区で、平均年齢が65才を越えており、そのうち8つの管区では、平均年齢が70才を越えています。これによって、「兄弟なる肉体の死」は今後かなりの割合で増えると予想されます。

減少の理由（原因）

107. 平均年齢の高齢化とそれに伴う死者数の増加は、重要な事実であり、いくつかの地域での人数の減少を裏付けるものですが、全体の人数を考える時、減少現象の説明にはならないのです。なぜなら、最近数年間を考えると、志願者と修練者の数はわずかに増えているからです。実際、1973年には613名の志願者と459名の修練者がいましたが、2004年には志願者の数は652名に、そして修練者の数は462名に増えているのです。このような数字を見せ付けられると、疑問が湧いてきます。志願者と修練者が増えているのに、会の兄弟の人数がこれほど減っている理由はなんなのでしょうか？

私の考えでは、兄弟の数の減少に影響を与える因子は二つあります。第一の因子は私たちが最も多く活動している拠点の地理的要因であり、第二の因子は退会者の増加によるものです。

今日奉獻生活への召命が最も多い大陸はアジアとアフリカです。小さき兄弟たちはどちらの大陸にもいますが、たいていの場合、兄弟たちは他のフランスカン家族の会員と比べると若く、

¹⁶⁰ より正確に言えば、1973年の統計には志願者と志望者（aspirants）が含まれていたが、現在は含まれていない。

弱く、人数も少ないのが実情です。これに対し北米やヨーロッパ大陸では、拠点はしっかりしているのに、スラブ諸国を除いて、召命があまりなく、平均年齢の高齢化が進み、会員数の減少に拍車をかけているのです。

このような客観的事実を踏まえて、一つ重要なことを指摘しておかねばなりません。それは、召命の脆弱さの問題です。召命が脆弱であるために、特に若い兄弟たちの間に退会者がしばしば出ているのです。このような現象は奉献生活全般について言えることですが、私たちの場合は、退会者の続出は会にとって深刻な「大量出血」であると言わねばなりません。なぜなら、兄弟の数が全体的に減るだけでなく、若い兄弟が減っているからです。

退会は初期養成の時期によく見られます。1994年から2004年の間に1,226名の志願者と2,170名の有期誓願者が退会しています。荘厳誓願直後に起こった退会はさらに悲しく、心配のもととなります。この10年間に、982名の荘厳誓願を立てた兄弟と581名の司祭、合計1,563名の兄弟が退会しているのです。

召命が脆弱な理由

108. 退会が深刻な問題であることを考えれば、特に荘厳誓願宣立後に退会する兄弟が多い理由は何だろうかと疑問に思うのは当然です。この疑問に対して満足の行く回答を与えるのは困難です。ましてや多くの兄弟を退会に導く理由を正確に描くことはなおいっそう困難です。退会する人それぞれに独自の歴史があり、個人的な理由があるからです。

現代社会では、精神文化的に忠実さと安定が危機に瀕しているのは事実です。つい最近までは、永続性は文化の基本的な部分を成していました。ところが、現代では、私たちは使い捨ての文化、諸イデオロギーの崩壊(the fall of ideologies)、目まぐるしい軽佻浮薄の文化に囲まれて暮らしているのです。どれもこれも本当ですが、若者たちが軟弱で、彼らに永久的な選択を迫るのは大変なことなのだということも本当です。しかし、そこには常に何かより深い理由、より個人的な理由があるのです。危機の決定的な段階は一般的に、召命の選択とは相容れない愛情関係を伴う場合が多いのも事実です。これは一番分かりやすい局面ですが、問題をすべて恋愛に結びつけるのは単純化しすぎというものでしょう。なぜなら、それ以前の問題があるからです。満たされない心はいつも愛情を求めるものなのです。

現代文化の影響を否定はしませんが、より深い理由とそれ以前の問題とを考えると、召命の脆弱さの主な原因は次のようなものではないかという気がします。つまり、アイデンティティーとか愛情とか性の問題における人間的成熟さの欠如；信仰の動機の希薄さ、これはやがて信仰や祈りや内面の弱さとして現れてきます；養成過程における弱さ、その結果、兄弟が人間的成長や信仰、カリスマの価値を身につけることができない；兄弟共同体における不安、この不安感養成のプロセスの隠れた陰の部分構成し、兄弟共同体の文化の影響を受けます。共同体内の雰囲気は刺激に乏しく、初期養成の兄弟共同体の雰囲気としてふさわしくありません。

忠実さを支え、堅忍するように助ける方法

109 . 召命の脆弱さの原因は多種多様であり、忠実さを保ち、堅忍する方法も多様です。私たちが助けたいと思うならば、さまざまな選択肢があります。中でも、次の方法は最も重要であると思います。

110 . 会のすべての管区で、忠実に生きるということについて真剣に考えること。ある兄弟の退会の例をそれぞれの修道院や管区や分管区で取り上げて、忠実さに関するその共同体の生き方について考え、識別の態度を身に付けること。私たちは福音と私たちのカリスマに基づいて生きているか、あるいは少なくとも生きようと努力しているか？退会しそうな兄弟の危機に直面して、その兄弟がなぜ去っていかようとするのかと考えるのは当然のことです。しかし、私たちがなぜ踏みとどまっているのか、どのように奉獻生活を続けるべきかを考えることもまた必要です。

111 . 召命の司牧的配慮について吟味すること。ある地域が経験しようとしている歴史的瞬間が漁にふさわしい時と思えなくても（ルカ 5 : 4 参照）この仕事の手を休めてはなりません。「沖に漕ぎ出すことが必要（*Duc in altum*）」です。私たちは自分の召命とミッションのすばらしさを心から感じているなら、それを告げ知らせることを死んでも諦めてはなりません。宝を発見した人はそれを隠すことはできないのです。それを他者に伝える義務があるからです。種を蒔くのは私たちの仕事ですが、その実りは主にお任せしましょう。兄弟会全体の未来はそれにかかっているのです。

私たちの兄弟共同体が若者たちに開かれ、彼らに豊かな人間的体験のチャンスを与え、強力なキリスト教的な生活と、フランシスカンとしての生き方とミッションを分かち合うことができるためには、真剣に働かなければなりません。管区や分管区では、青少年司牧活動が召命の識別につながるような、「歓迎の家」とか「希望者の家」といった目的の明確な共同体を作る必要があります。ここで必要とされるのは、体験の柔軟性と多様性です。しかし、大切なことは、同伴のできる兄弟たちが保証されること、そして、志願期に入る人たちが、最初の識別がなされる召命の受け入れのための家で一定の時期を過ごすことです。

112 . もう一つの基本的な選択肢は、「人数や効率だけにとらわれず、平和な心で識別すること」¹⁶¹です。人数が少なくなっている時には、人数にとらわれやすくなりますし、現在抱えている仕事を継続する方法として新たな召命を「募る」ことを考えがちになります。問題はそういうことではありません。誰でも彼でも受け入れるということではありません。なぜなら、遅かれ早かれ、それでは逆効果になるからです。条件を下げることによって達成されることは凡庸さであり、存在意義を失うことにつながります。また、問題は効率を求めることでもありません。福音の意義と分かりやすさは人数や効率によるのではなく、私たちの生活の質によるのです。従って、識別

¹⁶¹ キリストからの再出発 18。

の期間にまず優先すべきことは、主の招き（必ずしもすべての人が私たちの生活様式を守ることによって主に従うように招かれているわけではありません）に応えること、そして、凡庸さは凡庸さを生むだけだということを中心に留めて、その応答の質を高めることです。最初から識別に注意を払うならば、エネルギーの節約になりますし、恐らくたくさん問題を避けることができるでしょう。

113 志願期はすべての養成の基本でありますから、志願期を重視することが必要です。志願期は、特に人間性の成熟という意味で、召命を確かめ、深めるのに大変重要な時期です。志願期は、自己認識と自己受容のために、また、自分の生い立ちを振り返り、自分の生活を情緒面・性的な面で強化し、心身の健康を見極め、自分の人生を自分の手でつかむのに不可欠の大切な時期です。また、信仰とキリスト者としての生活を強めるためにも大変重要な時期です。ですから、キリスト者の生活と個人的な祈りの生活に導き入れるための求道期とも言えます。志願期は、霊的同伴を体験し、豊かな人間関係とコミュニケーション能力を育むことによって兄弟共同体の生活を体験する重要な段階なのです。志願期を修練期予備軍とみなしたり、もう一つの教養課程とみなしたり、あるいは、適切なプログラムがないために統一に欠ける半端な期間とすることは避けねばなりません。

114 ．もう一つの主要な選択肢は、個々人に合わせた養成の手段を取ることです。それによって、養成は各人の深みのレベルにまで達することができます。そのためには、動機や感情などの情緒的側面、フランスカンとしての召命とミッションを感じた時のプロセス、養成の文化的固有性などに注意を払わなければなりません。

115 ．荘厳誓願前、および特に荘厳誓願宣立直後の時期には、個々人に合わせた養成手段として、個人的な霊的召命同伴が不可欠です。誓願の前に正しい自己認識を持つことが必要です。それは、誓願を立てる「私」と現実の「私」とが同じであるためです。また、志望者が私たちの生活様式を受け入れるようになる真の動機を発見することが必要です。そうした動機は福音的動機とあまりずれがあってはなりません。初期養成の時期には、「共同体による同伴」だけでは不十分です。個人的な霊的召命同伴が必要です。また、荘厳誓願宣立後に、誓願を立てたばかりの兄弟が失望して「自暴自棄」にならないようにするためにも、そのような同伴が必要です。退会者は荘厳誓願宣立後5年以内に多く出ており、その理由は個人的な霊的召命同伴の欠如です。

どの養成段階においても、聖霊の導きの中で生活すること、使徒職の体験、知的養成、人間としての成熟に注意を払わなければなりません。聖霊の導きの中での生活は、御言葉に耳を傾けること、個人的な祈りの体験、十字架についての観想、そして深い秘跡の生活によって培われます。聖霊が私たちの心の中で働かれるためには、内面の文化というものに投資しなければなりません。信仰の生活に投資すること、個人としてまた共同体としての祈りに投資することが必要です。養成は、若い兄弟たちの心に深い福音化とミッションの意識を芽生えさせるものでなくてはなりません。この芽生えが弱いと、召命の脆さという問題が容易に起こります。だからこそ、志望者を使徒職の体験のできる環境で養成することが必要なのです。それにより、彼らの知性と心を、仕

事についての考察と分かち合いと祈りを通じて、福音化することができるでしょう。その際、使徒職の体験には十分な準備が必要であり、絶えざる同伴と定期的な評価が欠かせないことを忘れてはなりません。深い知的養成は、召命を固めるのに役立ちます。しかし、そのためには、勉学は真剣に取り組むだけでなく、養成過程の一部として、フランシスカンとしての召命とミッションの要件を満たすものでなければなりません¹⁶²。最後に、忠実さを育む過程においては人間としての成熟が不可欠ですが、それは、人が自分の内面を深く見つめ、自分の過去と和解し、自分の生活に残された神の足跡を発見し、自分の未来を神と自分自身の体験に照らして見ることで初めて可能となります。

116. 各管区の、特に養成修道院の「召命を大切にする姿勢」(vocational culture) は召命を全うする(vocational fidelity)する上で役に立ちます。管区内の兄弟共同体の日常生活は養成過程および召命の全うに大きな影響を与えます。ですから、日課や兄弟的な雰囲気や人間関係がはっきりと見えるような兄弟共同体をつくることが重要です。その意味で、兄弟的共同生活を意味のあるものにすることが急務であると思います。それはつまり、特にその構成員である兄弟たちの信仰と愛の雰囲気に関して、および、私たちの生き方とミッションに対する愛の雰囲気に関して言っています。

117. 私個人としては、これらのステップをすべて踏んでも、退会者はなくならないうちかと思っています。しかし、すでに述べたことに注意を払うならば、退会者の数は減るであろうし、少なくとも、私たちの負い目は減るであろうと確信しています。

¹⁶² 2001年に発行された「勉学綱領」"In notitia veritatis proficere" および全兄弟会にあてた手紙「御言葉の香り、小さき兄弟の知的召命(ローマ2005年)は、召命とミッションを心に留めて、学問を養成過程に組み入れるための重要なヒントを与えてくれています。

第三部 信頼をもって未来に向き合う

118. 「皆さんは、さらにこれから築くべき偉大な歴史を持っています」¹⁶³。ヨハネ・パウロ 2 世のこの言葉は、賛美であると同時に挑戦でもあるように聞こえます。私たちは過去の栄光を、それがたとえ殉教者や聖人の栄光であっても、歌うだけで満足してはなりません。「私たちは先人たちの働きを賞賛するだけで満足することはできません。むしろ、彼らから鼓舞され、励まされて、現代という歴史的な時間の中で私たちにふさわしい部分を展開していかなければなりません。」¹⁶⁴

私たちは、聖性と大胆さと恐れのないさと創造性を 8 世紀にもわたって生き生きと保ちつづけ、今日もなお多くの兄弟たちの心と生活の中に生きつづける「偉大な師父」の息子であり、兄弟です。私たちは、新しい挑戦に対して新しい応えを出すために、未来に目を向けさせてくださり¹⁶⁵、創造的な忠実さ¹⁶⁶を保つ力を与えてくださる聖霊の導きに従うことによって、師父の聖性と大胆さと恐れのないさと創造性を、「勇気をもって新たに作る」¹⁶⁷ように勧められています。

私たちに求められていることは、鋭さに欠ける奉獻生活ではありません。つまり魅力に欠けるフランシスカンの奉獻生活を守ることにはエネルギーを注ぐのではなく、歴史のこの瞬間に忠実かつ積極的に生きることなのです。そうすることこそ、私たちの歩むべき道であり、そうすることによって、フランシスコのカリスマは現代の人々の心を捉え続けることができるのです。ちょうど多くの先人たちがイエス・キリストとその王国への情熱に燃えて、自分たちの生活を死滅させずに燦然と輝かせてきたように。

過去にしがみつきの過去を懐かしがっていても、結局退廃してしまいます。大切なことは冒険家になることでもなければ、回顧的になることでもありません。フランシスカンの奉獻生活に求められていることは、ただ一つ、それは、聖霊に身を委ねることです。聖霊の力だけが、「生ぬるい生活」や組織の習慣と惰性によって「息苦しくなった生活」から私たちを守ることができるのです。聖霊に身を委ねてこそ、信頼をもって未来に向き合うことができます。

では、私たちの生活とミッションは、どのようにあるべきでしょうか？私たちの生活を、魅力あふれた意義のある、しかも現代の人々に分かりやすいものにするために必要不可欠と思われるいくつかのステップを、これまで指摘してきました。小さき兄弟たちの生活には、聖霊が教会と世界に与えてくださった賜物として、未来があります。そのことは確かです。しかし、その未来

¹⁶³ 奉獻生活 110。

¹⁶⁴ 2003 年総集会総括文書 3。

¹⁶⁵ 奉獻生活 110 参照。

¹⁶⁶ 奉獻生活 37 参照。

¹⁶⁷ 奉獻生活 37。

が私たちの肩に大きくかかっていることも確かなのです。生活を新しくできるか否か、再建できるか否か、生活にあかしと意義という特徴を与えることができるか否かに、私たちの未来はかかっているのです。

今は夢を見ると同時に行動する時でもありますから、すぐに動き出すことが必要です。出発に当たって、また、願いと夢を具体的な行動の指針とするに当たって、必要不可欠と思われることをいくつか申し述べたいと思います。

識別の時

119 .最初にも述べましたが、私たちは危機的な時代に生きています。それは、世界的にも、また、特に昔からキリスト教やフランシスカンの伝統が連綿と続いている国々では、社会やフランシスカンの奉獻生活が根底から急速に変貌する時代です。

表向きは穏やかですが、内部では個人的不安が渦巻き、自分の生きていることに意味を見出すことができず、自分が何者であるかも分からず、不確かな未来に不安を抱いていることが多いのです。従って、今必要なことは、個人として、また共同体としての選択を明確かつ大胆に識別することです。それによって、私たちの生活のカリスマ的な基盤を再建することができ、福音に出会う、つまり、福音化されることができ、私たちの生活の預言的な側面を回復し、隣人である人々に福音をもたらすことができるでしょう。

何度も繰り返しているように、私たちは危機的な時代に生きています。しかし、どのようにしてそれを識別することができるのでしょうか？それをどのように位置付けることができるのでしょうか？それとどのように立ち向かうべきでしょうか？

危機に直面した時の私たちの態度は千差万別です。たとえば、a) 危機など存在しないかのように振舞うとか、b) 外的な要因だけで説明するにとどめ、自分には関わりのないことにするとか、c) 前の「現状」を回復したい一心で行動するとか、d) 起こっていることの意味を探し求め、日和見的な決断を下さないで、私たちのカリスマと現代が突きつける挑戦に照らして、時のしるしを識別するなどです。

この危機的な時代に私が抱いている夢をいくつか皆さんにお話ししましょう。

聖人たちの業績を称えるのではなく、私たちの魂の良き牧者である主を見つめ、艱難と迫害、恥辱と飢え、弱さと誘惑においても主に従う（訓戒の言葉 6 参照）ようになることを願い、希望し、求めています。

疲れと幻滅と懐疑主義を克服して、自分の責任を引き受け、神の御計画に従って未来を建設するために働き、今の時を異国人、寄留者、また信仰によって自分が遺産として受け継ぐことになる土地に出て行く旅人として（ヘブライ 11 : 8、13 参照）、生きることを願い、希望し、

求めています。

目の前から消えてしまった過去の世界に対する郷愁から癒されて、聖霊の力をいただき、新しい世界、より良いふるさと、遠くからでも見ることのできる未来（ヘブライ 11：13 参照）に向かって出発することを願い、希望し、求めています。

私たちの生活様式への創造的な忠実さを保ちつつ、時を識別し、新しい形の生き方やミッションを識別することに献身している兄弟たちが、その意思を衰えさせることなく、現代は種まきの時期であり、今日蒔いた種は明日には実ることを知って、仮にその実りを味わうことがなくても、満足することを願い、希望し、求めています。

愛とあかしの時

120. 私たちは当然のこととして、また必然的に、私たちの生活様式の「正統性」を守ろうとこれまでずっと努力してきました。この努力は、自分たちこそは最もすぐれているという優越感の結果、一度ならずも、攻撃と断絶を生みました。私たちは当然のこととして、また必然的に、私たちの生活様式のすばらしさと徹底性を強調してきましたが、その結果、私たちの生活と価値観を一つのイデオロギーに貶めるというリスク、生活を宣べ伝えるということとイデオロギーを宣べ伝えることを混同するというリスク、そして、体験を美しくても現代人の心に届かない様式に置き換えるというリスクを冒してきたのです。

今は、スローガンや響きの良い言葉で満足すべき時ではありません。今こそは、愛とあかしの時です。今こそは、信じることが困難で、しかも頭だけは満たしてくれるが心は満たしてくれないイデオロギーや演説に懐疑的なこの世界に私たちを近づけてくれる道筋を開く時なのです。あかしとなり心から愛する者だけがこの世界で正当な発言権を持つ時が来たようです。現代世界は、教師よりもあかし人を必要としています。今はまた、愛とあかしのために私たちの生活を、語のあらゆる意味において「福音化」し、知識を深める時なのです。

ここでも再び、私の夢を申し述べたいと思います。

私は、兄弟たちが独占的な愛ではなく、自己犠牲的な愛で愛し合うような兄弟会を夢見ています。そのような愛は、自分の殻を破り、自分を超えて、自己と和解するように、そして神と他者に出会うように導いてくれるからです¹⁶⁸。

私は、私たち兄弟の生活が主イエス・キリストの福音にますます合致したものとなるような兄弟会を夢見ています。そこでは、兄弟たちの行動が教えに矛盾することなく、兄弟たちが日を重ねるごとにさらに本物となるような兄弟会です。

私は、兄弟たちが「自分の目を見たもの、よく見て、手で触れたもの、すなわち、命の言葉について」（1ヨハネ 1：1）まことのあかし人となるような兄弟会を夢見ています。

私は、兄弟たちがイエスの生き方の新鮮さ、「最も小さき人々」との触れ合いの新鮮さ、父なる神（Abba）の激しい愛の新鮮さを私たちの生活に再び浸透させることができるような兄弟

¹⁶⁸ 回勅「神は愛」6, 7 参照。

会を夢見ています。

私は、兄弟たちが神と人類に対する愛と情熱の緊急性を感じることができるような兄弟会を夢見ています。

質問と提案の時

121 . 私たちキリスト者は、世間の人々に一つの排他的真理を提示することはできません。なぜなら、現代社会ではさまざまな思考がそれなりの真理を持っているからです。ポストモダンの人々にとって、言葉はもはや永遠の真理を伝えるものではなく、数ある意見のうちの一つを伝える気まぐれな手段に過ぎません。キリストを信じる私たちは、そうした人々の心を捉えるためには、既存の真理ではなく、自分も探し求めている真理、疑問を抱いている真理、確信が持てないでいる真理を伝える必要があります。なぜなら、私たちは探し求める人々と共に探し求め、尋ね歩く人々と共に尋ね歩き、不安を抱える人々と不安を共有しているからです。そして私たちは、そのような「意見を持つ人間」を、神が愛されるがゆえに、愛するのです。

現代は、対話の時、提案の時であって、押し付ける時ではありません。

現代は、小さき者の態度で生きる時、生きて学ぶ時、多くの声の中の一つにすぎない、真理に飢え乾くただの兄弟であるべき時です。

現代は、旅の途上にいる兄弟であるべき時、探し求めている真理、疑問に思っている真理、恐れと不安を抱いている真理を伝えるべき時なのです。

「この時」に忠実であるために、私は本会が次のようであることを願い、望み、求めます。
私たち兄弟が探し求める人と共に探し求め、尋ね歩く人と共に尋ね歩き、自問する人と共に自問するような兄弟会；
私たち兄弟が不安を抱える人とその不安を共有できるような兄弟会；
私たち兄弟が対話を教会と本会の真の使命と考えることができるような兄弟会；
私たち兄弟が自分自身を世界に伝える言葉とし、メッセージとすることを急務と感ぜられるような兄弟会。¹⁶⁹

自由とおおらかさの時

122 . 効率、生産性など、現代人はこれらの犠牲者です。そして私たちもまた然りです。私たちは生産高と実用性が疑問の余地のない「ドグマ」とされている価値体系の奴隷となっています。私たちは機能性の奴隷なのです。すべてが役に立たなくてはなりません。私たちは実際、奴隷のように捕われた世界であたかも自由であるかのように信じ込ませる重大な欺瞞の犠牲者なのです。

¹⁶⁹ Cf. *ESu* 65.

今こそ自由とおおらかさの時、連帯と真の交わりを学ぶ時です。連帯と真の交わりは己の利益を顧みない自己犠牲から生まれます。今はまた、本当の意味で私たちを自由にしてくれる真理と誠実さを身に付ける時でもあります。

ここで、再びわたしの夢と願いを申し述べたいと思います。

私たち兄弟が貢献の度合いによってではなく、ありのままに互いに心から愛し合うことのできる兄弟会；

私たち兄弟が人間関係において自由とおおらかさを体験できるような兄弟会；

私たち兄弟が、真理と愛のみがもたらす自由のうちに、幸せに生きることができるような兄弟会；

私たち兄弟が、仕事に追われることなく、また、重圧で神経が疲れることなく、生活とミッションにおいていっそう大きな「自由の時間」を持つことができるような兄弟会；

交わりと兄弟愛の時

123. 私たちは断絶と恐れによって分断された世界、しかし交わりと兄弟愛を渴望する世界に住んでいます。また、私たちの住んでいるこの世界は緊張が絶えません。兄弟愛は私たちの生活様式の本質的な要素ですが、本当の意味で兄弟であるということは難しいことです。私たちは兄弟愛と交わりの必要性を感じていますが、それらを打ち立てるよりも、消費していることの方が多いのです。私たちは兄弟であり、会のことを兄弟会であると宣言しながら早くも分裂しています。イデオロギーによって引き裂かれ、民族の壁や世代の壁を作っています。

今は兄弟愛と交わりの時です。兄弟愛と交わりは、いくら築いても完成することのないものです。兄弟愛と交わりは、人間の弱さと和解とゆるしと慈しみの上に築かれるものであり、兄弟的生活を再生させるためには、自己犠牲と無私の心が必要です。兄弟愛と交わりは、会員同士の喜びに満ちた真に兄弟的な関係によって支えられるものです。兄弟愛と交わりは、人間としての徳を磨き、広く深い交わりを育むことによって、また、個人としてかつ共同体としての祈りを通して養われるものであり、その中心には常に神の御言葉と御聖体があります。

私が願い、希望し、求めているものとは、

私たち兄弟が交わりと他者受容と自己犠牲の持つ限りないエネルギーを共有し生かすような兄弟会；

私たち兄弟が自分の過去を打ち明けたり、親密さを分かち合ったり、信仰や聖霊の恵みを分かち合ったりすることを恐れなくなり、その結果、兄弟たちが信仰を伝え合うことができるようになる兄弟会；

私たち兄弟が互いに相手を「主からいただいた賜物」として受け入れ、共通の救いを体験することができるような兄弟会；

私たち兄弟が自分の意見を述べ合い、進捗状況を検討・評価し、共に考え計画するような兄

弟会；

私たち兄弟が神の愛と互いに対する愛とに基づく深い友情を体験し、それによって、互いの傷をゆるしのぶどう酒と和解の油でもって癒すことができるような兄弟会；

私たち兄弟が互いに負い目を持っており、一つの家族となるように召されていることを感じ取ることでできる兄弟会。家族となることによって、私たちは一つに結ばれ、絶えざる倦むことのない深い愛によって愛され、心にかけていると実感することができます。

私たち兄弟が自分の召命とミッション（宣教・使命）の賜物をいつも祝うことができ、共にいる喜びと「キリストのうちに結ばれた家族」を形成する喜びを体験することのできる兄弟会。

協力の時

124. 2003年の総集会では、「管区間の協力」が「未来を支えるもの」であるとして、優先課題として指摘されました¹⁷⁰。兄弟ヘルマン・シャルックは、1992年に「共通の未来を支える連帯の文化」を身につける必要性について語っています。

1997年の総集会と、総評議会、および兄弟ジャコモ・ビニが2003年の総集会に提出した報告書がいみじくも指摘し、私自身もすでに述べましたように、管区間の協力の分野で大きな進展がありました。しかし、この連帯と協力の新しい文化は、管区の中に、協議会の中に、同じ管区内の修道院の中に、そして会全体の中にいつも新しい居場所を与えられる必要があります。確かに、世界が小さな村となってきた今、自分の置かれた場所だけを考える危険性は大いにあります。この誘惑から逃れるために、「優先課題」は私たちにもっと協力するようにと促しています。

この協力と連帯の文化は、困っている管区を助けるのに重要なだけでなく、兄弟的生活のあかし（*signum fraternitatis*）となるようにとの私たちの召命に応え、その召命を教会と世界の中で生き抜くためにも重要なものです。

この要求に応えるために、私は次のことを願い、希望し、求めます。

諸管区が平等に、管区間のつながりを受け入れ、会の普遍的な精神を再生して、会への帰属意識を強めることができるような兄弟会；

連帯と管区間の協力の文化が、養成と学問において生かされ、また、「諸国の民への」ミッションにおいても、分裂した場所においても、共通のプロジェクトにおいても生かされるような兄弟会；

諸管区が、兄弟数の最も少ない管区をも含めて、会全体の活動やプロジェクトに参加するために、自分の管区の兄弟を会に惜しみなく差し出す用意のある兄弟会。

再編の時

¹⁷⁰ 総集会の提案 16。

125. 人数が減っている現代においては、特にある管区では、組織によって窒息させられたくないと思うならば、また、それによって生活が振り回され、カリスマが低下するのを防ぎたいならば、一致団結する時であり、再編する時でもあります。

多くの管区が、兄弟の人数の減少や高齢化のために、たった数年前に維持できていた状況を維持できなくなっています。時には、強化するために組織を閉じる必要も出てきます。それだけでなく、新しい要求が新しい応えを求めているのです。新しい応えを出すためには、今のあり方や活動を一部再編する必要があります。その場合、新たに開くために、閉じる必要があるのです。

ここで再び皆さんに私の願いを申し述べたいと思います。

時のしるしと場所のしるしに注意を払いながら、私たちのあり方と活動を真剣に識別するように願い、希望し、求めます。

あり方と活動を見直すこの時に、私たちの召命への応答と福音的な生き方を個人としても、また、組織としても活性化させることが優先されることを願い、希望し、求めます。

あり方と活動を見直すこの時に、自分の利益を考えるのではなく、人間のすばらしさと尊厳が絶えず傷つけられている、「忘れられた、非人間的」な修道院のことを考えるように願い、希望し、求めます。

統合と融合の時

126. さまざまな管区の抱える弱点が、フランスカンプロジェクトの推し進める目標の達成を阻むことがあります。そのような場合、新しい組織を作って、いくつかの管区を統合することも可能です。召命の未来が危うくなったような時には、時を移さずに、統合や融合に取り掛かるべきです。統合や融合を首尾よく成し遂げるには時間がかかるからです。このようなことを行ったことは会の歴史の中でも、一度ならずありました。

このようなプロセスを、死が進行している結果だと考えてはなりません。否定的なプロセスの結果と捉えるべきではないのです。むしろ、より大きな協力の可能性が生まれたしるしとして、また、フランスカンの生活とミッションの復活のしるしとして捉えるべきです。

これは必ずしも容易なことではありませんが、これしか方法がない場合もあるのです。従って、私は次のことを願い、希望し、求めます：

消滅するまで統合を待たないこと；

これらのプロセスを信仰の視点からじっくりと時のしるしと捉えること。これらのしるしを通して、歴史の主は私たちに語りかけてくださるのです。

結合の時

127.すでに述べた状況のほかに、会は少なくとも人間の目でみれば、はるかに明るい未来を持った状況も体験しています。たとえば、できたばかりのために存在感は薄いですが、召命の前途は明るい国々があります。そのような場合には、他の面でゆとりのある管区がこれらの新しい拠点を援助します。このようにしてこそ、新しい拠点が強化され、それなりの道筋を整えて、後日に助けてくれた管区に恩返しをすることができるのです。

このようなプロセスについて、私は次のことを願い、希望し、求めます：

財政的にゆとりのある管区は、困っているが恐らく召命はもっと多い管区を助けるために、連帯基金 (solidarity fund) などによって協力すること。これは、新しい土地における会の活動に協力する一つの方法です。

人材に恵まれた管区は、こうした会の新しいプロジェクトに人員を送り込むことをためらわないこと。特に養成の分野での援助は重要です。

新しい管区が、明確なフランシスカンの福音生活プロジェクトを持ち、私たちの生活様式から生まれる優先課題を最優先することによって、強化されること。

結論 沖に漕ぎ出しなさい (Duc in altum!)

128. 第二バチカン公会議以来、この臨時総集会までの間に、私たちの生活とミッションはさまざまな明るい時期と暗い時期を過ごしてきましたが、今でも光と影、活力のしるし、そして回心への招きを体験しています。旅につき物の困難さを体験することと、同時に最終目的地に通じるいくつかの目的地にたどり着く喜びを体験することは、旅人や巡礼者に与えられた宿命であり、恵みです。

現時点では、回答よりも質問の方が多いでしょうが、それは別に問題ではありません。問題は自問したり、不思議に思ったりしなくなること、探求心を失うことで、そのほうが深刻です。今は事態がよく見えていないかもしれないし、雲に視界を遮られて遠くが見えないかもしれませんが、一つだけ確かなことがあります。それは、未来は私たちのものだということです。それも、私たちの努力によるのではなく、私たちに与えられる恵みによるということです。私たちの生活様式は人間が考え出したものではなく、未来へと後押ししてくださる聖霊の賜物でありますから、未来は私たちのものなのです¹⁷¹。私たちの冒険は聖霊の冒険でもあります。

129. 繰り返し申し上げますが、私たちは自信を持って未来に目を向けること、未来を期待すること、預言となることが必要です。ただし、感謝の気持ちで過去を振り返ること、そして、未来は情熱をもって現在を生きることによって作られることを決して忘れてはなりません。私たちは、私たちの生活とミッションは共に歩むことによって確かなものになるのだということを確認しつつ、暁に向かって、光といのちが生まれるところに向かって、地平線が広がるところに向かって歩いて行かねばなりません。私たちの前に伸びている道は平坦な道ではないでしょう。だからこそ、主と交わりつつ、兄弟と交わりつつ、教会と交わりつつ、兄弟姉妹であるすべての人と交わりつつ歩んでいくことが必要なのです。

旅路を共に歩むことにより、旅につき物の試練を乗り越えることができ、小さき兄弟として、またイエスの弟子として成長することができます。この恵みの時に一人で歩いてはいけません。私たちの召命は共にいただいた召命であり (convocation)、私たちの生活は共に生きることであり、私たちのミッションは分かち合うことであり、交わりを生み出すことなのです。この呼びかけに応えることこそ、私たちがイエスの弟子であることを示す最も信頼のできるしるしなのです。

130. この「恵みの時」に、聖霊がどこに私たちを導こうとしておられるのかを知るために、また、約束を信じる信仰によって「約束の地」を一目見るために、未来にたびたび目を向ける必要があります。現代のような複雑で困難な時代には、緊張や試練から逃れることはできませんが、さま

¹⁷¹ 奉獻生活 110 参照。

ざまなチャンスにも恵まれています¹⁷²。そのような時代に、私たちは自分の生活とミッションを再建しなければなりません。そのためには、会則や会憲や優先課題に示されているように、「私たちのすべて」(PrG 3 参照)であられる方に集中する必要、私たちの生活とミッションの本質¹⁷³に集中する必要があります。それは、この現代社会の兄弟姉妹のところに出かけるためなのです。このようにしてこそ、バラバラになったり、皮相的になったり、自分の殻に閉じこもったりすることを防ぐことができます。このようにして初めて、私たちの生活は、人生の意味を求めている多くの人々¹⁷⁴のパン種となることができるのです。

私たちが生きなければならない現代は、辛抱して待つ時でもあります。それはちょうど聖金曜日と栄光の聖土曜日の明け方の間のようです。現代は、寝ずに起きている時、歩哨と賢い乙女たちの時です。現代は、追放された流浪の民の時であり、従って、預言者のように、主のささやくような声と民の叫びに耳を傾け、心に留めることのできる人々、未来を待ち望み、忍耐強く、見えないものへの希望を持って、拒絶されることも辞さない人々の時でもあります。

現代はルーティーンを打破する時、閉ざされた環境から出る時、時と場所のしるしの中で主の声に耳を傾ける時です。ですから、現代は識別の時であり、創造的な忠実さを守る時であり、真の再建を保証する時なのです¹⁷⁵。現代は、訪問(ルカ 1:39-56 参照)を再現する絶好の時であり、神と人類との出会いの神秘を再現する絶好の時でもあります。神との出会いのお陰で不毛はいのちへと変貌したのです。現代は夢見る時であると同時に、行動する時でもあります。結果がわからなくても、それはたいしたことではありません。なぜなら、東洋のことわざにもあるように、「自分の花を見ることのできる種子はない」からです。大切なのは、働き始めることです。ここで、タルムードの次の言葉を思い起こしましょう。「仕事を終わらせる義務はないが、仕事を始めることを拒む自由もない。」これは、私たちが「朝の歩哨」であり、絶えず主を見つめつつ希望に満ちて未来を建設するために働いていることを感じながら、勇気と創造性をもって引き受けるべき責任です。

131 . 兄弟の皆さん、主は私たちに次のように語りかけておられると思います。「あなたが神を捜し求めるなら、また、あなたが潔白な正しい人であるなら、神は必ずあなたを顧み、あなたの権利を認めて、あなたの家を元どおりにしてくださる。過去のあなたは小さなものであったが、未来のあなたは非常に大きくなるであろう」(ヨブ記 8:7)。

私たちと共に歩いてくださる歴史の主信頼して出発しましょう。イエスの母であり、私たちの母でもあるマリアが道中に同伴してくださり、弟子として、イエスにもっと忠実に従うように、主と私たちのカリスマに、そして、現代の人々に忠実であるように導いてくださいます。祝福された希望の聖母は、十字架の下に控えて、復活の朝を迎えるように導いてくださるのです。私た

¹⁷² 奉獻生活 13 参照。

¹⁷³ 2003 年総集会総括文書 2 参照。

¹⁷⁴ 2003 年総集会総括文書 2 参照。

¹⁷⁵ 2003 年総集会総括文書 6、7、奉獻生活 37 参照。

ちの師父であり兄弟であり、小さき者の手本（forma minorum）であるフランシスコは、私たちと共にいたいと望んでおられます。フランシスコは彼の生活様式を大切にすゝ私たち一人一人を見守ってくれるでしょう。

「起き上がりなさい。床を担いで歩きなさい」（ヨハネ 5：8）、「なぜ、うろたえているのか」（ルカ 24：37）、「私は世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」（マタイ 28：20）。さあ、起き上がり、勇気と大胆さをもって始めましょう。

ACRONYMS AND ABBREVIATIONS

A. Sacred Scripture

Acts	<i>Acts of the Apostles.</i>
Ap	<i>Apocalypse.</i>
1 Cor	<i>First Letter to the Corinthians.</i>
2 Cor	<i>Second Letter to the Corinthians.</i>
Ex	<i>Exodus.</i>
Gal	<i>Letter to the Galatians.</i>
Gn	<i>Genesis.</i>
Heb	<i>Letter to the Hebrews.</i>
Is	<i>Isaiah.</i>
1Jn	<i>First Letter of St. John.</i>
Jn	<i>The Gospel according to John.</i>
Jr	<i>Jeremiah.</i>
1K	<i>First Book of Kings.</i>
2K	<i>Second Book of Kings.</i>
Lk	<i>The Gospel according to Luke.</i>
Mk	<i>The Gospel according to Mark.</i>
Mt	<i>The Gospel according to Matthew.</i>
1P	<i>First Letter of St. Peter.</i>
Phil	<i>Letter to the Philippians.</i>
Ps	<i>The Psalms.</i>
Rom	<i>Letter to the Romans.</i>
1Thess	<i>First Letter to the Thessalonians.</i>

The Writings of St. Francis

Adm	<i>Admonitions.</i>
LtAnt	<i>Letter to St. Anthony.</i>
1LtCus	<i>First Letter to the Custodes.</i>
LtCly	<i>Letter to the Clergy</i>
LtOrd	<i>Letter to the Order.</i>
PrG	<i>Praises of God.</i>
1R	<i>The unapproved Rule (1221).</i>
2R	<i>The Approved Rule (1223).</i>
Test	<i>The Testament of St. Francis.</i>

TestS *The Testament of Siena.*

Biographies of St. Francis and Writings of St. Clare

1Cel *Celano: First Life of St. Francis.*
2Cel *Celano: Second Life of St. Francis.*
LegMj *Major Legend, of St. Bonaventure.*
2LtCl *Second Letter of St. Clare to Agnes of Prague.*
3LtCl *Third Letter of St. Clare to Agnes of Prague.*
2MP *Mirror of Perfection, larger version.*
TestCl *The Testament of St. Clare.*

Other Acronyms

DCE *Deus caritas est*, Encyclical Letter of Benedict XVI, Rome 2006.
EN *Evangelii Nuntiandi*, Apostolic Exhortation of Paul VI, 1975.
ESA *Ecclesiae Sanctae*, Apostolic Letter, Post-Conciliar Motu Proprio.
ESu *Ecclesiam Suam*, Encyclical Letter of Paul VI, 1964.
ET *Evangelica Testificatio*, Apostolic Exhortation of Paul VI, Rome 1971.
FEGC *To Fill the Earth with the Gospel of Christ*, Hermann Schalück, Rome, 1996.
FLC *Fraternal Life in Community*, CICLSAL, Rome 1994.
FW *Flavour of the Word*. José Rodríguez Carballo, Rome 2005.
GGCC *General Constitutions* of the Order of Friars Minor.
GGSS *General Statutes* of the Order of Friars Minor.
LgP *May the Lord give you Peace!* Final Document of 2003 General Chapter.
MR *Mutuae Relationes*, Directive of CICLSAL, Rome 1978
NMI Apostolic Letter *Novo Millennio Ineunte*, 2001, John Paul II.
OF *Ongoing Formation in the Order of Friars Minor*, Rome 1995.
PI *Potissimum Institutioni*, CICLSAL, 1990
RFF *Ratio Formationis Franciscanae*, prepared by the General Secretariat for Formation and Studies, Rome, 2001.
RS *Ratio Studiorum*, “*In notitia veritatis proficer*”, prepared by the General Secretariat OFM for Formation and Studies, Rome, 2003.
SAFC *Starting Afresh from Christ*. CICLSAL 2001.
SC *Sacrosanctum Concilium*. II Vatican Council.
SSVG *Statutes for General Visitation and Presidency of the Provincial Chapter*.
VC *Vita Consecrata*, Post Synodal Apostolic Exhortation 1996, John Paul II
VO *Vocation of the Order Today*, General Chapter of Madrid, 1973